

平成 8 年度 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告

No.VIII 中高年のスポーツ参加をめぐる多様化と
組織化に関する社会学的研究

—第 1 報—

財団法人 日本体育協会
スポーツ科学専門委員会

平成 8 年度 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告

No.VIII 中高年のスポーツ参加をめぐる多様化と組織化に関する社会学的研究

— 第 1 報 —

報 告 者 (財)日本体育協会・中高年のスポーツ参加をめぐる多様化と組織化
に関する社会学的研究班

班 長 嘉戸 健¹⁾

班 員 加藤 爽子²⁾ 菊 幸一³⁾ 宮内 孝知⁴⁾ 山口 泰雄⁵⁾

担当研究員 伊藤 静夫⁶⁾

目 次

| | |
|-----------------------------|----|
| 第 1 章 研究の目的、方法、調査の実施状況..... | 2 |
| 第 2 章 結果・考察..... | 4 |
| 1. 調査対象者の特性..... | 4 |
| 2. 日常のスポーツ参加の状況..... | 9 |
| 3. 大会参加について..... | 17 |
| 4. 過去のスポーツ活動の状況..... | 31 |
| 5. スポーツ活動に対する「のめり込み」意識..... | 42 |
| 6. QOL・余暇観・余暇活動の状況 | 53 |
| 7. スポーツ実施上の問題・悩み..... | 62 |
| 第 3 章 まとめ・提言..... | 66 |

〔資料〕

中高年のスポーツ参加に関するアンケート調査用紙

1) 東京学芸大学 2) 東京学芸大学附属高校大泉校舎 3) 奈良女子大学 4) 早稲田大学

5) 神戸大学 6) 日本体育協会スポーツ科学研究所

第1章 研究の目的、方法、調査の実施状況

1. 研究の目的

1. 1 研究の目的（3ヶ年）

中高年による伝統的なスポーツ種目への高度化型のスポーツ参加およびニュースポーツ種目と呼ばれる新しいスポーツ種目を含む大衆化型スポーツ参加にかかる参加意識や参加形式等の実態調査を通じて、中高年層のスポーツ参加の多様化と組織化について明らかにするとともに、中高年スポーツにおけるそれらのスポーツの可能性と限界を明らかにし、中高年スポーツの振興と指導に関する基礎資料を得ることを目的とする。

1. 2 研究計画・各年次の研究目的

・ 1年次…中高年のスポーツ参加をめぐる多様化の分析 1=高度化型（本年度）

伝統的な種目における高度化を目指す中高年スポーツ競技者の大会参加状況や意識、スポーツキャリア、社会的背景等の実態調査から高度化型の中高年スポーツ参加者の特徴と問題等について考察する。

・ 2年次…中高年のスポーツ参加をめぐる多様化の分析 2=大衆化型

ニュースポーツを含む大衆化型のスポーツ参加の日常化を目指す中高年参加者の意識、スポーツキャリア、社会的背景等の実態とその要因を考察する。また、1年次で行われた調査結果との比較分析を行い、その異同を明らかにしながら、中高年のスポーツ参加をめぐる高度化と大衆化の問題点をう探る。

・ 3年次…中高年のスポーツ参加をめぐる組織化の方向性と総括的分析

1年次、2年次で得られた基礎資料をもとに、中高年のスポーツ参加をめぐる高度化型スポーツ参加および大衆化型スポーツ参加の組織の実態ならびに両者を結ぶ組織のあり方を検討する。高度化型、大衆化型の二つの参加タイプに典型的なスポーツ組織や団体、クラブ等への調査に

よって、その理念や運営形態、参加者の意識等を分析し、また、これまでの調査結果との比較検討を通じて、今後のわが国における中高年スポーツ組織のあり方を総合的に考察する。

2. 研究の方法等

2. 1 研究方法

主として質問紙調査法によるデータの収集と分析。

2. 2 調査方法

1 調査スポーツ種目、調査対象競技会及び対象者

①陸上競技（男女）…全日本マスターズ大会の

10種目の1・2位程度の選手約200名

②水泳（男女）…日本マスターズ選手権の10種

目の1・2位程度の選手約200名

③テニス（男女）…全日本ローンコートベテラン大会3種目上位入賞者約200名

④ソフトボール（男子）…全日本の壮年大会（40代）、実年大会（50代）、シニア大会（60代）の1・2位程度のチームから約200名

⑤バスケットボール（女子）…全国ママさん交歓大会上位チームから約200名

合計約1000名

2 調査期日、調査票の配付・回収方法

①調査期日…平成8年10月上旬～12月下旬

②調査票の配付・回収方法…リストアップされた調査対象者ないしは所属チームへの郵送による配付・回収方式

2. 3 調査票の回収状況

| | 男 | 女 | 計 |
|-----------|-----|-----|-----|
| ①陸上競技 | 102 | 70 | 172 |
| ②水泳 | 78 | 78 | 156 |
| ③テニス | 64 | 37 | 101 |
| ④ソフトボール | 165 | 0 | 165 |
| ⑤バスケットボール | 0 | 169 | 169 |
| 計 | 409 | 354 | 763 |

3. 調査内容

- ①参加競技会のレベル及び参加回数、入賞回数
- ②全国レベル大会への参加目的
- ③練習の程度
- ④所属スポーツクラブの規模や活動状況
- ⑤スポーツ参加の費用

⑥過去のスポーツ活動の状況－小中高校、大学、
社会人

⑦スポーツ観・余暇観・スポーツ以外のスポート活動等

⑧スポーツ実施上の問題点 等

(嘉戸 健)

第2章 結果・考察

1. 調査対象者の特性

報告者 嘉戸 僥¹⁾

1. 1 性・年齢（図1-1, 図1-2）

①調査対象となった各種目の競技大会の上位入賞者数の違いによって各運動種目の調査対象者数（回収数）は異なっている。

②各運動種目の被調査者を年齢別に見ると各種目に参加する中高年競技者（40歳以上）の年齢についての大まかな特徴が分かる。

- ・陸上競技、水泳、テニスの男女及びソフトボールの男子は概ね各年代にわたって参加者がみられる。これはこれらの種目の競技会が年代別に開催されることを反映していることが大きな要因であるが、同時に40代から70歳近くまで競技志向型の参加者がいるということも物語っているといえよう。

- ・60歳以上の比較的年齢の高い参加者は、水泳の男女（50%以上）に際立っており、次いでテニス男子（44%）、陸上男子（33%）、テニス女子（30%）、陸上女子（23%）、ソフトボール男子（22%）の順になっている。しかし、60歳以上はバスケットボール女子では2%にすぎない。

- ・バスケットボール女子は40代の中年層が8割を占めており、バスケットボール競技の体力的特徴が参加年齢に影響しているといえよう。

1. 2 学歴（表1-1, 図1-3）

①調査対象者全体の最終学歴は、高校卒程度が約5割、大学卒程度が約4割の構成比で、比較的学歴は高いといえる。この傾向は男女ともほぼ類似している。

②種目別・性別では、大学卒程度が最も高い比率を示しているのはテニスの男子（77%）で、

次いで水泳の男子（62%）、陸上の男子（52%）、テニスの女子（49%）、バスケットボールの女子（46%）、陸上の女子（42%）、水泳の女子（24%）、ソフトボールの男子（15%）の順になっている。高校卒以下程度の比率が高いのは、水泳の女子（74%）で、次いでソフトボールの男子（84%）である。

③以上のことから、テニス、陸上、バスケットボール（女子）、水泳（男子）の高度化志向の中高年競技者の特徴のひとつとして学歴の高さを指摘することができよう。

1. 3 職業（表1-2, 図1-4）

①調査対象者となった全ての中高年競技者の内、約75%が職をもっており、無職は約25%と少ない。

②年代別に見ると、40~50代の有職率は約8割であるのに対して、60代以上では5割と低くなっている。

③性別では、男子の有職率（85%）は女子のそれ（61%）よりかなり高い。

④性別、年代別に見ると、40~50代では男子の有職率（98%）は女子のそれ（67%）よりかなり高い。また、60代以上では、男子の有職率（59%）は女子のそれ（35%）よりかなり高い。

⑤種目別、性別に見ると、男子ではソフトボールの有職率が89%と最も高く、水泳は74%と低い。女子ではバスケットボールの有職率が70%と最も高く、テニスと水泳は43%と低い。これは男子ソフトボールと女子バスケットボールでは他の種目に比べ、参加者が比較的若

1) 東京学芸大学

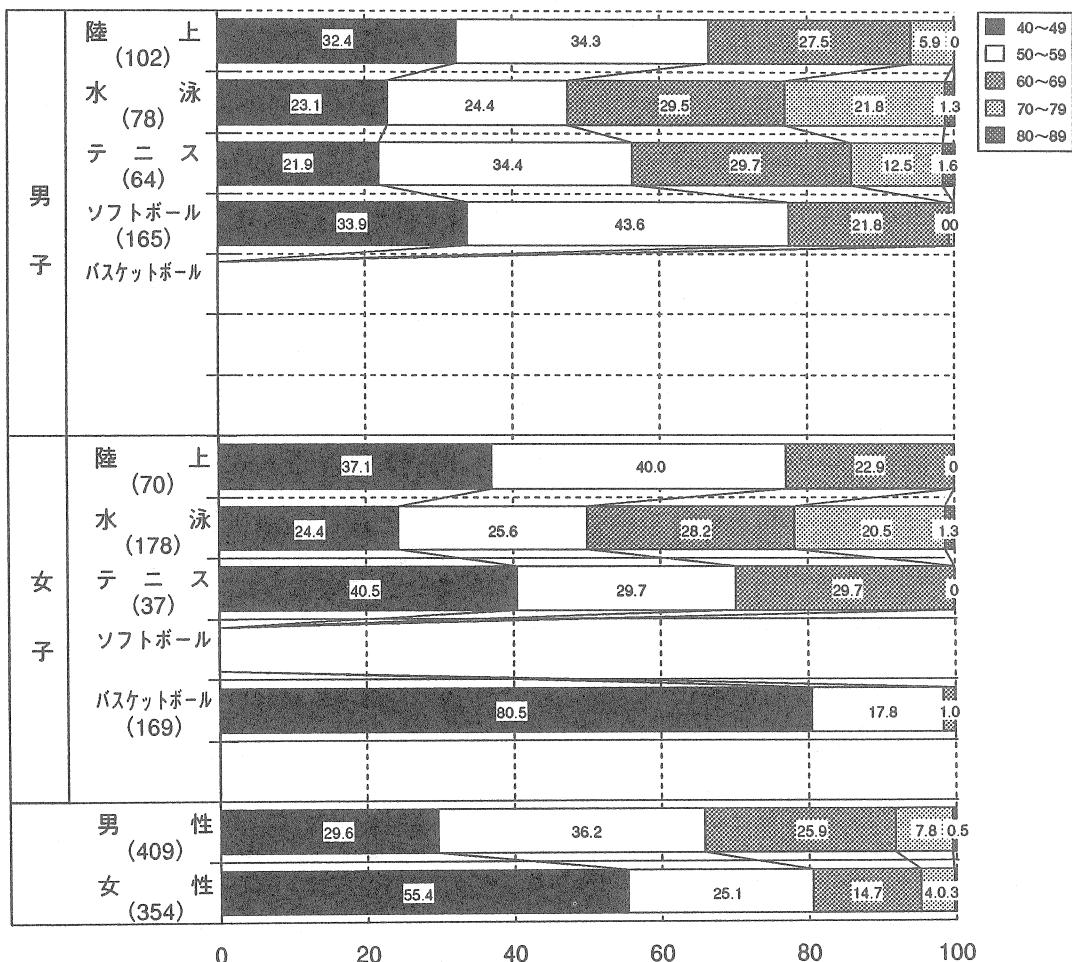


図1-1 調査対象者の年齢階層 (10才別)

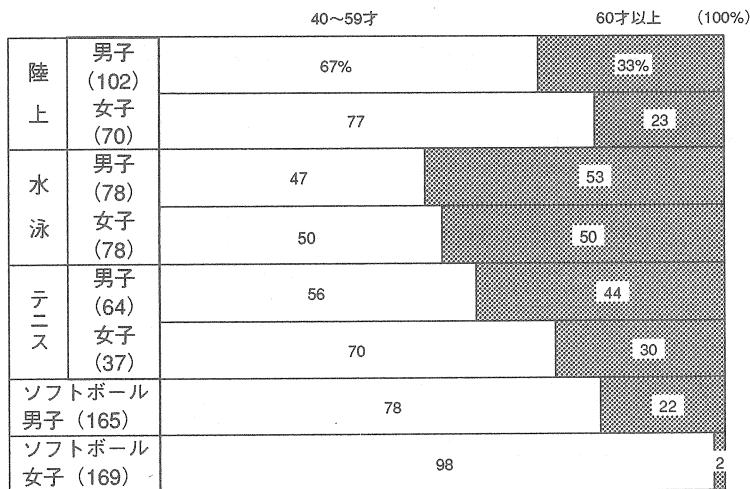


図1-2 調査対象者の年齢階層 (40・50代, 60代別)

表 1-1 調査対象者の最終学歴

| | | 全 体 | 義務教育卒程度 | 高校卒程度 | 大学卒程度 | その他・NA |
|-----------|---|------------|----------|-----------|-----------|--------|
| 陸上競技 | 男 | 102(100.0) | 8(7.8) | 40(39.2) | 53(52.0) | 1(1.0) |
| | 女 | 70(100.0) | 5(7.1) | 35(50.0) | 29(41.5) | 1(1.4) |
| | 計 | 172(100.0) | 13(7.5) | 75(43.6) | 82(47.7) | 2(1.2) |
| 水泳 | 男 | 78(100.0) | 3(3.8) | 27(34.6) | 48(61.6) | 0(0) |
| | 女 | 78(100.0) | 3(3.8) | 55(70.5) | 19(24.4) | 1(1.3) |
| | 計 | 156(100.0) | 6(3.8) | 82(52.6) | 67(43.0) | 1(0.6) |
| テニス | 男 | 64(100.0) | 4(6.2) | 10(52.6) | 49(76.6) | 1(1.6) |
| | 女 | 37(100.0) | 0(0) | 18(48.6) | 18(48.6) | 1(2.8) |
| | 計 | 101(100.0) | 4(4.0) | 28(27.7) | 67(66.3) | 2(2.0) |
| ソフトボール | 男 | 165(100.0) | 25(15.2) | 113(68.4) | 25(15.2) | 2(1.2) |
| | 女 | — | — | — | — | — |
| | 計 | 165(100.0) | 25(15.2) | 113(68.4) | 25(15.2) | 2(1.2) |
| バスクケットボール | 男 | — | — | — | — | — |
| | 女 | 169(100.0) | 0(0) | 90(53.2) | 78(46.2) | 1(0.6) |
| | 計 | 169(100.0) | 0(0) | 90(53.2) | 78(46.2) | 1(0.6) |
| 全体 | 男 | 409(100.0) | 40(9.8) | 190(46.4) | 175(42.8) | 4(1.0) |
| | 女 | 354(100.0) | 8(2.3) | 198(55.9) | 144(40.7) | 4(1.1) |
| | 計 | 763(100.0) | 48(6.3) | 388(50.9) | 319(41.8) | 8(1.0) |

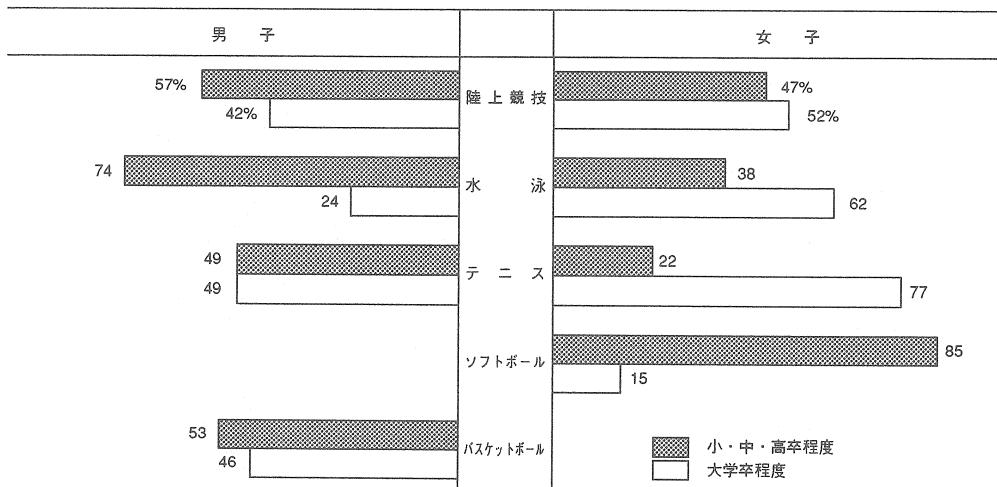


図 1-3 学歴構成 (小・中・高卒程度・大卒程度別)

注. その他 NA は除く

表1-2 調査対象者の職業（男女別・種目別・年代別）

| | | | 自 営 | 家族従業者 | 被雇用者 | 無 職 | N A | 計 |
|-----|--------|-----------|----------|-----------|-----------|----------|------------|------------|
| 男 | 陸上競技 | 40~59 | 7(10.3) | 0(0.0) | 61(89.7) | 0(0.0) | 0(0.0) | 68(66.7) |
| | | 60~ | 7(20.6) | 1(0.0) | 13(38.3) | 13(38.2) | 0(0.0) | 34(33.3) |
| | | 小 計 | 14(13.7) | 1(1.0) | 74(72.6) | 13(12.7) | 0(0.0) | 102(100.0) |
| | 水 | 40~59 | 10(27.0) | 1(2.7) | 25(67.6) | 1(2.7) | 0(0.0) | 37(47.4) |
| | | 60~ | 10(24.4) | 0(0.0) | 12(29.3) | 19(46.3) | 0(0.0) | 41(52.6) |
| | 泳 | 小 計 | 20(25.6) | 1(1.3) | 37(47.5) | 20(25.6) | 0(0.0) | 78(100.0) |
| | | 40~59 | 17(47.2) | 0(0.0) | 19(52.8) | 0(0.0) | 0(0.0) | 36(56.2) |
| | テニス | 60~ | 7(25.0) | 0(0.0) | 11(39.3) | 10(35.7) | 0(0.0) | 28(43.8) |
| | | 小 計 | 24(37.5) | 0(0.0) | 30(46.9) | 10(15.6) | 0(0.0) | 64(100.0) |
| 子 | ソボフルトル | 40~59 | 41(32.0) | 2(1.6) | 82(64.0) | 1(0.8) | 2(1.6) | 128(77.6) |
| | | 60~ | 3(8.1) | 0(0.0) | 18(29.7) | 16(43.2) | 0(0.0) | 37(22.4) |
| | | 小 計 | 44(26.7) | 2(1.2) | 100(60.6) | 17(10.3) | 2(1.2) | 165(100.0) |
| | 男子計 | 40~59 | 75(28.0) | 3(1.1) | 187(69.5) | 2(0.7) | 2(0.7) | 269(65.8) |
| | | 60~ | 27(19.3) | 1(0.7) | 54(38.6) | 58(41.4) | 0(0.0) | 140(34.2) |
| | 計 | 102(24.9) | 4(1.0) | 241(58.9) | 60(14.7) | 2(0.5) | 409(100.0) | |
| 女 | 陸上競技 | 40~59 | 2(3.7) | 3(5.5) | 34(63.0) | 15(27.8) | 0(0.0) | 54(77.1) |
| | | 60~ | 1(6.3) | 2(12.4) | 4(25.0) | 9(56.3) | 0(0.0) | 16(22.9) |
| | | 小 計 | 3(4.3) | 5(7.1) | 38(54.3) | 24(34.3) | 0(0.0) | 70(100.0) |
| | 水 | 40~59 | 4(10.3) | 2(5.1) | 17(43.6) | 16(41.0) | 0(0.0) | 39(50.0) |
| | | 60~ | 5(12.8) | 1(2.6) | 5(12.8) | 28(71.8) | 0(0.0) | 39(50.0) |
| | 泳 | 小 計 | 9(11.5) | 3(3.8) | 22(28.3) | 44(56.4) | 0(0.0) | 78(100.0) |
| | | 40~59 | 3(11.5) | 1(3.8) | 8(30.8) | 14(53.9) | 0(0.0) | 26(40.5) |
| | テニス | 60~ | 2(18.2) | 0(0.0) | 2(18.2) | 7(63.6) | 0(0.0) | 11(29.7) |
| | | 小 計 | 5(13.5) | 1(2.7) | 10(27.0) | 21(56.8) | 0(0.0) | 37(100.0) |
| 子 | バトスボケル | 40~59 | 13(7.8) | 7(4.2) | 96(57.9) | 50(30.1) | 0(0.0) | 166(98.2) |
| | | 60~ | 0(0.0) | 0(0.0) | 2(66.7) | 1(33.3) | 0(0.0) | 3(1.8) |
| | | 小 計 | 13(7.7) | 7(4.1) | 98(58.0) | 51(30.2) | 0(0.0) | 169(100.0) |
| | 女子計 | 40~59 | 22(7.7) | 13(4.6) | 155(54.4) | 95(33.3) | 0(0.0) | 285(80.5) |
| | | 60~ | 8(11.6) | 3(4.3) | 13(18.8) | 45(65.3) | 0(0.0) | 69(19.5) |
| | 計 | 30(8.5) | 16(4.5) | 168(47.5) | 140(39.5) | 0(0.0) | 354(100.0) | |
| 全 体 | 40~59 | 97(17.5) | 16(2.9) | 342(61.7) | 97(17.5) | 2(0.4) | 554(72.6) | |
| | 60~ | 35(16.7) | 4(1.9) | 67(32.1) | 103(49.3) | 0(0.0) | 209(27.4) | |
| | 計 | 132(17.3) | 20(2.6) | 409(53.6) | 200(26.2) | 2(0.3) | 763(100.0) | |

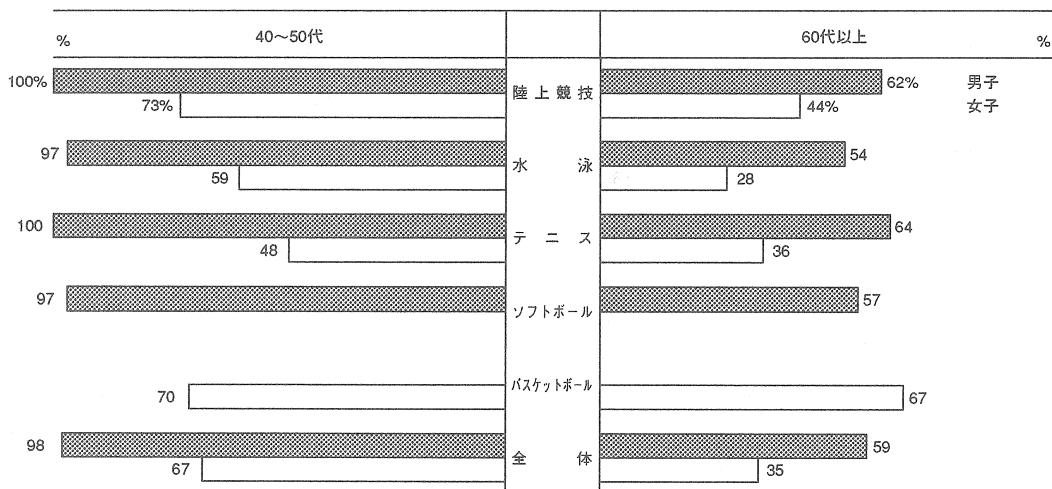


図1-4 有識者の比率(種目別、年代別、性別)

注. 有識者(自営+家族従事者+被雇用者)

い層に多くなっていることが影響しているといえよう。

⑥男子の有職者の中で、自営者が約25%（有職者内比率の場合約3割）を占めており、とりわけテニス男子の40~50代では47%とかなり高いのが目につく。この傾向は自営者の方が大会参加のための時間をつくり出しやすいことを推測させるものといえよう。

⑦以上のことから、調査対象種目の高度化型の中高年競技者の有職率は、男子の方が女子より高いものの全体的に見てかなり高いことが指摘できよう。つまり、今回の高度化志向型の中高年競技者像として、仕事もスポーツも元気にこなすパワフルな姿を指摘することができよう。

1. 4まとめ

以上の結果から中高年の高度化型の大会参加競技者の一般的特性として以下の点を指摘することができよう。

- (1) 従前から指摘されてきた傾向であるが、水泳とテニスの参加年齢層の高さは際立っており、この両種目の競技生活の息の長さを再認識させる。
- (2) 中高年層の大会参加競技者の学歴は比較的高い。このことは大会参加のためには、学歴の高さは大会参加にプラスの要因として働いていることを推測させる。
- (3) 高度化型の中高年の大会参加競技者の有職率は高く、かれらのプロフィールとして仕事にもスポーツにも積極的な像が浮かび上がってくる。

2. 日常のスポーツ参加

報告者 宮内 孝知¹⁾

本節では、競技志向の中高年スポーツ参加者の、日常のスポーツ活動について、参加の程度、競技会に参加した種目以外のスポーツ活動、所属スポーツクラブの状況等から、調査対象者の日常のスポーツ参加についてみることにする。

1. スポーツ参加の程度

表2-1は、スポーツ参加の程度を、調査種目ごとに示したものである。全体では「週に1~2日(年51日~150日)」が38.0%で最も多く、「週に3日以上(年151日以上)」34.1%, 「ほぼ毎日」21.6%とつづいている。今回の調査対象者は、年に151日以上スポーツ活動を行っている者が55%を越えており、一方、「月に1~3日(年12~50日)」以下は、「わからない」と回答した者を除くと、6%にも満たなく、極めて積極的な活動者であるといえよう。このことは、平成3年の第4回全国スポーツ・レクリエーション大会参加者を対象に実施し、その結果から「準競技者」と結論つけた『中高年者のスポーツ参加に関する社会学的・心理学的研究』(平成3年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告No. VII)における「ほぼ毎日」8.9%, 「週に3日以上」20.8%と比較しても、裏付けられる。

しかしながら、このスポーツ参加の程度を、調査種目ごとにみると、陸上・水泳・テニスの「個人種目」と、ソフトボール・バスケットボールの「集団スポーツ」には、大きな差異がみられる。すなわち、個人種目では、「週に3日以上」が、陸上71.6%, 水泳85.9%, テニス80.2%に達しており、およそ8割の者がほぼ毎日か週に3日以上活動している。これに対して「集団スポーツ」では、約6割(ソフトボール67.3%, バスケットボール60.9%)が「週に1~2日」となり、明らかにこ

の層が活動の中心である。恐らく、個人でも活動できることと、チームとして活動しなければならないという制約が、活動の程度に大きな影響を及ぼすのであろう。

2. 出場した全国大会や国際大会の種目(専門種目)以外のスポーツ活動

2.1 専門種目以外に行っているスポーツ種目数

表2-2は、専門種目以外に行っているスポーツの種目数を尋ねた結果である。全体では、3人に2人(64.6%)が専門種目のみの活動者であり、専門性の高さがうかがえる。高い競技レベルを目指す今回の調査対象者には、当然のことではあるが、「スポーツ参加の多様化」は縁遠いものであるといえよう。

種目別にみると、大きな差異はみられないが、陸上、テニスが他の種目に比べて、専門種目以外のスポーツを行っている者が多くなっている。

2.2 専門種目以外に行っているスポーツ種目

表2-3は、専門種目以外に行っている種目を示したものである。これによれば、専門種目以外に行っているのは「ゴルフ」が最も多く(31.1%), つづいて「バレーボール」16.9%となっている。しかしながら、「バレーボール」は、バスケットボールを専門としている対象者の影響が大きいと考えられる。「スキー」は「個人種目」を専門とする者に多く、「テニス」も回答者の参加が比較的高い種目である。

3. スポーツ活動の場所や施設

表2-4は、スポーツを実施する場所や施設を複数回答で求めた結果である。全体では、「公共の

1) 早稲田大学人間科学部

表 2-1 スポーツ参加の程度

実数 (%)

| | ほぼ毎日 | 週3日以上 | 週1~2日 | 月1~3日 | 年1~3日 | わからない | 合 計 |
|-----|------------|------------|------------|-----------|---------|---------|------------|
| 全 体 | 165(21.6) | 260(34.1) | 290(38.0) | 43(5.6) | 2(0.3) | 3(0.4) | 763(100.0) |
| 陸 上 | 51(29.7) | 72(41.9) | 36(20.9) | 11(6.4) | 0(0.0) | 2(1.2) | 172(100.0) |
| 水 泳 | 55(35.3) | 79(50.6) | 21(13.8) | 1(0.7) | 0(0.0) | 0(0.0) | 156(100.0) |
| テニス | 32(31.7) | 49(48.5) | 19(18.8) | 1(1.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 101(100.0) |
| ソフト | 14(8.5) | 35(21.2) | 111(67.3) | 5(3.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 165(100.0) |
| バスケ | 13(7.7) | 25(14.8) | 103(60.9) | 25(14.8) | 2(1.2) | 1(0.6) | 169(100.0) |

表 2-2 全国大会や国際大会に出場した種目以外に行っているスポーツ種目数

実数 (%)

| | 出場した種目のみ | 出場した他1種目 | 出場した他2種目以上 | 無回答 | 合 計 |
|-----|------------|------------|------------|----------|------------|
| 全 体 | 493(64.6) | 184(24.1) | 76(10.0) | 10(1.3) | 763(100.0) |
| 陸 上 | 97(55.4) | 43(25.0) | 32(18.6) | 0(0.0) | 172(100.0) |
| 水 泳 | 108(69.2) | 41(26.3) | 7(4.5) | 0(0.0) | 156(100.0) |
| テニス | 60(59.4) | 30(29.7) | 11(10.9) | 0(0.0) | 101(100.0) |
| ソフト | 113(68.5) | 28(17.0) | 14(8.5) | 10(6.1) | 165(100.0) |
| バスケ | 115(68.0) | 42(24.9) | 12(7.1) | 0(0.0) | 169(100.0) |

表 2-3 全国大会や国際大会に出場した種目以外に行っているスポーツ種目名

実数 (%)

| | バレーボール | 水 泳 | テニス | スキー | ゴルフ | ランニング | ソフトボール | 軟式野球 | その他 | 合 計 |
|-----|-----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|---------|---------|-----------|------------|
| 全 体 | 31(16.9) | 13(7.1) | 17(9.3) | 21(11.5) | 57(31.1) | 13(7.1) | 4(2.2) | 6(3.3) | 21(11.5) | 183(100.0) |
| 陸 上 | 10(23.3) | 7(16.3) | 6(14.0) | 5(11.6) | 4(9.3) | — | 3(7.0) | 2(4.7) | 6(14.0) | 43(100.0) |
| 水 泳 | 0(0.0) | — | 3(7.3) | 9(22.0) | 14(34.1) | 11(26.8) | 0(0.0) | 2(4.9) | 2(4.9) | 41(100.0) |
| テニス | 1(3.3) | 2(6.7) | — | 6(20.0) | 20(66.7) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 1(3.3) | 30(100.0) |
| ソフト | 3(11.1) | 0(0.0) | 3(11.1) | 0(0.0) | 10(37.0) | 0(0.0) | — | 2(7.4) | 9(33.3) | 27(100.0) |
| バスケ | 17(40.5) | 4(9.5) | 5(11.9) | 1(2.4) | 9(21.4) | 2(4.8) | 1(2.4) | 0(0.0) | 3(7.1) | 42(100.0) |

表2-4 スポーツ実施の場所・施設（複数回答）

実数（%）

| | 近所の空き地や広場 | 校区の学校施設 | 公共のスポーツ施設 | 商業スポーツ施設 | 企業所有のスポーツ施設 | その他 | 無回答 | 人数 |
|-----|------------|------------|------------|------------|-------------|-----------|---------|-----|
| 全 体 | 107(14.0) | 178(23.3) | 476(62.4) | 202(26.5) | 147(19.3) | 50(6.6) | 2(0.3) | 763 |
| 陸 上 | 69(40.1) | 51(29.7) | 127(73.8) | 19(11.0) | 18(10.5) | 21(12.2) | 0(0.0) | 172 |
| 水 泳 | 3(1.9) | 6(3.8) | 57(36.5) | 100(64.1) | 38(24.4) | 3(1.9) | 0(0.0) | 156 |
| テニス | 7(6.9) | 4(4.0) | 41(40.6) | 67(66.3) | 34(33.7) | 14(13.9) | 1(1.0) | 101 |
| ソフト | 26(15.8) | 52(31.5) | 124(75.2) | 3(1.8) | 30(18.2) | 7(4.2) | 1(0.6) | 165 |
| バスケ | 2(1.2) | 65(38.5) | 127(75.1) | 13(7.7) | 27(16.0) | 5(3.0) | 0(0.0) | 169 |

※複数回答のため%の合計は100を越える

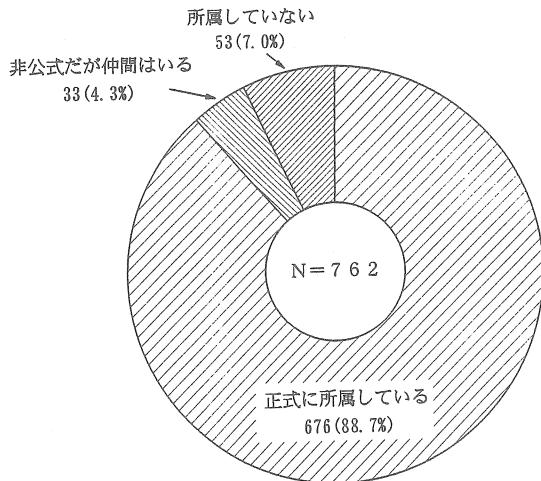
「スポーツ施設」が最も多く、62.4%を占めている。「校区の学校施設」も「公共施設」と考えれば、約85%が「公共施設」でスポーツを実施していることになる。特に、「陸上」「ソフトボール」「バスケットボール」では、この傾向が強く、活動は「100%公共施設」であると断言しても過言ではない。これらの種目では、「商業スポーツ施設」や「企業が所有するスポーツ施設」は、補助的な役割を果たしているに過ぎないといえよう。これに対して、「水泳」「テニス」は、活動の中心が「商業スポーツ施設」となり、共におよそ65%が回答している。これらのことから、前者は「公共施設型スポーツ種目」、後者は「民間施設型スポーツ種目」とみなすことも可能であろう。

4. スポーツクラブ参加状況

4. 1 スポーツクラブ所属の有無

図2-1は、スポーツクラブの所属について尋ねた結果である（「無回答」は除いている）。これによれば、約9割（88.7%）の者が、スポーツクラブに正式に所属しており、「所属していない」者は極めて少ない。大会参加等に団体所属が条件となるとしても、活動日数、高い専門性を維持するには、クラブ所属が求められるのであろう。

表2-5は、クラブ所属を調査種目別に示したものである。これによれば、「所属していない」者



は、他の種目に比して「陸上」に多くなっている。陸上競技の大会参加資格が連盟登録であること、練習が仲間や個人でできること等と関係しよう。

4. 2 所属スポーツクラブの規模

表2-6は、前述のスポーツクラブ所属の有無で、「正式に所属している」と及び「正式には所属していないが、仲間はいる」と回答した者に、そのクラブや仲間の人数を尋ねた結果である。全体では、約半数（49.9%）が「20人未満」と回答しており、「21人～50人」の30.6%を加えると、約8割

表2-5 スポーツクラブ所属の有無

実数 (%)

| | 正式に所属している | 非公式だが仲間はいる | 所属していない | 無回答 | 合計 |
|-----|------------|------------|-----------|---------|------------|
| 全 体 | 676(88.6) | 33(4.3) | 53(6.9) | 1(0.1) | 763(100.0) |
| 陸 上 | 107(62.2) | 20(11.6) | 45(26.2) | 0(0.0) | 172(100.0) |
| 水 泳 | 151(96.8) | 5(3.2) | 0(4.5) | 0(0.0) | 156(100.0) |
| テニス | 99(98.0) | 1(1.0) | 1(1.0) | 0(0.0) | 101(100.0) |
| ソフト | 162(98.2) | 2(1.2) | 0(0.0) | 1(0.6) | 165(100.0) |
| バスケ | 157(92.9) | 5(3.0) | 7(4.1) | 0(0.0) | 169(100.0) |

表2-6 所属スポーツクラブの規模

実数 (%)

| | 20人未満 | 21~50人 | 51~100人 | 101~150人 | 151~200人 | 201~250人 | 251~300人 | 301人以上 | 無回答 | 合計 |
|-----|------------|------------|-----------|-----------|----------|----------|----------|-----------|---------|------------|
| 全 体 | 354(49.9) | 217(30.6) | 48(6.8) | 19(2.7) | 16(2.3) | 5(0.7) | 11(1.6) | 32(4.5) | 7(1.0) | 709(100.0) |
| 陸 上 | 51(40.2) | 33(26.0) | 16(12.6) | 2(1.6) | 5(3.9) | 3(2.4) | 7(5.5) | 9(7.1) | 1(0.8) | 127(100.0) |
| 水 泳 | 78(50.0) | 48(30.8) | 15(9.6) | 5(3.2) | 3(1.9) | 0(0.0) | 0(0.0) | 5(3.2) | 2(1.3) | 156(100.0) |
| テニス | 15(15.0) | 22(22.0) | 16(16.0) | 11(11.0) | 8(8.0) | 2(2.0) | 4(4.0) | 18(18.0) | 4(4.0) | 100(100.0) |
| ソフト | 95(57.9) | 68(41.5) | 1(0.6) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 164(100.0) |
| バスケ | 115(71.0) | 46(28.4) | 0(0.0) | 1(0.6) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 162(100.0) |

表2-7 所属スポーツクラブの平均人数

| | 陸 上 | 水 泳 | テニス | ソフト | バスケ |
|------|--------|-------|--------|-------|-------|
| 平均人數 | 86.2人 | 50.9人 | 176.9人 | 23.3人 | 21.3人 |
| 男性平均 | 69.6人 | 38.8人 | 209.7人 | 23.3人 | |
| 女性平均 | 106.3人 | 62.8人 | 122.4人 | | 21.3人 |

が50人までの規模のクラブや仲間と活動しているのである。

しかしながら、これを種目別で検討すると、そこには大きな差異がみられる。概していえば、「集団スポーツ」の方が「個人スポーツ」に比べ、小さな規模である。とりわけ、バスケットボールは71.0%が「20人未満」となっている。一方、テニ

スは他種目に比して「大規模」であるといえよう。表2-7は、種目別・性別に、クラブ（仲間）の平均人數を示したものであるが、これによれば、上記のことがより明確になる。また、陸上と水泳では「女性」の方が「男性」に比べ、平均人數が多くなっており、テニスでは逆の傾向にある。より詳細な検討が必要であろう。

4. 3 所属スポーツクラブの活動形態

図2-2は、所属スポーツクラブ（仲間）の活動が、男女一緒に行われているかどうかを尋ねた結果である（「無回答」は除いている）。これによれば、調査対象者の所属するクラブは、男女一緒に活動するクラブと別活動のクラブが半数ずつである。これを種目別に示したものが表2-8であるが、明らかに「個人種目」では「男女混合」、「集団種目」では「男女別」となっている。このこと

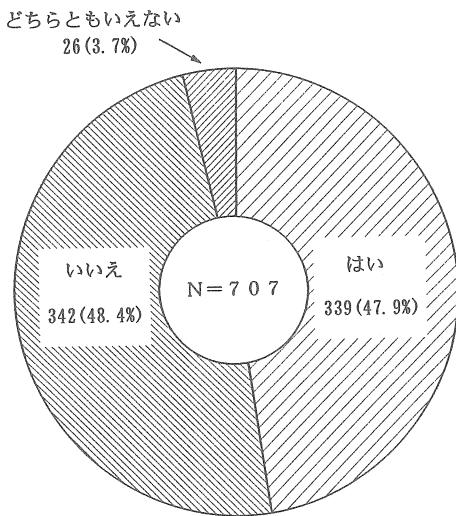


図2-2 男女一緒に活動か

はある程度想定して調査対象種目を選定したのであるから、一般化することは不可能であるが、集団種目の場合「チーム編成」が、大会参加規程上「混成」を義務づけていない限り、「男女別」に行われる事が一般的であろうし、そのことは当然のことながら、日常の活動形態を規定することになろう。

なお、前項で触れた陸上と水泳の女性が所属するスポーツクラブの「多人数化」は、筆者は女性の活動するクラブ（仲間）では、女性だけというより男性と一緒に活動する割合が多いためその分プラスになるのではと想定したが、男女別の集計結果からは、そのことは明確にはできなかった。

4. 4 所属スポーツクラブの活動目的や能力の一致度

図2-3は、所属するスポーツクラブの活動目的やメンバーの能力がほぼ一致しているかどうかを尋ねた結果である（「無回答」は除いている）。全体では、約6割（59.6%）が「はい」と回答し、「いいえ」23.4%，「どちらともいえない」16.9%を大きく上回っている。これを種目別で示したものが表2-9であるが、これによれば、「集団種目」の方が「個人種目」より、「一致度」が高くなっている。しかし、これは種目特性というより、むしろ、クラブ（仲間）の規模と大きく関係しているのであろう。所属クラブ（仲間）の規模が最も大

表2-8 所属スポーツクラブの活動形態
～男女一緒に活動か～

| | はい | いいえ | どちらともいえない | 無回答 | 合計 | 実数 (%) |
|-----|-----------|-----------|-----------|--------|------------|--------|
| 全體 | 339(47.8) | 342(48.2) | 26(3.7) | 2(0.3) | 709(100.0) | |
| 陸上 | 96(75.6) | 22(17.3) | 9(7.1) | 0(0.0) | 127(100.0) | |
| 水泳 | 132(84.6) | 18(11.5) | 6(3.8) | 0(0.0) | 156(100.0) | |
| テニス | 96(96.0) | 3(3.0) | 1(1.0) | 0(0.0) | 100(100.0) | |
| ソフト | 5(3.0) | 156(95.1) | 1(0.6) | 2(1.2) | 184(100.0) | |
| バスケ | 10(6.2) | 143(88.3) | 9(5.6) | 0(0.0) | 162(100.0) | |

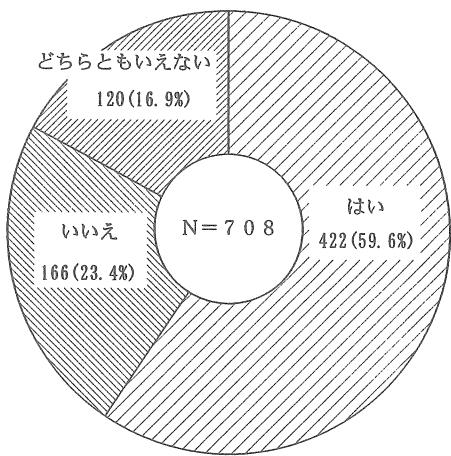


図 2-3 活動する目的や能力が一致しているか

きかった「テニス」が、「陸上」や「水泳」より、「一致度」にはばらつきがあることからも、これは裏付けられよう。

5. スポーツにかかる年間費用

表 2-10は、運動やスポーツを行うために必要な交通費、大会参加費、宿泊費、用具費、クラブ会費等を含む年間の費用を尋ねた結果である。回答は費用を万円の単位で記入してもらう方式であったため、種目によるばらつきが極めて大きく、カテゴリーをどのように採るかで、結果の読みとりに影響することが考えられたが、表のようにカテゴリー化し、表 2-11に種目ごとの平均値を示すことにした。

表 2-9 所属スポーツクラブの活動形態

～活動する目的や能力が一致しているか～

実数 (%)

| | はい | いいえ | どちらともいえない | 無回答 | 合計 |
|-----|------------|------------|------------|---------|------------|
| 全體 | 422(59.5) | 166(23.4) | 120(16.9) | 1(0.1) | 709(100.0) |
| 陸上 | 58(45.7) | 47(37.0) | 22(17.3) | 0(0.0) | 127(100.0) |
| 水泳 | 78(50.0) | 42(26.9) | 36(23.1) | 0(0.0) | 156(100.0) |
| テニス | 36(36.0) | 38(38.0) | 26(26.0) | 0(0.0) | 100(100.0) |
| ソフト | 142(86.6) | 12(7.3) | 9(5.5) | 1(0.6) | 164(100.0) |
| バスケ | 108(66.7) | 27(16.7) | 27(16.7) | 0(0.0) | 162(100.0) |

表 2-10 スポーツ活動にかかる年間費用

実数 (%)

| | 6万円未満 12万円未満 | 6万円以上 18万円未満 | 12万円以上 18万円未満 | 18万円以上 24万円未満 | 24万円以上 30万円未満 | 30万円以上 36万円未満 | 36万円以上 48万円未満 | 48万円以上 60万円未満 | 60万円以上 | 合計 |
|-----|-----------------|-----------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|-----------|------------|
| 全體 | 70(9.3) | 147(19.5) | 130(17.3) | 104(13.8) | 37(4.9) | 88(11.7) | 37(4.9) | 50(6.6) | 12(12.0) | 753(100.0) |
| 陸上 | 9(5.3) | 49(28.7) | 18(10.5) | 33(19.3) | 9(5.3) | 20(11.7) | 4(2.3) | 14(8.2) | 15(8.8) | 171(100.0) |
| 水泳 | 10(6.5) | 20(12.9) | 18(11.6) | 21(13.5) | 13(8.4) | 18(11.6) | 14(9.0) | 17(11.0) | 24(15.5) | 155(100.0) |
| テニス | 0(0.0) | 2(2.0) | 4(4.0) | 11(11.0) | 4(4.0) | 12(12.0) | 10(10.0) | 12(12.0) | 45(45.0) | 100(100.0) |
| ソフト | 10(6.3) | 36(22.8) | 54(34.2) | 19(12.0) | 6(3.8) | 26(16.5) | 4(2.5) | 1(0.6) | 2(1.3) | 158(100.0) |
| バスケ | 41(24.3) | 40(23.7) | 36(21.3) | 20(11.8) | 5(3.0) | 12(7.1) | 5(3.0) | 6(3.6) | 4(2.4) | 169(100.0) |

※無回答を除いている

表2-11 スポーツ活動にかかる年間費用の平均

| | 陸上 | 水泳 | テニス | ソフト | バスケ |
|------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 全体平均 | 26.2万円 | 35.6万円 | 62.8万円 | 19.6万円 | 16.0万円 |
| 男性平均 | 25.3万円 | 34.7万円 | 66.2万円 | 19.6万円 | |
| 女性平均 | 27.5万円 | 36.5万円 | 57.1万円 | | 16.0万円 |

これらの表は、今回の調査対象者は全体的にスポーツにかける費用が、前述の『中高年者のスポーツ参加に関する社会学的・心理学的研究』を参考に想定した額を大きく上回り、更にそれは種目によって大きな差異を示している。それは概略以下のようにまとめることができよう。競技志向の中高年スポーツ参加者のスポーツにかける総費用は、「集団スポーツ」では年間18万円(月平均15,000円)、「個人スポーツ」では種目による差異が認められ、「陸上」は年間26万円(月平均2万円強)、「水泳」は年間36万円(月平均3万円)、「テニス」は年間60万円(月平均5万円強)である。これらは、大会回数、大会の開催地等が影響すると考えられるが、最も大きいものは、3.で触れた「活動の場所や施設」での、「公共施設」と「商業施設」の相違であろう。

また、年間費用に男女差がみられないことは、競技志向中高年スポーツ活動は性別による活動の違いはないことを示していよう。

6. まとめ

競技志向の中高年スポーツ参加者を対象にした調査結果から、彼らの日常のスポーツ活動状況では以下の諸点が明らかになった。

- (1) スポーツ参加程度を活動日数からみると、半数強が年間151日以上(週3日以上)活動している。しかしながら、これを種目別に検討すると、「個人種目」ではこの層が8割に達するものの、「集団種目」では「週1~2日」が活動の中心となる。
- (2) 活動種目は、3人に2人が「専門種目のみ」の活動者で、高い専門性を示している。「専門種目以外」では、「ゴルフ」の実施者が多い。
- (3) スポーツ活動の実施場所では、85%が「公

共施設(学校施設を含む)」である。しかしながら、種目別にみると、「陸上」「ソフトボール」「バスケットボール」は「公共施設型スポーツ」、「水泳」「テニス」は「民間施設型スポーツ」である。

- (4) 調査対象者の9割は、スポーツクラブに「正式に所属」しており、その規模を構成員数からみると、約半数が20人未満であり、50人までのクラブに約8割が含まれる。しかしながら、種目別には相違があり、「集団種目」の方が「個人種目」より「小規模クラブ」で活動している。活動形態では、「個人種目」が「男女混合」、「集団種目」が「男女別」に活動する傾向にあるようである。活動目標や構成員の技能の一一致度では、約6割が「ほぼ一致している」と回答するが、これはクラブの規模との相関が高いと考えられる。
- (5) 競技志向の中高年スポーツ参加者のスポーツに必要な総費用は、「集団スポーツ」では年間18万円(月平均15,000円)、「個人スポーツ」では種目による差異があり、「陸上」は年間26万円(月平均2万円強)、「水泳」は年間36万円(月平均3万円)、「テニス」は年間60万円(月平均5万円強)であった。
- (6) 必要費用の視点から考察すると、中高年競技者のスポーツ活動には男女差はみられないようである。

(宮内 孝知)

提　　言

中高年競技者のスポーツ活動は、その日常のスポーツ活動から考察すると、想像以上に活発であるといえよう。しかしながら、そこには種目による相違、とりわけ「個人種目」と「集団種目」に

おける相違、が多々みられる。したがって、中高年競技スポーツの振興をより図るには、何にもまして「種目による対応」が望まれることになる。今回の調査からは、中高年競技者自身が「どうの

ような対応」を望んでいるかは明確ではないが、それを含めて、種目別のきめ細やかな対応が必要であろう。

3. 大会参加について

報 告 者 加藤 爽子¹⁾

調査対象者の、全国大会以外の様々なスポーツ大会へ参加の程度を見ることは、単に彼らのスポーツ欲求の程度が明らかになるだけでなく、スポーツの実施状況の多様性を探ることができよう。さらに、全国大会の上位入賞者というトップグループのスポーツ実施の程度から、一般の中高年者のスポーツとの関わりを今以上に促すために何らかの示唆が与えられるであろう。ここでは、次の5つの大会（①国際大会、②全国大会、③ブロック大会、④都道府県大会、⑤市町村大会）への調査対象者を40～59才の中年層と60才以上の高年層に大別し、種目別、男女別に参加の程度をみたものである。

1. 各レベルの大会における参加の程度

各レベルの大会の参加状況について、参加の程度を①1回、②2回、③3回以上とし、さらに④1回以上の参加経験を有する者について、種目別、男女別、および年代別に比較検討した。（図3-1, 3-2, 3-3）

1. 1 国際大会への参加状況

過去1年以内の国際大会への参加率は、全体では20%以下（男性17.4%，女性17.5%）にすぎなかった。さらに、男女別、種目別、年代別に見ると、国際大会へ1回以上の参加経験を有するのは、陸上（男性34.3%，女性38.6%）、水泳（女性30%）、テニス（男性25%，女性24.3%）であった。40～59才までの中年層と60才以上の高年層を比較すると高年層の参加率が高かった。特に高年層の参加率が高いのは、陸上の女性（62.5%）、ついで水泳の男女（31.7%，48.7%）およびテニスの男女（42.9%，36.4%）であり、陸上の女性の参加率が高い（P<0.01）。

種目別に見ると、集団種目であるソフトボール（1.8%）やバスケットボール（0.6%）は個人種目にくらべて参加率が低かった。

過去1年以内に国際大会への3回以上の参加は、高年層の女性に多少多く見られた。国際大会への参加率があまり高くない状況は、第一に参加に関わる経費的なことがあげられる。国際大会への参加のためには、大会参加費に加えて、渡航費、滞在経費など経済的なゆとりが関係すると思われる。

また、個人種目の方が集団種目にくらべて参加率が高いというのは、集団種目に比較して次のような条件から参加しやすいのではないだろうか。集団種目の場合、試合のためにはチームのメンバーを揃えなければならない競技の特性（最低9名必要なソフトボールや、メンバー17名を含めて最低5名以上必要なバスケットボール）がある。チームを構成する人数が多くなるほど、そのメンバー同士の日程、時間等の調整が国内はもとより海外への遠征であれば、往復の時間も含め集団種目の方が参加をなお一層難しくする。

さらに、現役の勤務者である40～59才代よりも、大半が現役をリタイアした60才以上の参加が多いのは、自由に時間を使えるといった時間的な余裕があることがその理由の第一にあげられるであろう。（図3-4, 図3-5）

1. 2 全国大会への参加状況

この調査は、全国大会参加者を対象にした調査であることから、過去1年以内の全国大会への参加率は94.4%（男性96.3%，女性92.1%）と高率を示した。これを、男女別、種目別、年代別に見ると、バスケットボールを除いては、どの競技の参加率も94%以上を示していた。特に、集団種目

1) 東京学芸大学附属高校大泉校舎

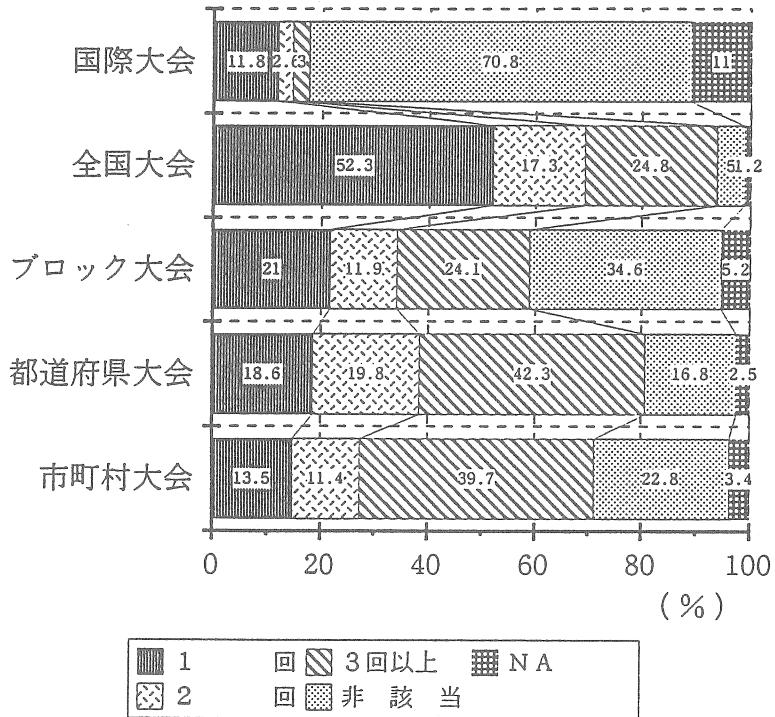


図3-1 各大会への参加状況(全)

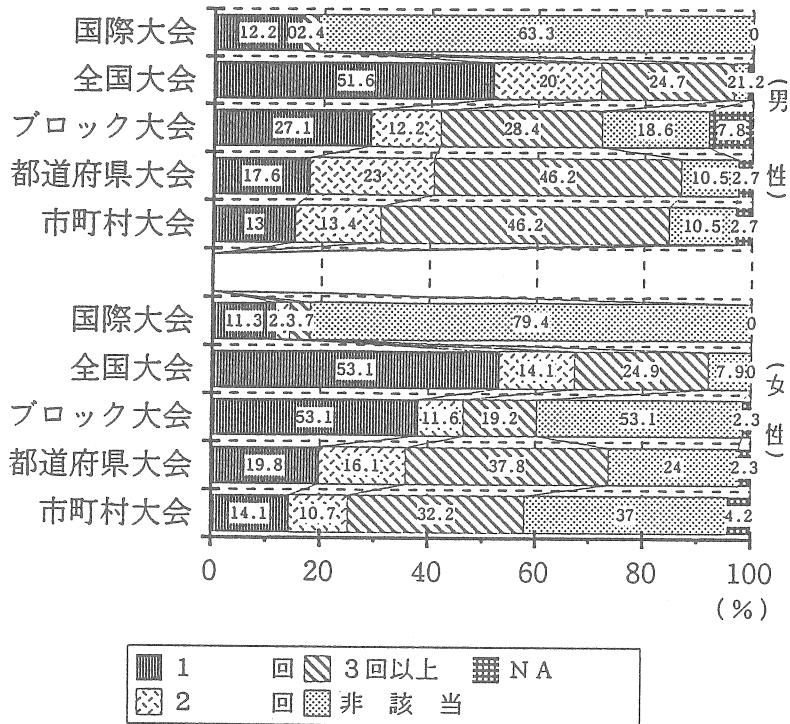


図3-2 各大会への男女別・回数別参加状況

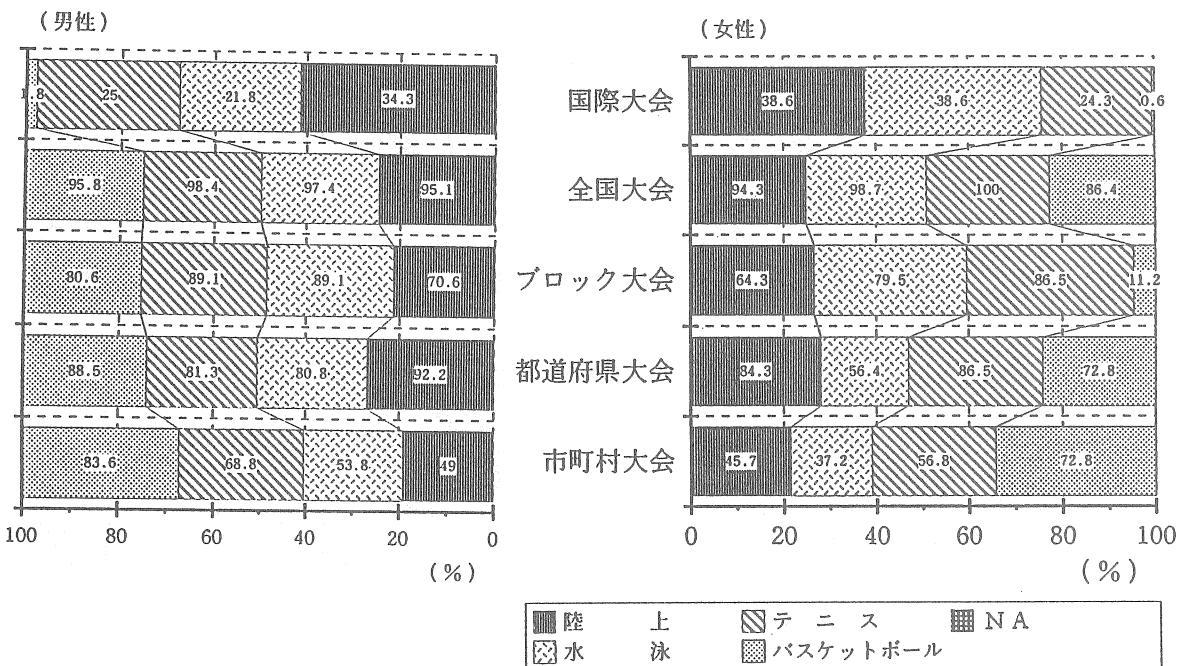


図 3-3 1回以上の大会参加状況

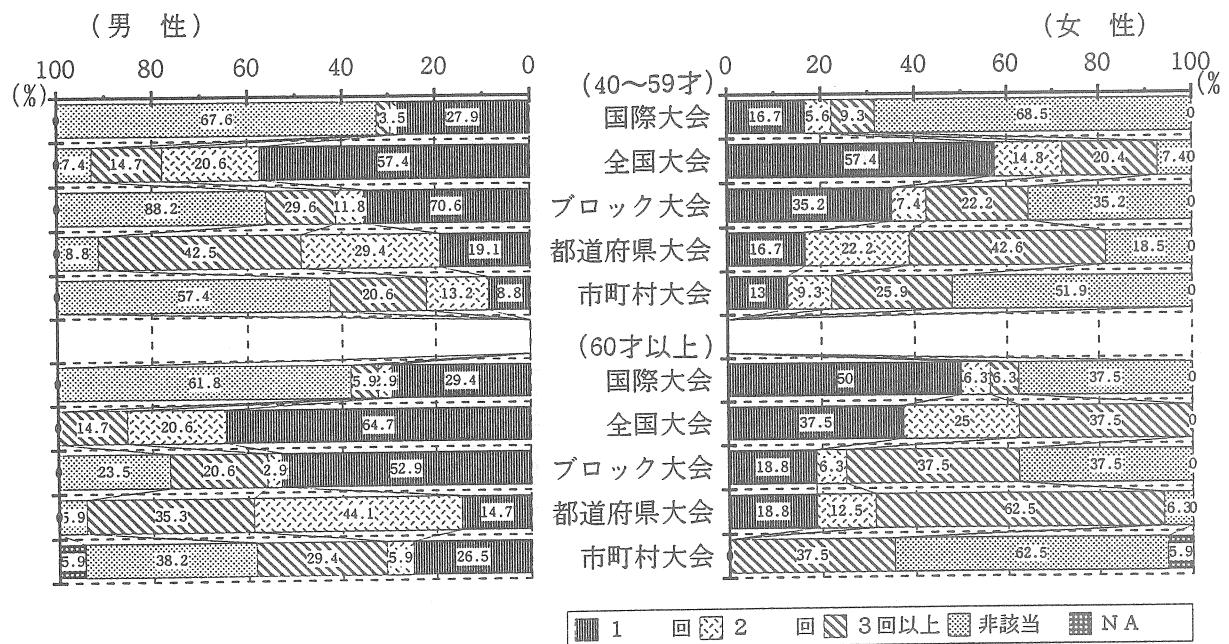


図 3-4 大会出場回数（陸上）

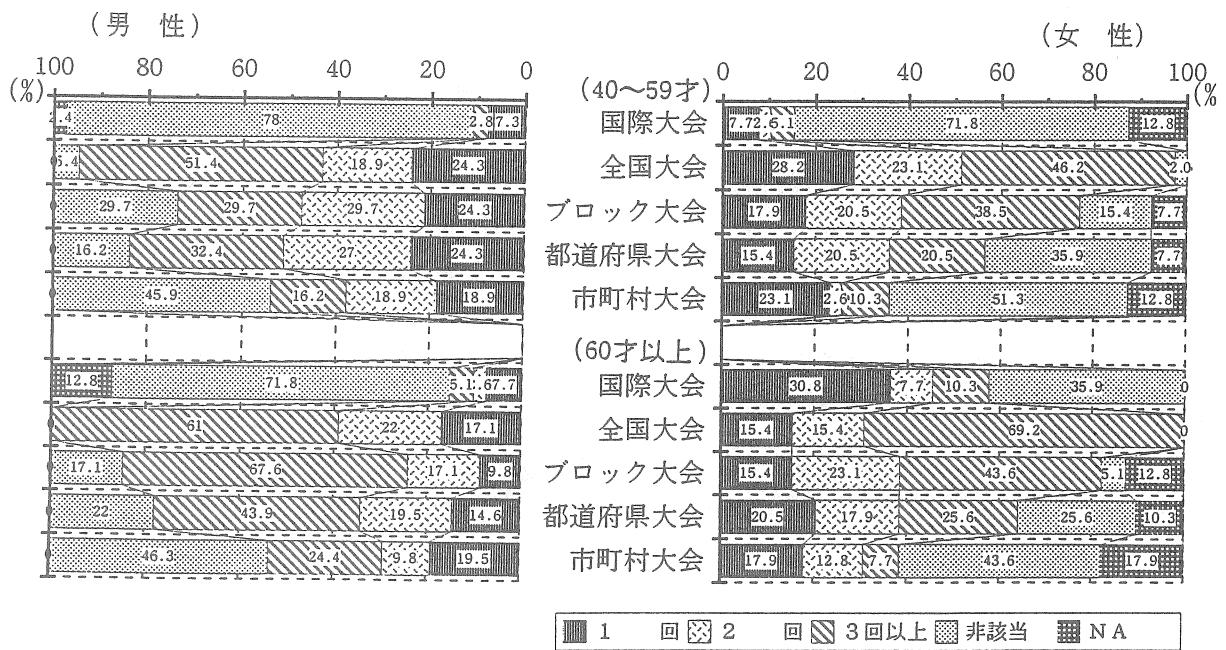


図 3-5 大会出場回数 (水泳)

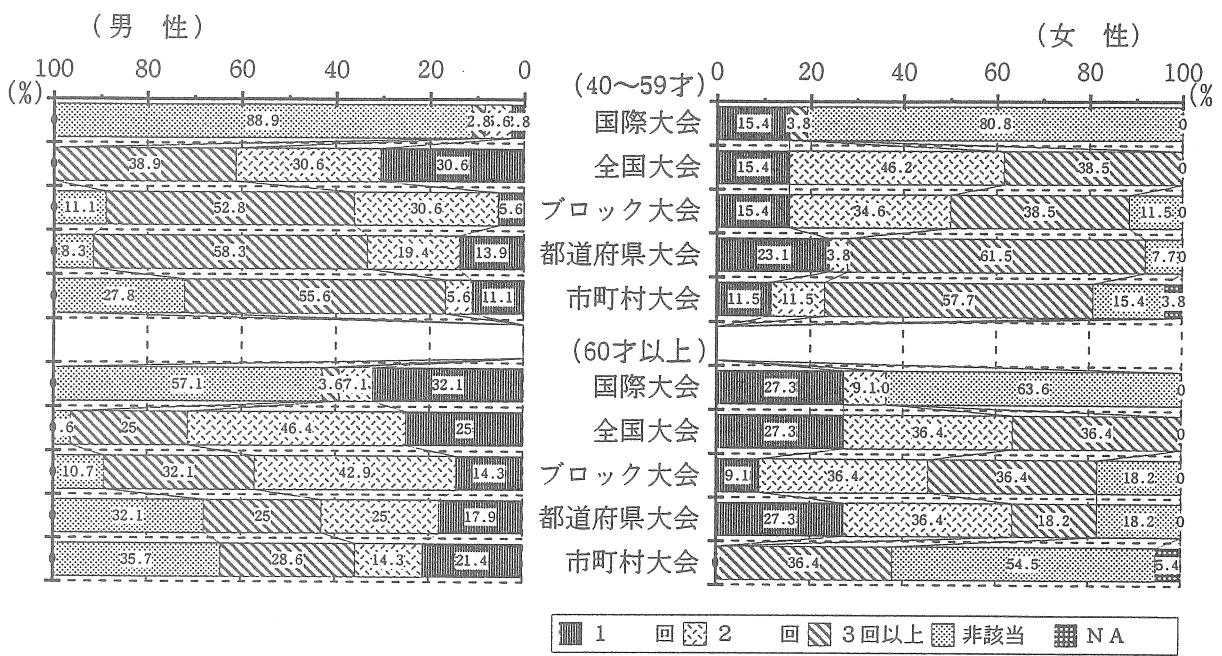


図 3-6 大会出場回数 (テニス)

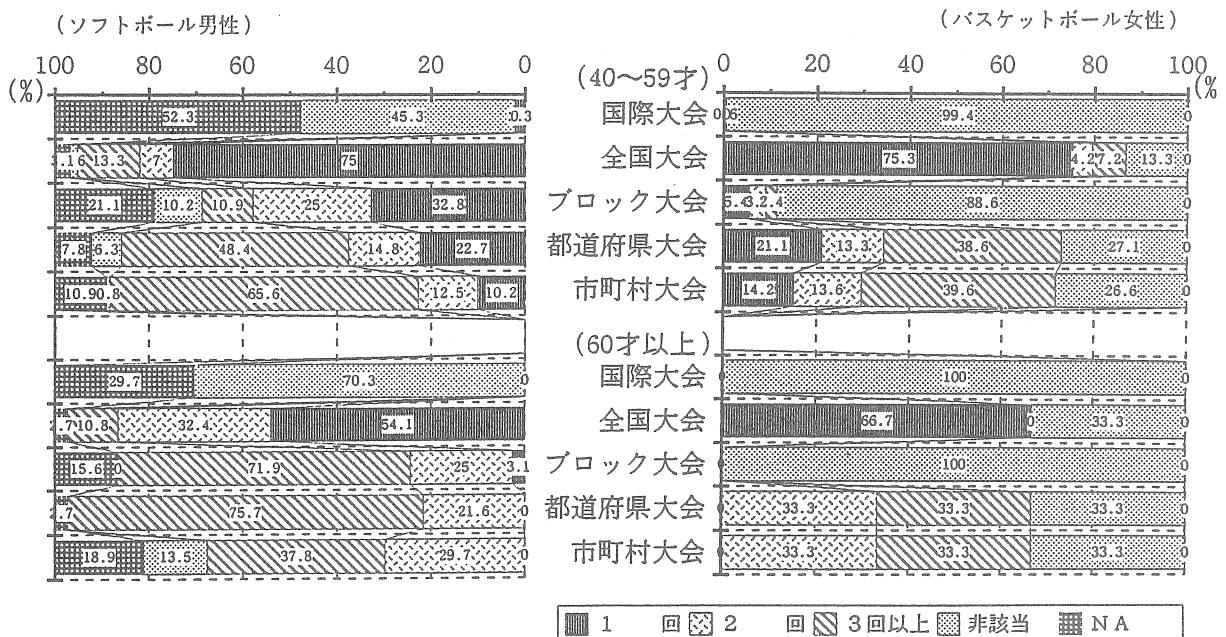


図 3-7 大会出場回数（ソフトボール・バスケットボール）

で90%を割るような場合には、全国大会に参加したチームを対象に調査を行ったことから、回答者の中にはチームの構成員ではあるものの、諸事情で大会には直接参加できなかったメンバーが含まれていることによる。

種目別にみると、1回の参加経験を有する率が回答者の50%以上を示したのは、陸上（59.8%，52.9%）、ソフトボール（70.3%）、バスケットボール（75.1%）であった。また、3回以上の参加経験が50%以上を示したのは水泳（56.4%，57.7%）であり、他の種目との間に際だった差がみられた（ $P<0.01$ ）。1回の参加率が特に高いのはソフトボールやバスケットボールであり、3回以上全国大会への参加率が高いのは水泳という特徴がみられた。

女性の場合、陸上の1回の参加率をみると、テニスを除く他の種目に比べてその参加率が高く（ $p<0.01$ ），同様に水泳では3回以上の参加率が他の種目に比べて高い（ $p<0.01$ ）傾向を示した。逆に、バスケットボールでは3回以上の参加率が他の種目に比べて低い。これらから、女性では個人種目の参加率は高く、集団種目の参加率が低い。特に、

バスケットボールについて見ると、全国ママさん交歓大会でのシニア部門の独立については日が浅いことや、シニアだけの年間の全国大会の開催が数少ないとなどが考えられる。

男女とも陸上、水泳の60代、女性ではテニスの40～59才代および60才では対象者の全員が全国大会に参加していた。（図3-6，3-7）

1.3 ブロック別大会への参加状況

過去1年以内のブロック別大会への参加率は全体で63.6%（男性80.0%，女性32.6%）すぎず、男女差が明らかに見られた（ $p<0.01$ ）。男性の参加に比べて女性の参加が少ないのは、女性の場合、全国大会へ参加するためにブロック大会を通過してなければならないといったようなシステムがなくても全国大会に出場が可能なシニア大会があること、仕事や家庭との両立といった面から時間的な余裕が男性に比べて少ないとなどが参加を少なくしていると考えられる。

1回以上のブロック大会の種目別参加率を見ても、男性の参加率が軒並み70～80%であるのに対して、女性ではバスケットボールが11.2%と低い。

逆に、高い参加率を示したのは水泳（79.5%）とテニス（86.5%）であった。また、男性の集団種目であるソフトボールの参加率が高いのは、大会の開催が多いのに比べて、女性の集団種目であるバスケットボールが低い参加率を示したことは、シニアのブロック別大会が少ないことなどが考えられる。

3回以上の参加者の年代層をみると、水泳やソフトボールでは男女とも、陸上では女性の60才以上の高年者が40～59才の中年層よりも参加率が高く、逆に、男性の陸上や男性のテニスについては、中年層が高い傾向を示した。これらの背景について、競技者にとっては、時間と経費の関係から居住地域である市町村レベルからせいぜい都道府県レベル、そして最後の目標は全国大会といった構造が一般的であると考えられることに加えて、それぞれの種目のもつ特性や、競技会の開催数や技能的なレベルの差が大会参加に大きく影響すると思われる。

1.5 都道府県大会への参加状況

過去1年以内の都道府県大会への参加率は80.3%であり、全国大会に次いで高い参加率を示した。男女別にみると、男性では86.8%、女性では72.9%であった。1回以上の参加をみると、男性の陸上（92.2%）の参加率が高く、逆に女性では4種目の中でも水泳の参加率が低かった（56.4%）。さらに、この1年以内に3回以上の大会への参加率は42.3%（男性46.2%、女性37.8%）と男性の方が比較的高い傾向を示した。全国大会への参加のためには、種目によって市町村レベル→都道府県レベル→ブロックレベル→全国レベルと勝ち進んでいかなければならないような形態をとるためにあると思われる。

種目別に見ると、男性のソフトボールの1回以上の参加率が他の種目に比べて高い（ $p < 0.01$ ）。また、女性の3回以上の参加率ではテニスが高い傾向を示した。このことから都道府県レベルの大会には3回以上連続出場経験を有するテニスの競技者が多いことがわかる。

年代層を見ると、60才以上の高年齢層が40～59才の中年層より参加率が高いのは、男性では陸上、

ソフトボール、女性では陸上、水泳であり、逆に中年層の参加率が高いのは、男性では水泳、テニス、女性ではテニス、バスケットボールであり、ここにも種目の特性（ある程度のスピード、体力を必要とする）が表れていると思われる。

1.6 市町村大会への参加状況

過去1年以内の市町村大会への参加率は平均71.7%、（男性83.6%、女性57.9%）であり、男性の参加率が高い傾向を示していたが有意な差は見られなかった。1回以上の参加率が高い種目は、男性ではソフトボール（83.6%）、女性ではバスケットボール（72.8%）であり、反対に50%を割る参加率を示したのは男性では陸上（49.0%）、女性では陸上（45.7%）や水泳（37.2%）であり、ソフトボールやバスケットボールがその構成員が居住地域の公共施設利用が中心になるのに対して、商業スポーツクラブ等が中心となるような水泳などの個人種目との違いが考えられる。

市町村大会へ3回以上の参加がみられる種目は、男性ではソフトボール（59.4%）とテニス（43.8%）、女性ではテニス（51.4%）、バスケットボール（40.2%）であった。テニスや集団種目の参加率が陸上や水泳に比較して多少高い傾向を示したのは、次のような理由が考えられる。テニスコートは別にして体育館、野球場といったような広い空間を有しているのは地域社会の施設（学校などの公共施設）の使用があることなどが考えられる。逆に個人種目である水泳の参加が少ないので、市町村大会にシニアの部門があまり設けられていないかたり、スイミングクラブに所属していることから、市町村大会よりスイミングクラブ対抗の大会や、マスターズ大会のようなシニアの全国レベルの大会のほうへ参加する傾向が強い。

2. 参加競技会での成績

2.1 過去3年間の全国大会や国際大会の優勝回数（図3-8）

過去3年間の最多優勝回数を種目別に見ると、水泳が最多優勝回数を示していた。男性の40～59才の中年層の50回をはじめ、60才以上の高年層では82回、女性でも同様に水泳で中年層の60回、高

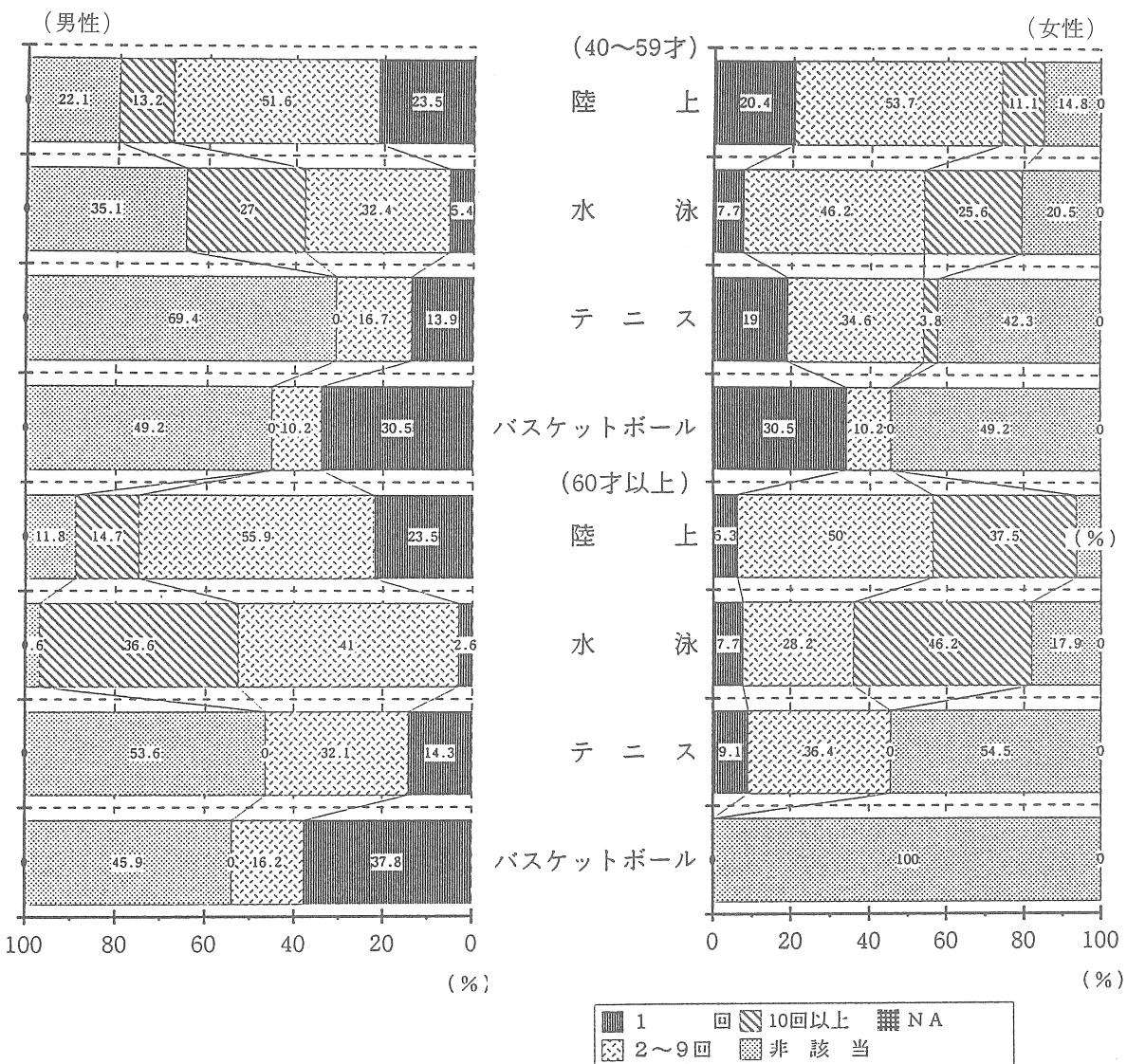


図3-8 男女別、種目別、過去3年間の全国大会での優勝回数

年層の50回と他の種目とは大きく異なっていた。次いで、陸上（男性中年層20回、高年層10回；女性中年層20回、高年層20回）であり、テニス（男性中年層12回、高年層7回；女性中年層9回、高年層5回）、ソフトボール（中年層2回、高年層4回）、バスケットボール（中年層6回）の順であった。

1回以上の優勝経験を有するのメダリストは、男性では平均60.6%、（陸上81.4%、水泳82.1%，

テニス37.5%、ソフトボール51.5%）であった。また、女性では47.5%が優勝経験を有していた。種目別に見ると、陸上87.1%、水泳では80.8%、テニスでは54.1%、バスケットボールでは24.9%であり、依然として男女とも個人種目の陸上、水泳に優勝経験者—メダリストの数が多く見られた。メダリストが多いという背景には、大会の開催方法があげられる。たとえば、水泳の場合、マスターズ大会が年齢を5歳きざみでとしていること

(18~24才, 25~29才, …85~89才までの14段階), また、個人種目として長水路 (50m)・短水路 (25m)別, 5泳法別(自由形, 平泳ぎ, 背泳, バタフライ, 個人メドレー) および距離(自由形・平泳ぎ・背泳・バタフライの25m・50m・100m・200m, 自由形の400m・800m・1500m, 個人メドレー100m・200m・400m), さらにリレー種目(短水路・長水路, フリーリレー, メドレーリレー119才以下, 120~159才…320~359才までの6段階)の組み合わせで大会に参加ができることなどがあり, 他の種目に比べて優勝経験者がどうしても多くなる。さらに, 優勝経験者は加齢とともに今属しているグループから次の年齢グループへ移動していくと, そのグループ中では一番若いことになり, そこで優勝をするような状況にあるという。優勝経験が水泳に次いで多い陸上でも同様な現象が考えられる。他方, 中高年の全国大会の歴史が浅い場合や, 競技人口が多いことからバスケットボールやテニスは, 水泳や陸上に比べて優勝経験者の率が低い。

年代別に見ると, 男女とも陸上, 水泳(男性 $p < 0.01$,)は高年層の優勝経験者が中年層よりも高く, 男性ではテニスおよびソフトボール ($p < 0.05$) の高年層, 女性ではテニス ($p < 0.05$) の中年層が優勝経験を有する率が高い傾向を示した。なお, バスケットボールの場合については, 1%水準で有意差はみられたが, 高年層の人数が3名と少ないために除外した。(図3-8)

2. 2 過去3年間の上位(8位以内)入賞回数

過去3年間の上位入賞回数は, 前項の優勝回数と同様な傾向を示した。入賞回数が多い種目はやはり水泳, 陸上, テニス, ソフトボール・バスケットボールの順であり, 最多入賞回数は男性では, 水泳の高年層の114回, 女性でも水泳の高年層の100回であった。しかも, 水泳の男性の入賞経験率は90.2%, 女性の入賞経験率は73.7%で男性が多く, 有意な差が見られた。 $(p < 0.01)$ さらに, 陸上, 水泳, テニスの入賞経験者が男女とも平均90%程度であるのに対して, バスケットボールの入賞経験者が49.7%と少なかったのは, シニア大会の歴史が浅いことが考えられる。

年代層を見ると, どの種目も高年層が入賞経験を有する率が高い。

3. 國際・全国レベル大会参加の意義・目的

スポーツに触れ, スポーツを実施していく中で生ずるスポーツ欲求は, 個人の生活状況をパーソナリティシステムの特性との関連から導かれる多様なものといわれるが, 全国大会に参加し, かつ上位入賞者を対象にしたこの調査では, あらかじめスポーツ実施の意義や目的を次の4つに分類し, 順位付けをすることによって, 参加の意義や目的を見ることとした。それは, ①「試合に勝つ」といった勝利志向型, ②「ベストをつくす」といった自己実現型, ③「プレイを楽しむ」といった競争や運動の楽しみ追求・充足型, そして④「交流すること」といった和合型である。

種目や年代層によって大会参加の意義や目的が異なるのはいうまでもない。テニスを除いては, 「ベストをつくす」といった自己実現型が回答者の33.6%を示した。これは, スポーツに限らず何事にも一生懸命取り組む中高年ライフスタイル的一面を表している。

種目別にみると, テニスは, 男女とも勝利志向型(34.3%, 48.6%)であり, 女性にその欲求が強いことが明らかになった($p < 0.01$)。そして, 特に女性の中年層に勝利志向傾向が強かった。 $(p < 0.05)$

また, ソフトボールの高年層やバスケットボールの中年層では, 「プレイを楽しむ」といった楽しみ追求・充足型が多く見られたのは特徴的である。バスケットボールのようにスピードとパワーを必要とするハードな動きが年々できなくなるといった, 加齢とともにどうしても避けられない体力的な衰えは, 勝利志向だけではなく年齢と体力に応じたバスケットボールを楽しむ方向性へと転化していくのではないだろうか。これは, スポーツを継続していく上でも重要な要因となる。ただ, 全国大会の常勝チームで, 連続出場を目指すようになれば, 目的や意義も多少変化していくのかもしれない。(図3-9)

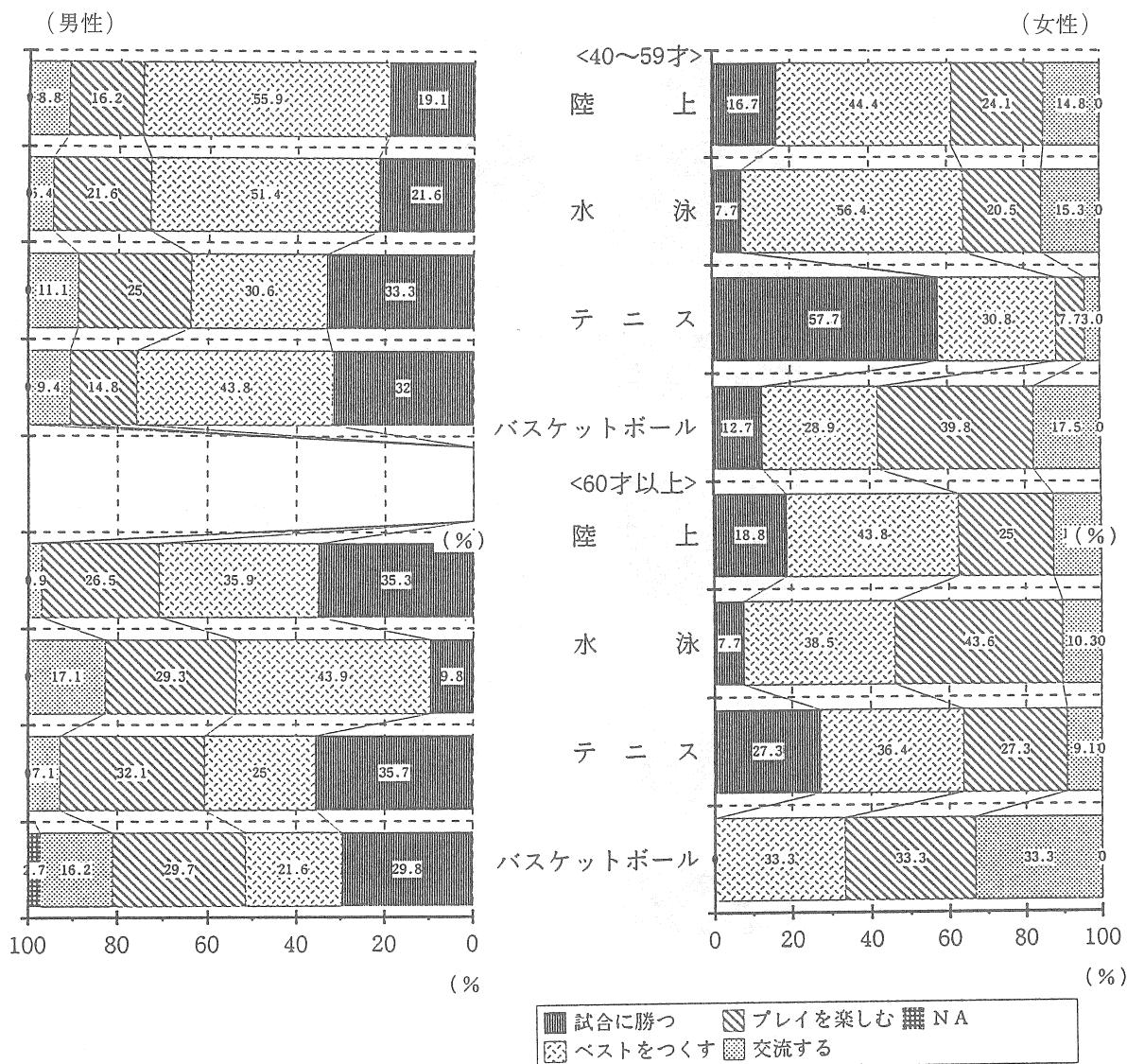


図3-9 男女別、種目別、全国大会や国際大会への参加目的や意識

4. 国際・全国レベルの大会種目の練習の程度

国際大会や全国大会に参加し、かつ上位入賞者の練習の程度を知ることは、今後のスポーツ生活の継続に大きな影響を及ぼす。そこで上位入賞者の1週間の練習状況を日数と時間から年代別（中年層と高年層）、男女別、種目別に比較検討した。さらに、全国大会や国際大会に出場した専門種目の練習日数や練習時間について見てることで、全国

大会や国際大会へ出場するに最低必要な練習日数や練習時間の存在の有無を明らかにしようとした。

（図3-10）

4. 1 1週間の練習日数

スポーツを継続させるのに無理のない練習日数は種目にもよるが、調査対象者では最大7日間、最低1日であった。種目別に練習日数を見ると、陸上と水泳の男子の5日間（22.5%, 26.9%）が

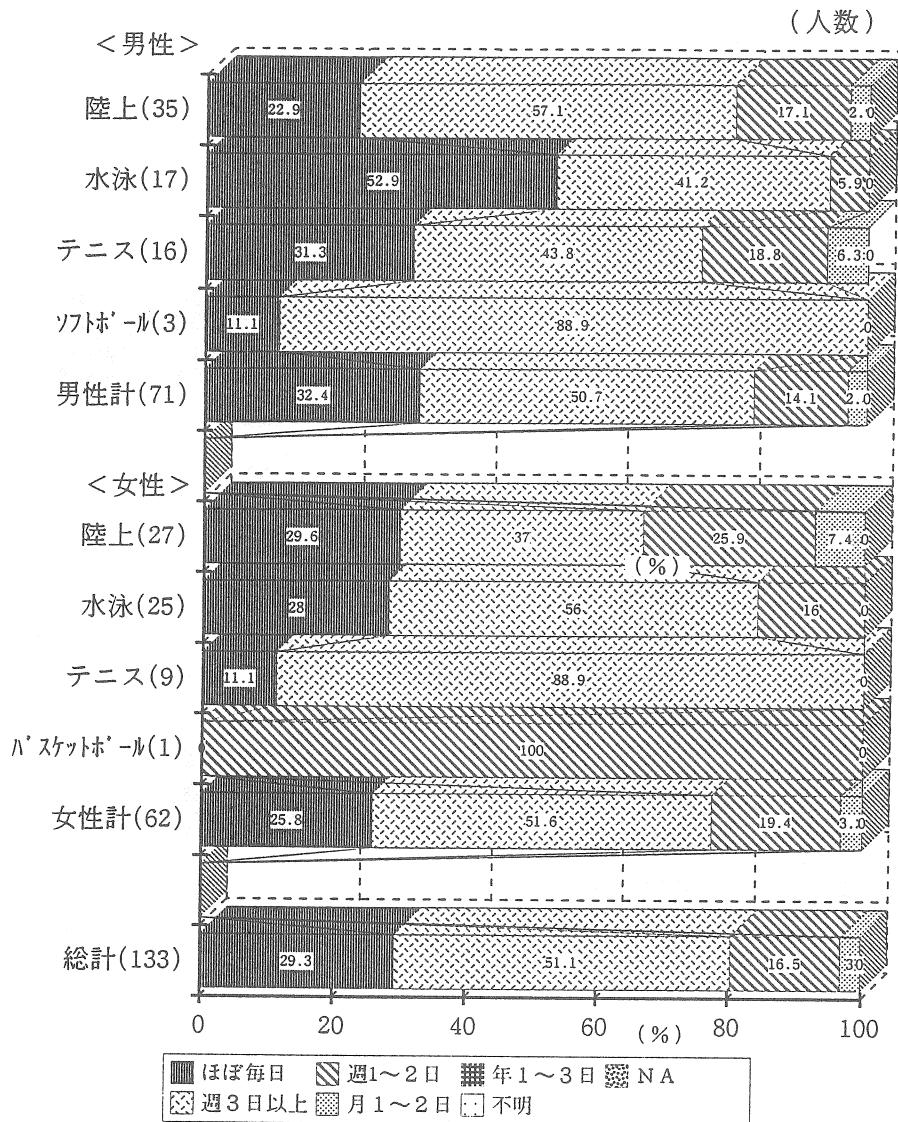


図3-10 国際大会参加者のふだんの練習状況

多く、日数が少ないのは、バスケットボールの1日(71.6%)、陸上女子の1日(27.1%)であった。テニスでは、男性、女性とも3日(32.8%, 37.8%)が多くかった。

年代層を比較すると、水泳の女性では高年層が3日(38.5%)、中年層が4日(23.1%)、テニスでは中年層が3日(26.9%)であるのに対して、高年層は4日(36.4%)という違いが見られた。このような相違は、種目による違い(個人的にトレ

ーニングが可能な種目—陸上、水泳と、相手が必要な種目—テニス、ソフトボール、バスケットボール)が大きく関係してくる。攻防に必要な人数が増えれば増えるほど、メンバー同士の練習日程の調整が必要となるばかりではなく、施設の使用もからむ。

また、国際大会参加経験者のスポーツ全般の練習日数をみると、ほぼ毎日練習している男性は29.3%，女性では32.4%であり、週3日以上(年間151

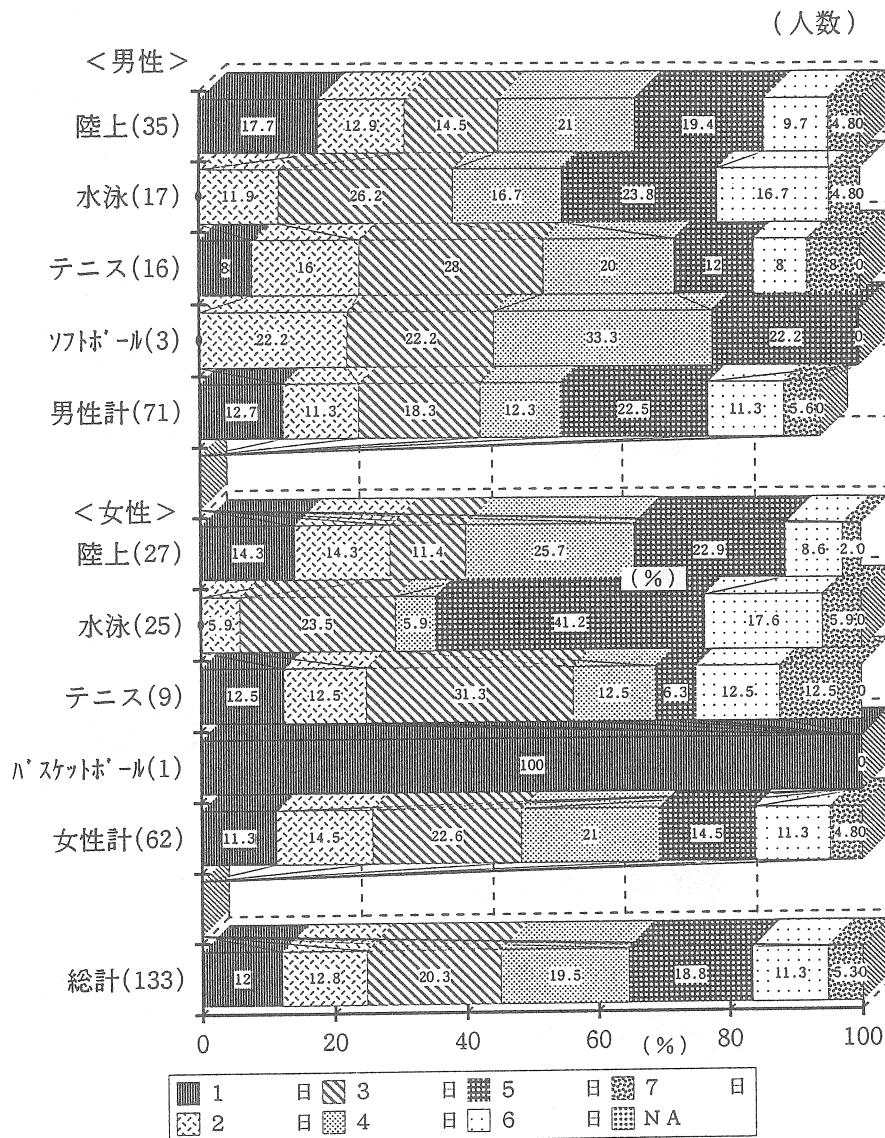


図3-11 國際大会参加者の1週間の練習状況

日以上) 練習しているのは、男性51.2%，女性の50.7%であって、どの種目も同様な傾向を示した。特に、全国大会や国際大会に出場した専門種目については、毎日練習とした男性が5.3%，女性では5.6%，週3日以上練習しているのは、男性で75.2%，女性で76.1%見られた。大きな大会への参加手形は、無理のない練習ではあるがそれでも週3日以上の練習を継続していくことで初めて手にすることができる。(図3-11)

4. 2 1回の練習時間

1回の練習時間が男性で最大8時間(ソフトボ'ール)，女性では10時間(テニス)，男女のテニスやソフトボ'ール以外では、どの種目も1回2時間程度の練習時間をとっているところが多い。最大8時間あるいは、10時間というのは、練習時間の中にゲーム(試合)が組み込まれてくると思われるし、練習時間も長時間になる。ただ、メンバー

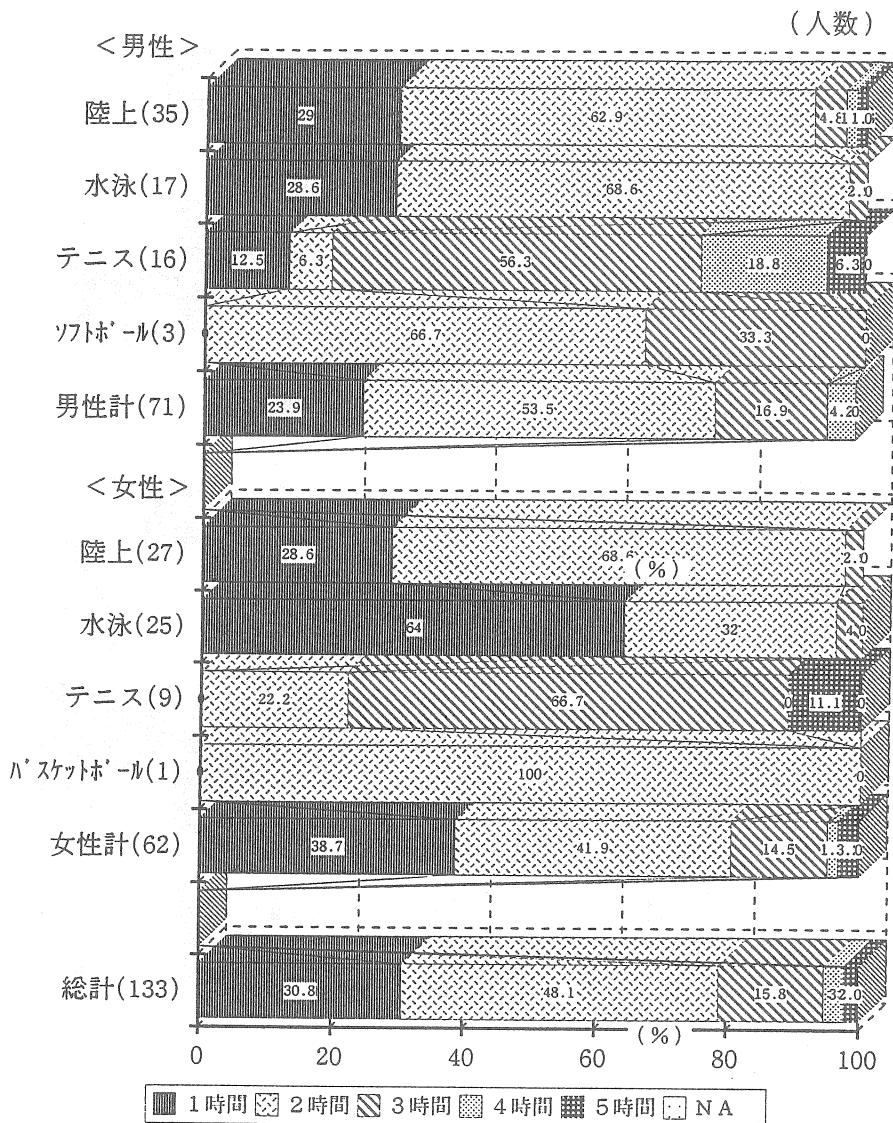


図3-12 国際大会参加者のふだんの練習時間の状況

の疲労の具合、施設の利用可能な時間からすると、中高年ということもあり2時間程度がベストとなる。

全国大会や国際大会に出場した専門種目の1回あたりの練習時間は、2時間が男性で48.1%，女性では53.5%であり、男性の78.9%，女性では77.5%が1～2時間の練習を行っていた。

中高年にとって、大会参加を目標にしても、疲労を残さずスポーツを継続させるために無理のな

い、至適練習時間は1～2時間程度であろう。(図3-12)

5. まとめ

(1) 各大会への参加状況

1) 調査対象者が全国大会参加者であることから、全国大会への参加率は90%以上であった。次いで、都道府県大会、市町村大会、ブロック別大

会、国際大会の順で、男女とも同様の傾向を示した。特に、各大会に1年以内に3回以上の大会参加率を比較検討してみると、全国大会参加のためには、予選を兼ねた下部の大会に出場していることが条件となっている場合が多い。国際大会では3%（男性2%，女性3.7%），全国大会では24.8%（24.7%，24.9%），ブロック別大会では24.1%（28.4%，24.1%），都道府県大会42.3%（46.2%，37.8%），市町村大会39.7%（46.2%，32.2%）で調査対象者の40%が都道府県レベルの大会へ参加していた。

2) 国際大会への参加状況は全体で17.7%（男性17.4%，女性18.1%）であった。1回以上の国際大会参加者を種目別にみると、陸上男性中高年（32.4%，38.2%），同女性の中高年者（31.5%，62.5%），水泳男性の高年者（31.7%），同女性の高年者（48.7%），テニス高年者男女（42.9%，36.4%）が高く、陸上の女性高年者の国際大会参加率が際立って高い（ $P < 0.01$ ）。また、全般的に、高年層の参加率が中年層の参加率より高かった。

3) 全国大会への1回以上の参加状況は全体で94.4%（男性96.3%，女性92.1%）と高い参加率を示した。陸上の男女高年者、水泳の男女高年者、テニスの男性の中年者、および女性の中高年者は、過去1年以内に行われた全国大会に調査対象者全員が1回以上参加していた。3回以上の参加率が高いのは、水泳（男性56.4%，女性57.7%）で圧倒的に他の種目に比べて高い。さらに、過去1年以内に行われた全国大会へ1回の参加率が高いのは、高年層の陸上（男性64.7%），中高年層のソフトボール（75.0%，54.1%），中高年層のバスケットボール（75.3%，66.7%）であった。

4) ブロック大会の参加状況は、63.3%（男性80.0%，女性32.6%）であり、男性の参加率が高かった。（ $P < 0.01$ ）逆に、女性のバスケットボールの参加率が低かった（11.2%）。さらに、3回以上の参加率が高いのは、水泳男性の高年層（67.6%），テニス男性中年層（52.8%），ソフトボール高年層（71.9%）が50%以上と高く、女性は陸上高年層（37.5%），水泳高年層（43.6

%），テニス中高年層（38.5%，36.4%）と40%弱であった。よって、中年層よりも高年層の参加が多くみられた。

5) 都道府県大会の参加状況は、80.3%と全国大会について高い。都道府県大会に1回以上参加した経験を有する男性86.8%，女性で72.9%であり、特に参加率が高いのは陸上の男性（92.2%）であり、低いのは水泳の女性（56.4%）であった。また、3回以上の参加率は42.3%（男性46.2%，女性37.8%）と男性の方が高い傾向がみられた。

6) 市町村大会の参加率は71.7%（男性83.6%，女性57.9%）であり、男性の参加率が高い。1年以内に1回以上の参加率が高いのは、陸上男性高年者（94.1%），テニス男性の中高年者（72.2%，64.3%），ソフトボールの中高年者（88.3%，67.6%），女性では水泳高年者（93.8%），テニス中年者（80.8%），バスケットボール中高年者（72.9%，66.6%）であり、陸上男性高年者、ソフトボールの中年者、水泳女性の高年者が80%を越えて高かった。

7) 男女別の参加状況を見ると、男性よりも女性の参加率が高く、特にブロック別大会では有意な差がみられた（ $P < 0.01$ ）。総じて、個人種目のほうが参加率が高い。

また、年代別にみると40～59才よりも60才以上の高年者は時間的な余裕があるせいか参加率が高かった。

（2）参加競技会での成績

1) 過去3年間の全国大会や国際大会での優勝経験を有するのは、陸上男女（81.4%，87.1%），水泳男女（71.8%，81.8%）が高く、ついでソフトボール（51.5%），テニスの男女（37.5%，54.1%），バスケットボール（24.5%）であり、個人種目の陸上や水泳は優勝回数が多かった。最多優勝回数は、水泳の男性中年者で50回、同高年者82回、女性でも水泳が同様に水泳の中年者で60回、高年者で50回と他の種目に比べて高かった。ついで高いのは、陸上、テニス、バスケットボール、ソフトボールの順にあがってきた。さらにバスケットボールが40.3%と他の種

目に比べて低い。

2) 過去3年間の上位入賞回数は、バスケットボールを除いたそれ以外の種目は90%以上の高い値を示した。バスケットボール以外のどの種目においても、入賞経験をほとんど全員がもつ。

(3) 國際・全國レベル大会への参加の目的・意義

1) 試合参加の目的・意義については、ベストをつくすと回答したのは、男女とも全体では33.6%（男性21.5%）であり、ついでプレイを楽しむ（男性21.5%，26.5%），試合に勝つ（27.1%，16.1%），交流（男性9.8%，女性12.1%）の順であった。

(4) 國際・全國レベルの大会種目の練習の程度

1) 1週間あたりの（ふだんの）スポーツの練習日数は、最大7日が1.4%（男性1.5%，女性1.4%），最低1日が28.6%（男性18.8%，女性39.8%），3日以上が47.4%（男性53.8%，女性40.1%）であった。種目別に練習日数をみると、陸上と水泳の男性では、週5日間（22.5%，26.9%）が多く、テニスの男性では4日間（32.8%），女性では、水泳，テニスの3日間（29.5%，37.8%

%）が多く、練習日数が少ないのは、ソフトボール2日（32.1%），バスケットボールの1日間（71.6%）であり、集団種目の練習日数が個人種目に比べて、練習日数が少ない傾向を示していた。特に、国際大会参加者133名について、ふだんのスポーツ練習日数をみると、男性の29.3%，女性の32.4%がほぼ毎日練習していた。また、週3日以上（年間150日以上）練習しているのは、男性の51.2%，女性の50.7%であった。全国大会や国際大会に出場した専門種目の練習は、男性の5.3%，女性の5.6%が毎日練習をしており、また、男性の75.2%，女性の76.1%は週3日以上練習をしていた。

2) 1回あたりの練習時間を種目別、男女別にみると、男性ではソフトボールが最大8時間、女性ではテニスが10時間という長い練習時間をとっていた。それ以外の種目では、どの種目も1回2時間程度の練習時間をとっているところが多い。また、国際大会に出場した133名について、国際大会や全国大会に出場した専門種目については、男性の48.1%，女性53.5%が1回あたり2時間、男性の78.9%，女性の77.5%が1回あたり1～2時間程度の練習を行っていた。

4. 過去のスポーツ活動の状況

報告者 山口 泰雄¹⁾

現在のスポーツ活動を理解し、中高年のスポーツ選手の支援体制を考えるとき、個人がこれまでのライフステージにおいて、どのようなスポーツ生活を過ごしてきたのかを分析し、理解する必要がある。

1. ライフステージにおけるスポーツ実施

スポーツ社会学のこれまでの研究の蓄積によれば、現在のスポーツ実施の規定要因の重要な指標のひとつは、「過去のスポーツ経験」があげられる。これは、スポーツ行動がスキル（技術）やルール、戦略、態度などを習得する社会的学習(social learning)を前提していることによる。

「あなたは、以下の年齢の頃、どの程度運動やスポーツ（学校の体育や体操等の授業以外で）を実施していましたか？」という設問に対して、20歳頃、30歳頃、40歳頃、50歳頃、60歳頃というライフステージを設定し、「よくした（週3回以上）」「ときどきした（週1日程度）」「あまりしなかった（月1・2回程度）」「ほとんどしない（それ以下）」という4段階尺度により回答を求めた。

ここでは、種目別に過去のライフステージにおけるスポーツ実施頻度の推移を検討したい。

1. 1 陸上競技男性

図4-1は、陸上競技男性のスポーツ実施頻度の推移を示している。「よくした（週3回以上）」と答えたのは、20歳頃は68%，30歳頃で減少し48%，40歳頃になると再び53%と伸びがみられる。50歳頃は67%，60歳頃になると82%と最も割合が多くなる。30歳頃は働き盛りで、実施頻度は減少しているが、以後、加齢とともにスポーツ実施頻度は増加していることがわかる。

1. 2 陸上競技女性

「よくした」と答えた者は、20歳頃と30歳頃において男性よりかなり少なく（20歳頃44%，30歳頃18%），特に30歳頃は最低レベルにある（図4-2）。これは、育児のために活動量が低下していると推察され、40歳頃以降では、「よくする」と答えた者は55%，50歳頃68%，60歳頃60%と実施頻度が高くなっている。

1. 3 水泳男性

図4-3は、水泳男性のスポーツ実施頻度の推移を示している。「よくした」と答えた者は、20歳頃で43%だが、30歳頃には32%と低下する。40歳頃以後は41%，50歳頃58%，60歳頃78%と増加し、陸上競技男性と同様な傾向を示している。

1. 4 水泳女性

水泳女性は、これまでの結果と異なるパターンを示している（図4-4）。「よくする」と答えた者をみると、20歳頃で12%，30歳頃では9%と極端に少ない。しかし、40歳頃になると41%と急増し、以後は60%（50歳頃）、81%（60歳頃）と増加している。

このように、中高年女性スイマーの20歳頃の規則的実施者は多種目に比べてかなり少なく、青年期においては活動的でなかったことがうかがえる。言い換えれば、中高年の女性スイマーは40歳以降に水泳を始めた者が多いことがわかり、中年期において水泳へと再社会化されたものが中心であることがうかがえる。

1. 5 テニス男性

図4-5は、テニス男性のスポーツ実施の推移を示している。「よくした」と答えた者は、20歳頃

1) 神戸大学

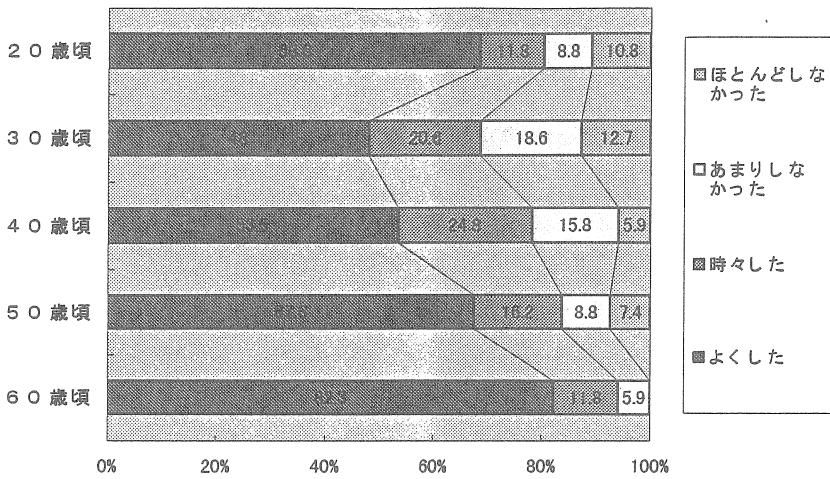


図4-1 陸上男性の過去のスポーツ実施

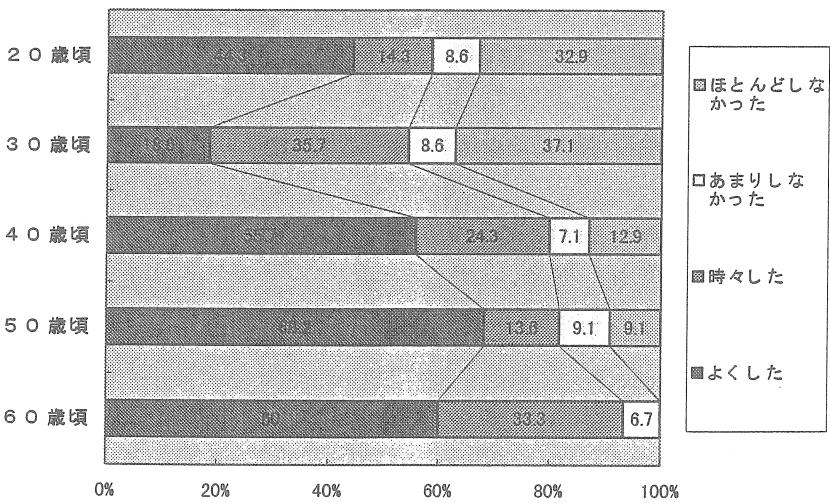


図4-2 陸上女性の過去のスポーツ実施

で59%だが、30歳頃には45%と低下する。40歳頃と50歳頃は55%と回復し、60歳頃には71%と増加している。陸上競技男性や水泳男性と同様な傾向を示している。

1.6 テニス女性

図4-6は、テニス女性のスポーツ実施の推移を示しているが、多種目とは異なるパターンがみられる。「よくした」と答えた者は、20歳と30歳頃で51%，しかし40歳頃には86%と急増し、50歳頃87%，60歳頃88%と高い活動レベルを維持して

いる。

このように、中高年の女性テニスプレイヤーは30歳頃には他種目女性より活動頻度が高く、40歳以後、中高年期を通じて週3日以上というスポーツ実施が日常的な生活スタイルになっていると言えよう。

1.7 ソフトボール男性

図4-7は、ソフトボール男性のスポーツ実施の推移を示しているが、多種目とはやや異なる傾向がみられる。「よくした」と答えた者は、20歳頃

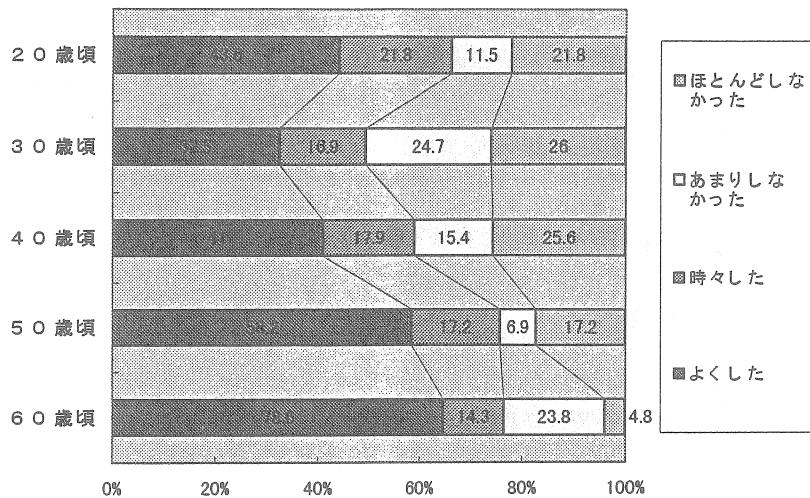


図4-3 水泳男性の過去のスポーツ実施

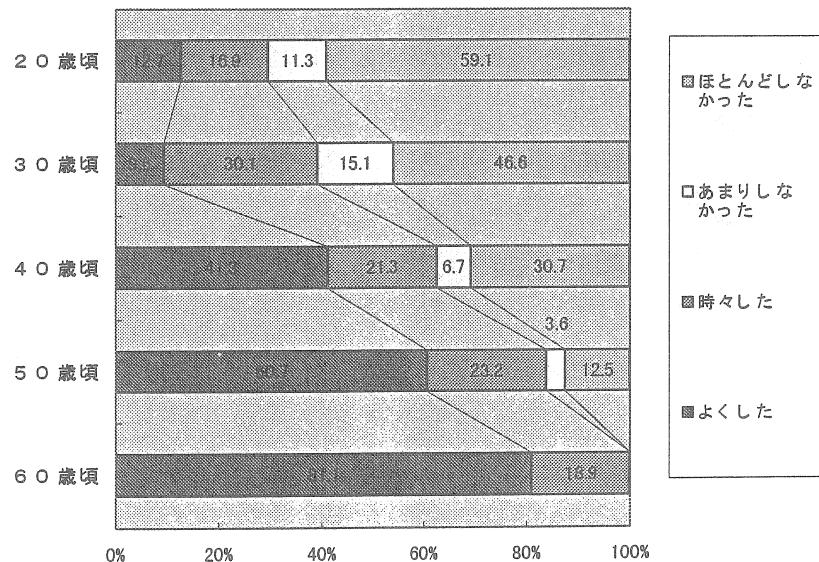


図4-4 水泳女性の過去のスポーツ実施

で6割を占めているが、30歳頃は44%、40歳頃39%、50歳頃44%、60歳頃41%と4割前後で安定している。

「時々した」(週1日程度)と答えた者は、30歳以降60歳頃まで5割前後を占めている。ソフトボール男性のスポーツ実施は、「週1日型」が最も多く、次いで「週3日以上」という活発型が続いている。

1.8 バスケットボール女性

図4-8は、バスケットボール女性のスポーツ実施の推移を示している。「よくした」と答えた者は、20歳頃で58%に上っているが、30歳頃には16%と大きく落ち込み、40歳頃と50歳頃も16%から20%と少なく。しかし、「時々した」と答えた者は、30歳頃65%、40歳頃67%、50歳頃71%、60歳頃100%

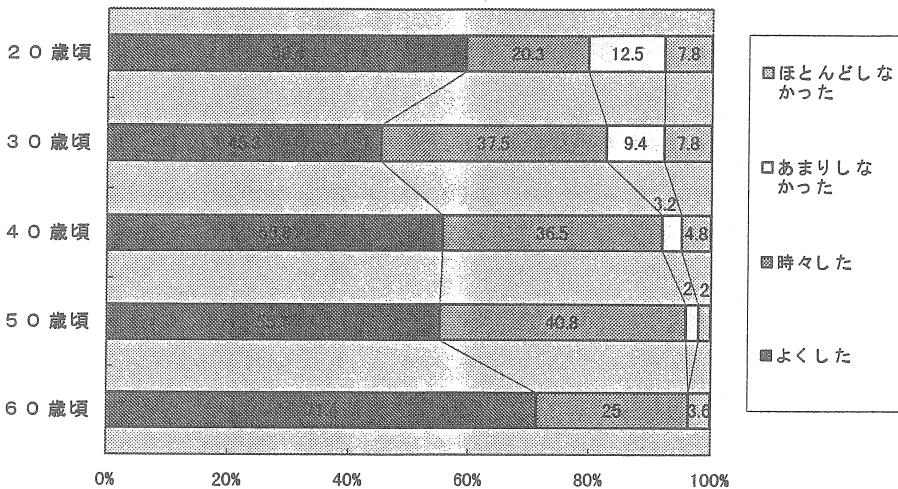


図4-5 テニス男性の過去のスポーツ実施

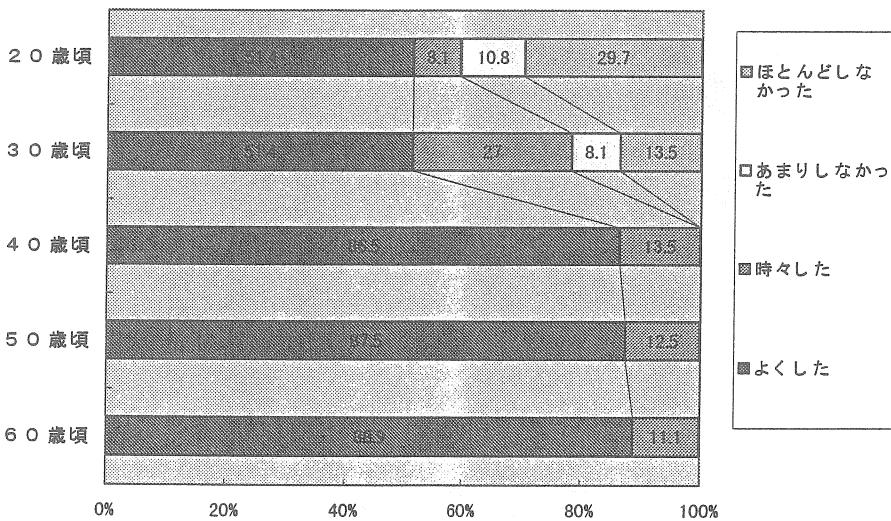


図4-6 テニス女性の過去のスポーツ実施

%と多数派を占めている。このように、バスケットボール女性のスポーツ実施は、「週1日型」であることがわかる。

1.9 まとめ

このように、過去のライフステージのスポーツ実施を検証すると、性差と種目差がうきぼりになった。性差に関して、男性においてはU字型パターンがほとんどである。これは、20歳代では実施頻度が高いものの、30歳代においては落ち込み、

40歳代以降、再び増加傾向をみせる。すなわち、働き盛りに活動量が落ち、中年期からスポーツ活動に再び打ち込むようになるという傾向である。陸上競技、水泳、テニスがこのタイプである。

女性では、陸上競技がU字型パターンがみられる。バスケットボールの女性では、30歳頃以後、これまでの“週3日型”から、“週1日型”への以降が顕著である。テニスの女性では、30歳以降のライフステージで参加量が顕著に増えており、テニスへの熱中型が多いことを反映している。水泳

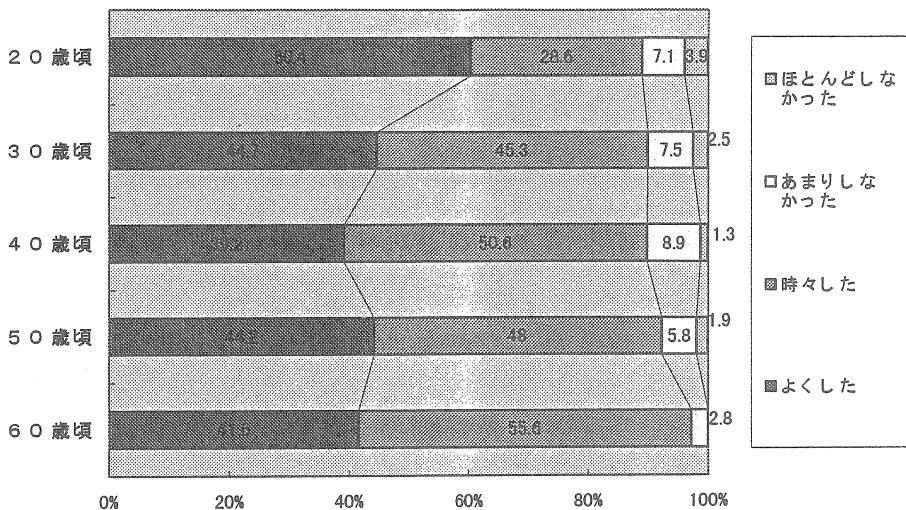


図4-7 ソフトボール男性の過去のスポーツ実施

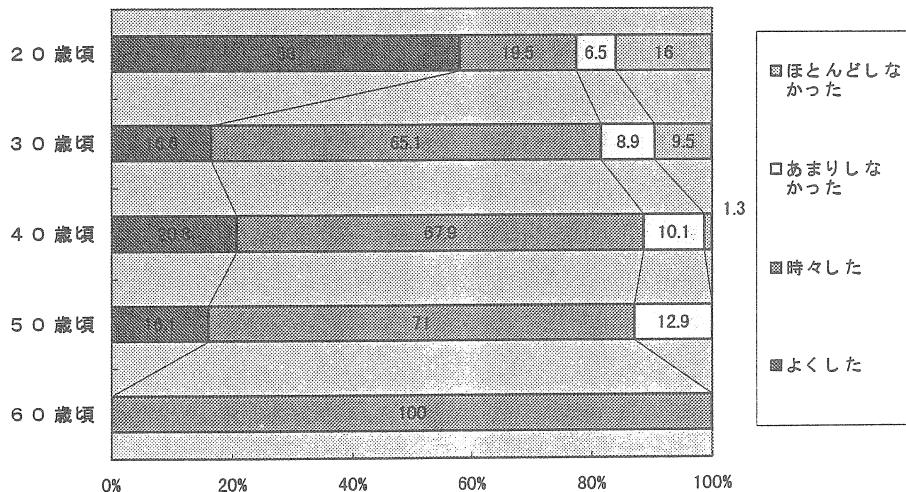


図4-8 バスケットボール女性の過去のスポーツ実施

女性においては、40歳以降に水泳を始め、活動頻度が高くなる傾向がみられる。中年期以降において、水泳へ再社会化されたものがほとんどであるというユニークな特徴が明らかである。

種目の特徴として明らかなのは、団体スポーツの実施パターンである。ソフトボールやバスケットボールにおいては、20歳頃までは“週3日型”が中心であるが、中高年期においては“週1日型”へと移行している。これは、社会人になると、団体スポーツでは練習日が週末にならざるをえない

勤務状況を反映しているだろう。

2. 各学校期の定期的スポーツ活動(部活動など)の状況

中高年のスポーツ活動の継続を考える上で、現在の活動の基盤ともいえる部活動を中心とした学校期の定期的スポーツ活動は重要な意味をもっている。中高年のスポーツ選手は、どの学校期から部活動などを始めたのかを検証してみよう。

表4-1は、学校期における部活動などをして

表4-1 学校期における部活動や定期的な活動をしていた割合

| | 小学 | 中学 | 高校 | 大学 |
|-------|------|------|-------------|-------------|
| 陸上 男 | 30.7 | 66.7 | 84.3 (73.5) | 71.2 (36.3) |
| 陸上 女 | 15.7 | 64.2 | 72.6 (64.3) | 76.9 (28.6) |
| 水泳 男 | 27.6 | 66.2 | 80.3 (67.9) | 59.5 (32.1) |
| 水泳 女 | 29.9 | 57.3 | 53.0 (44.9) | 28.6 (10.3) |
| テニス 男 | 49.2 | 82.3 | 79.3 (71.9) | 90.0 (70.3) |
| テニス 女 | 22.9 | 64.9 | 69.4 (67.6) | 65.0 (35.1) |
| ソフト 男 | 55.9 | 82.6 | 83.2 (63.0) | 53.8 (8.5) |
| バスケ 女 | 17.3 | 89.9 | 97.6 (97.6) | 86.3 (40.8) |

* 不明・無回答を除く。() 内の数字は全体に占めるパーセント

いた割合を種目別に示している。陸上競技においては、小学校に部活動などに所属していたのは男性3割に対して、女性では15%と半数である。しかし、中学校になると男女とも3分の2の者が所属している。そして、高校期と大学期においては、男女とも7割から8割強の所属率になっている。

水泳では、男女とも小学校期では3割弱で、中学校期に3分の2に増加する。男性は、高校期がピークで8割が所属しているが、女性では5割強と中学校期よりやや減少している。大学で水泳を定期的に実施している者は男性では6割みられが、女性ではわずかに3割弱にしか満たない。このように、水泳女性は中学高校で半数が所属しているが、それも大学期では半減し、サンプル全体の1割しか、この時期に定期的活動をしていないことがわかる。

テニスにおいては、男性が小学校期に既に半数が定期的活動を始めていることが注目される（男性49%，女性22%）。テニス男性では、中学校期で8割強、高校期で8割、大学期では実に9割が部活動などの定期的活動を行っている。女性では、中学校、高校、大学において3人に2人が定期的活動を行っている。このように、男性は中学校以降、高校、大学と非常に高い継続的な活動参加が明らかである。

ソフトボール男性においては、小学校期の定期的活動参加率が最も高く、5割強を示している。中学校と高校においても、8割強が参加しており、野球かソフトボールのクラブに所属していると推察される。

バスケットボール女性においては、小学校期の定期的活動参加率は低い。最近では、ミニバスケットボールの組織が整備されているが、かつては女子のためのスポーツ機会が少なかったことがうかがえる。中学校期においては9割弱、高校期においては実に97%，そして大学期では86%が定期的活動に参加している。

このように、学校期の部活動などの定期的活動においては、種目差が顕著である。小学校期において、既に半数が定期的活動を行っているのはテニス男子とソフトボール男子である。具体的な種目については、次項で明らかになる。

他の種目においては、中学校期から高校期にかけての部活動に6割から9割が参加している。このように、現在の中高年競技者は、中学校から高校期にかけての学校運動部が、スポーツ活動の主要な社会化エージェントであることがわかる。

やや特殊なパターンとしては、水泳の女性の学校時代の定期的活動への参加が低いことである。前項でも指摘したように、中高年の女性スイマーは、学校卒業後の中年期以降に本格的に水泳を始める者が多いことがうかがえる。

3. 学校期における部活動などの定期的活動種目

ここでは、中高年競技者のスポーツ・キャリアを検証する。各学校期において、どのようなスポーツ種目を経験してきたのかを種目別にみてみよう。

表4-2 学校期における部活動などの定期的活動：陸上競技（N=172）

| 順位 | N | 種目 |
|---------------------|----|--|
| <小学校期> | | |
| 1位 | 20 | 陸上競技 |
| 2位 | 12 | 軟式野球 |
| 3位 | 2 | 水泳競技 |
| | 2 | 体操競技 |
| 5位 | 1 | 柔道、硬式野球、ソフトボール、軟式テニス、 ハンドボール、バレーボール |
| <中学校期> | | |
| 1位 | 62 | 陸上競技 |
| 2位 | 12 | 軟式野球 |
| 3位 | 7 | バスケットボール |
| | 7 | バレーボール |
| 5位 | 5 | ソフトボール |
| | 5 | 卓球 |
| 7位 | 4 | 軟式テニス |
| 8位 | 3 | 水泳競技 |
| 9位 | 2 | 硬式テニス |
| | 2 | 剣道 |
| 11位 | 1 | 体操競技 |
| <高校期> | | |
| 1位 | 97 | 陸上競技 |
| 2位 | 5 | バレーボール |
| | 5 | 卓球 |
| 4位 | 3 | バスケットボール |
| | 3 | 体操競技 |
| 6位 | 2 | 水泳競技 |
| | 2 | 軟式野球 |
| 8位 | 1 | 軟式テニス、硬式テニス |
| <大学期> | | |
| 1位 | 49 | 陸上競技 |
| 2位 | 2 | 体操競技 |
| 3位 | 1 | スキー、水泳競技、硬式テニス、バスケットボール、 バレーボール、卓球 |

3. 1 陸上競技

表4-2は、中高年の陸上競技者のスポーツ・キャリアを示している。サンプル数は、172名である。

小学校期では、20名が陸上競技をしており、続いて軟式野球（N=12）が2位にあげられる。中学校期になると、約3割（N=62）が陸上競技を始めており、2位軟式野球、3位バスケットボール、バレーボールと続いている。

高校期では、5割強（N=97）が陸上競技を専門で行っており、2位（N=5）はわずかにバレーボール、卓球と続いている。高校期において、陸上競技の専門化が確立されている。

大学期では、大学期を過ごしたほとんどである49名が陸上競技を行っており、専門化が完成されている。このように、陸上競技においては、中学校期で3割、高校期で5割が専門化されている。

3. 2 水泳

表4-3は、中高年の水泳競技者のスポーツ・キャリアを示している。小学校期の1位は水泳だが、14%（N=22）でしかない。

中学校期では、1位水泳（N=44）、2位バレーボール（N=13）、3位バスケットボール（N=11）、4位陸上競技（N=10）と分散している。高校期では、水泳が1位で58名に上っているが、37%で

表4-3 学校期における部活動などの定期的活動：水泳 (N=156)

| 順位 | N | 種目 |
|--------|----|--------------------------------------|
| <小学校期> | | |
| 1位 | 22 | 水泳競技 |
| 2位 | 7 | 陸上競技 |
| 3位 | 4 | 軟式野球 |
| 4位 | 3 | ソフトボール |
| 5位 | 2 | 硬式野球 |
| | 2 | 体操競技 |
| 7位 | 1 | バスケットボール |
| <中学校期> | | |
| 1位 | 44 | 水泳競技 |
| 2位 | 13 | バレーボール |
| 3位 | 11 | バスケットボール |
| 4位 | 10 | 陸上競技 |
| 5位 | 6 | 軟式野球 |
| 6位 | 3 | ソフトボール |
| | 3 | 軟式テニス |
| 8位 | 1 | 体操競技、硬式テニス、剣道 |
| <高校期> | | |
| 1位 | 58 | 水泳競技 |
| 2位 | 8 | バスケットボール |
| 3位 | 6 | 陸上競技 |
| | 6 | バレーボール |
| 5位 | 3 | 軟式野球 |
| 6位 | 2 | 柔道 |
| 7位 | 1 | 硬式テニス、ソフトボール、卓球、 体操競技、剣道 |
| <大学期> | | |
| 1位 | 24 | 水泳競技 |
| 2位 | 2 | スキー |
| | 2 | バスケットボール |
| 4位 | 1 | 体操競技、エアロビックダンス・エアロビクス運動 ゴルフ、硬式テニス |

しかない。

このように、中高年の水泳競技者においては、学校時代に専門化された者は他種目に比べて少ないことがわかる。これは、現在の中高年が小学校や中学校時代において、学校にプールがなかったことや民間のスイミングスクールが未発達であったことによるだろう。

3.3 テニス

表4-4は、中高年のテニス競技者のスポーツ・キャリアを示している。テニス競技者において特徴的なのは、中学校期と高校期における第1位がテニスではなく、ソフトテニスであることだ。すなわち、学校期にはソフトテニスを経験していた

が、社会人になってから、テニスへと移行した「トランシスファー組」が3割強を占めている。

大学期にテニスを行っていた者は、42名で、全体の41%を占めている。このように、中高年のテニス競技者は、大学からの継続組と社会人になってからの移行組に分かれることが明らかである。

3.4 ソフトボール

表4-5は、中高年のソフトボール競技者のスポーツ・キャリアを示している。小学校期において、既に3割弱が野球へと専門化している点が特徴といえる。

中学校期でも高校期においても第1位は野球であり、社会人になってからソフトボールへと移行

表4-4 学校期における部活動などの定期的活動：テニス (N=101)

| 順位 | N | 種目 |
|--------|----|--|
| <小学校期> | | |
| 1位 | 16 | 軟式野球 |
| 2位 | 5 | 陸上競技 |
| | 5 | 軟式テニス |
| 4位 | 2 | 硬式野球 |
| | 2 | サッカー |
| 6位 | 1 | バレーボール、柔道、ソフトボール、ラグビー、 スキー、硬式テニス、水泳競技 |
| <中学校期> | | |
| 1位 | 35 | 軟式テニス |
| 2位 | 6 | 軟式野球 |
| | 6 | バレーボール |
| | 6 | 硬式テニス |
| 5位 | 4 | サッカー |
| 6位 | 3 | バスケットボール |
| | 3 | 陸上競技 |
| 8位 | 2 | 硬式野球 |
| | 2 | 体操競技 |
| | 2 | 水泳競技 |
| | 2 | ハンドボール |
| 12位 | 1 | ソフトボール、剣道、ラグビー、スキー |
| <高校期> | | |
| 1位 | 31 | 軟式テニス |
| 2位 | 18 | 硬式テニス |
| 3位 | 3 | 陸上競技 |
| | 3 | バレーボール |
| | 3 | バスケットボール |
| 6位 | 2 | ラグビー |
| | 2 | 柔道 |
| | 2 | 硬式野球 |
| | 2 | ハンドボール |
| 10位 | 1 | サッカー、軟式野球、ゴルフ スキー、剣道 |
| <大学期> | | |
| 1位 | 42 | 硬式テニス |
| 2位 | 4 | ラグビー |
| 3位 | 2 | バレーボール |
| | 2 | 柔道 |
| | 2 | 軟式テニス |
| 6位 | 1 | バスケットボール、ハンドボール、ゴルフ、スキー 硬式野球、剣道 |

した「トランスマスター組」が中心である。また大学卒業者は少なく、ソフトボール競技者は、高卒が多いことがわかる。

3.5 バスケットボール

表4-6は、中高年の陸上競技者のスポーツ・キャリアを示している。バスケットボール女性競技者において、小学校期に定期的活動をした者は

少ない。

中学校期の1位は圧倒的にバスケットボールであり (N=130), 76%を占めている。高校期にはさらに専門化が進み、94% (N=159) がバスケットボールの部活動に所属していたと考えられる。

このように、中高年女性のバスケットボール競技者では、中学校・高校と続けて部活動を経験した者が、現在も活動を続けていることが浮き彫り

表4-5 学校期における部活動などの定期的活動：ソフトボール（N=165）

| 順位 | N | 種目 |
|--------|----|---|
| <小学校期> | | |
| 1位 | 50 | 硬式野球 |
| 2位 | 14 | ソフトボール |
| 3位 | 9 | 陸上競技 |
| 4位 | 2 | サッカー |
| 5位 | 1 | 剣道、水泳競技、硬式テニス 体操競技、バレーボール |
| <中学校期> | | |
| 1位 | 84 | 硬式野球 |
| 2位 | 10 | バレーボール |
| 3位 | 8 | 陸上競技 |
| 4位 | 5 | バスケットボール |
| 5位 | 3 | 水泳競技 |
| | 3 | 卓球 |
| | 3 | サッカー |
| 8位 | 2 | 硬式テニス |
| | 2 | ハンドボール |
| 10位 | 1 | 体操競技、ラグビー、軟式野球 |
| <高校期> | | |
| 1位 | 68 | 硬式野球 |
| 2位 | 9 | 陸上競技 |
| 3位 | 5 | バレーボール |
| 4位 | 4 | 硬式テニス |
| 5位 | 3 | サッカー |
| | 3 | バスケットボール |
| 7位 | 2 | ソフトボール |
| | 2 | ラグビー |
| 9位 | 1 | 軟式野球、水泳競技、卓球、弓道・アーチェリー バドミントン、体操競技、軟式テニス |
| <大学期> | | |
| 1位 | 7 | 硬式野球 |
| 2位 | 3 | 陸上競技 |
| 3位 | 1 | ソフトボール、バレーボール、ラグビー |

になった。

3. 6 まとめ

中高年競技者のスポーツ・キャリアを検証してきた結果は、下記のようにまとめることができる。

1) 陸上競技では、中学校から高校期にかけて、専門化が進んでおり、高校期に5割が陸上競技の部活動に入っている。しかし、残りは社会人になってから専門化されており、ジョギングから入って、次第に競技へと進んだ者も少なくないことがわかる。

2) 中高年の水泳競技者では、学校時代に専門化された者は3割強でしかない。すなわち、中年

期になってから、水泳を始め、競技生活へと進んだことが明らかである。

3) 中高年のテニス競技者においては、大学時代からテニス（硬式テニス）を継続した者と、学校時代にはソフトテニス経験者であったが、社会人になってから、テニスへと「トランسفァー組」（移行組）の2つのタイプに分けることができる。

4) 中高年の男性ソフトボール競技者においては、学校時代では、野球や他の種目を経験していたが、社会人になってからソフトボールの競技へと入った者がほとんどである。それゆえ、「トランسفァー組」といえるが、職場におけるチー

表4-6 学校期における部活動などの定期的活動：バスケットボール（N=169）

| 順位 | N | 種目 |
|---------------------|-----|---------------------------|
| <小学校期> | | |
| 1位 | 11 | バスケットボール |
| 2位 | 9 | 陸上競技 |
| 3位 | 5 | ソフトボール |
| 4位 | 2 | 水泳競技 |
| 5位 | 1 | 剣道、体操競技 |
| <中学校期> | | |
| 1位 | 130 | バスケットボール |
| 2位 | 8 | 陸上競技 |
| 3位 | 6 | バレーボール |
| 4位 | 2 | 硬式テニス |
| 5位 | 2 | ソフトボール |
| 6位 | 1 | 水泳競技、体操競技、軟式テニス バドミントン |
| <高校期> | | |
| 1位 | 159 | バスケットボール |
| 2位 | 3 | 陸上競技 |
| 3位 | 2 | 体操競技 |
| 4位 | 1 | 水泳競技 |
| <大学期> | | |
| 1位 | 63 | バスケットボール |
| 2位 | 3 | 硬式テニス |
| 3位 | 1 | スキー、陸上競技、体操競技 |

ムや仕事関連のチームで活動している者が多いと推察される。

5) 中高年の女性バスケットボール競技者におい

ては、中学校と高校において部活動で経験した者が現在も活動を続けているもの者がほとんどである。

5. スポーツ活動に対する「のめり込み」意識

報 告 者 菊 幸一¹⁾

本章の目的は、中高年の全国大会上位入賞者の各スポーツ活動に対する意識や態度を、当該スポーツ活動に対する「のめり込み」¹⁾の度合いとして分析し、各種目の「のめり込み」意識の比較を行い、その特徴を明らかにすることである。

スポーツ活動に比較的没頭していると思われる全国大会上位入賞者のスポーツ意識は、一般的にはかなり高いレベルの没頭度を示すと予測されるが、その内容はさまざまな角度からとらえられるであろうし、各種目によっても異なる様相を示すものと思われる。われわれは、ややもするとチャンピオン志向の強いスポーツ参加者の意識を単にスポーツ活動に熱心に取り組み、周囲をあまり気にしない特別な人びとと一括してとらえる傾向があるが、そのような全般的なとらえ方ではどのような意識が改善の対象となり、何がその規定要因となる傾向にあるのかを理解することはできない。

そこで、本研究では、すでに多々納、松尾ら²⁾が社会体育領域におけるボランティア指導者の指導に対する没頭度、あるいはのめり込み度として用いた内容を参考にして、以下の8つの「のめり込み」項目を設定した。

- 1) 生きがい
「スポーツ活動は最高の生きがいである」
- 2) 出費許容
「スポーツ活動に対する多少の出費はやむをえない」
- 3) 練習優先
「仕事や家のことと練習が重なったとき、練習を優先する」
- 4) 周囲からの期待
「周囲は自分が勝つことを期待している」
- 5) 試合集中
「試合が近づくと試合のことで頭がいっぱいになる」

になる」

6) 練習継続

「決められた練習は絶対に休むべきでない」

7) 同一技能志向

「技能レベルの違う人とは練習したくない」

8) 身内意識

「クラブや他のスポーツ仲間を身内だと感じる時がある」

以上の質問項目に対して、「非常にそう思う」「まあそう思う」「あまり思わない」「全く思わない」の4段階尺度により回答を求めた（「無回答」については、図の中で「全く思わない」の右端に数値のみを表示した）。なお、分析に際しては陸上、水泳を個人種目群、テニスを対人種目群、バスケットボール、ソフトボールを集団種目群に分けてその特徴をみるようにした。

1. 種目別にみた「のめり込み」意識

1. 1 スポーツ活動への生きがい（図5-1）

図5-1より、各種目とも「非常にそう思う」「まあそう思う」を合わせるといずれも9割以上を越えている。なかでも、テニスの「非常にそう思う」は7割近くを占め、非常に生きがい度が高いことがわかる。それに対して、バスケットボールは「非常にそう思う」が23.1%と最も低く、比較的生きがい度が低い傾向にある。

1. 2 スポーツ活動に対する出費の許容度（図5-2）

図5-2より、各種目とも「非常にそう思う」「まあそう思う」を合わせるとほぼ全員に近い割合で出費はやむをえないと思っている。とくに、テニスや水泳では「非常にそう思う」が45%強を占めており、他の種目よりその許容度が高い傾向

1) 奈良女子大学

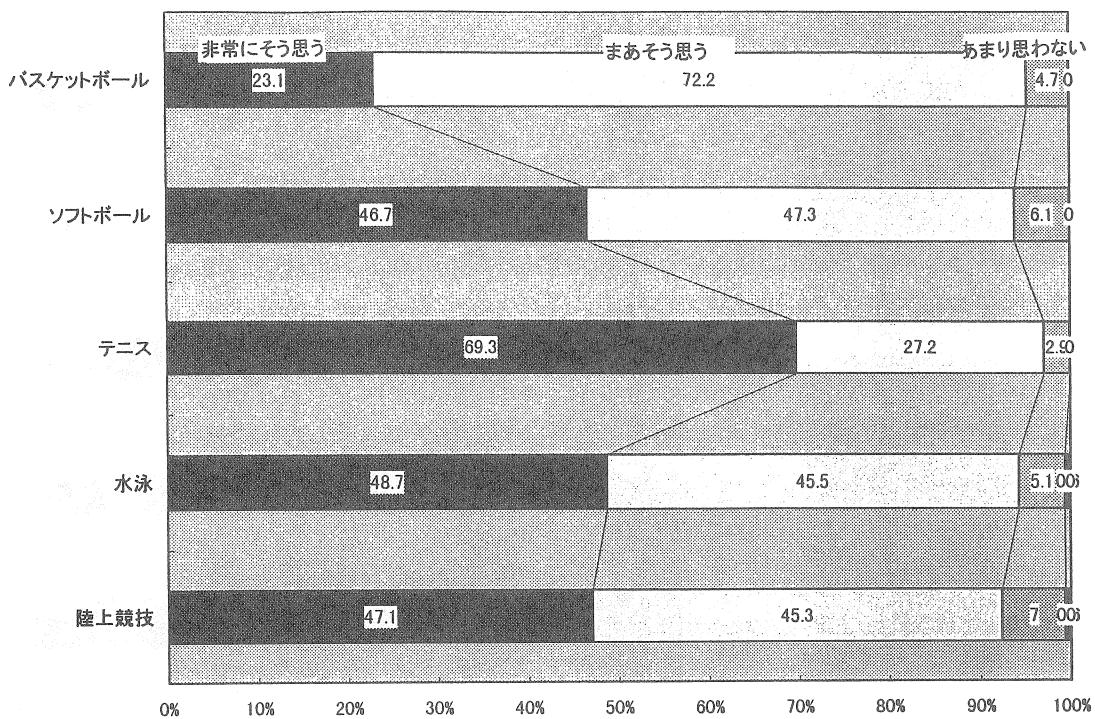


図 5-1 スポーツ活動への生きがい

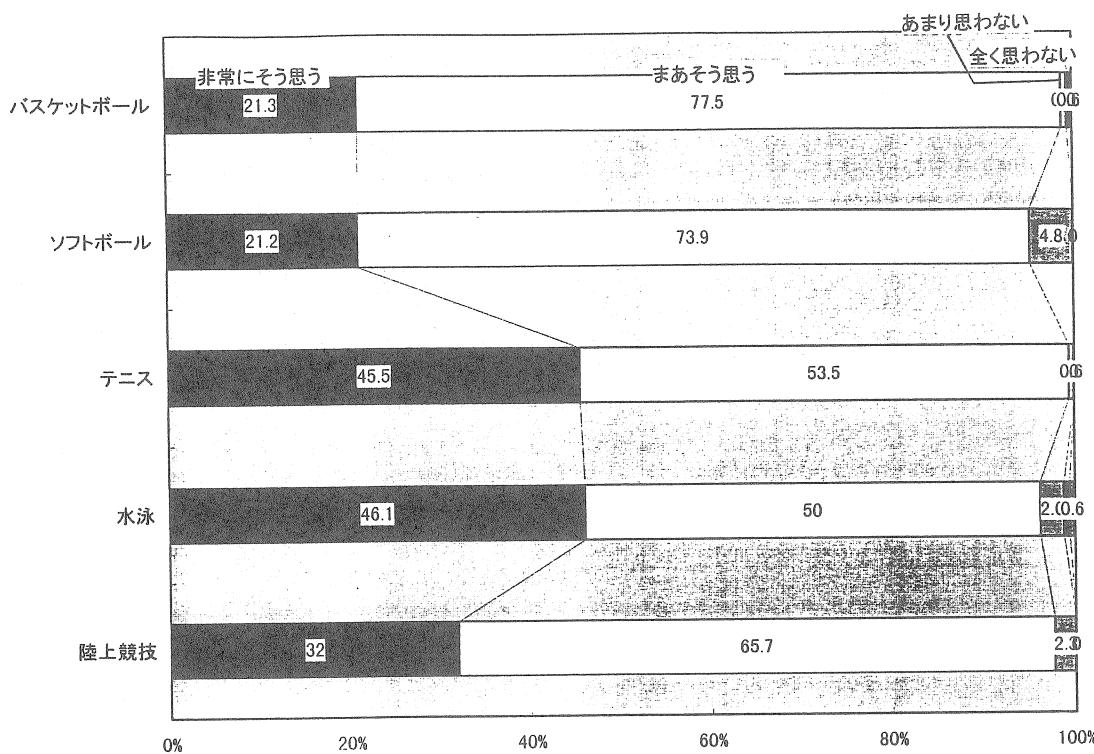


図 5-2 スポーツ活動に対する出費の許容度

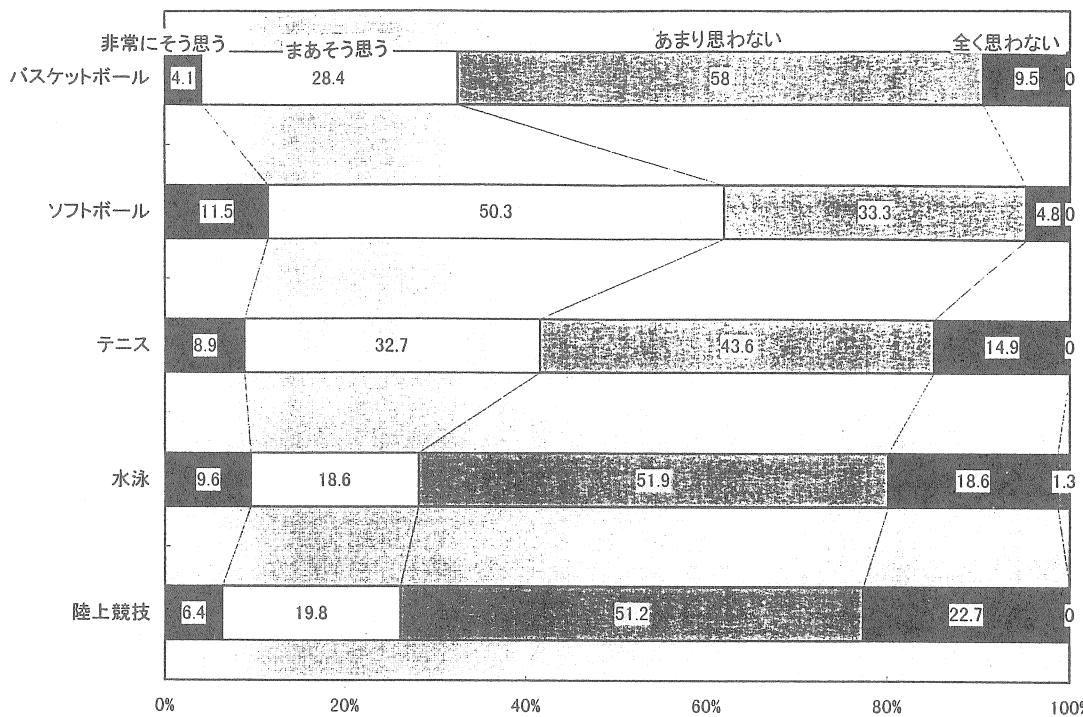


図 5-3 練習への優先意識

がみられる。集団種目については、「非常にそう思う」が2割程度で比較的許容度が低い。

1.3 練習への優先意識（図 5-3）

図 5-3 より、「非常にそう思う」「まあそう思う」を合わせるとソフトボールが61.8%と5割を越え、練習への優先意識、のめり込み度が高いことがわかる。これに対して、水泳、陸上などの個人種目群は3割に満たず、比較的低い傾向が示されている。個人種目は、練習のスケジュールが比較的柔軟に組める環境にあることが影響していると考えられる。

また、同じ集団種目でもバスケットボールは32.5%とソフトボールに比べ1/2程度であるが、これは男女差が影響しているものと思われる。すなわち、バスケットボールの回答者はほとんど女性であり、ソフトボールの回答者がすべて男性であることから社会文化的な性差（ジェンダー）に伴う相違が示されているものと考えられよう。また、全国大会上位入賞者であるとは言いながらバスケ

ットボールのサンプルは「全国ママさんバスケットボール交歓会」となっており、他の全国大会に比べ交流を重視しているのかもしれない。少なくとも、意識の上からはそのような特徴がみられる。

1.4 周囲からの勝利への期待（図 5-4）

図 5-4 より、「非常にそう思う」「まあそう思う」を合わせるとバスケットボールを除いて5割を越えるが、とくにソフトボールやテニスが比較的割合が高い。バスケットボールは周囲からの勝利への期待が比較的低いが、これは40代の女性参加者がほとんどを占める今回のバスケットボール回答者の特徴と前述した大会の趣旨を考えると、主婦層で全国大会上位入賞をめざす中年女性に対して、周囲がそれほど勝利を期待していないし、本人たちも期待されていないと認識していることの表れであろう。

1.5 試合への意識の集中（図 5-5）

図 5-5 より、「非常にそう思う」「まあそう思

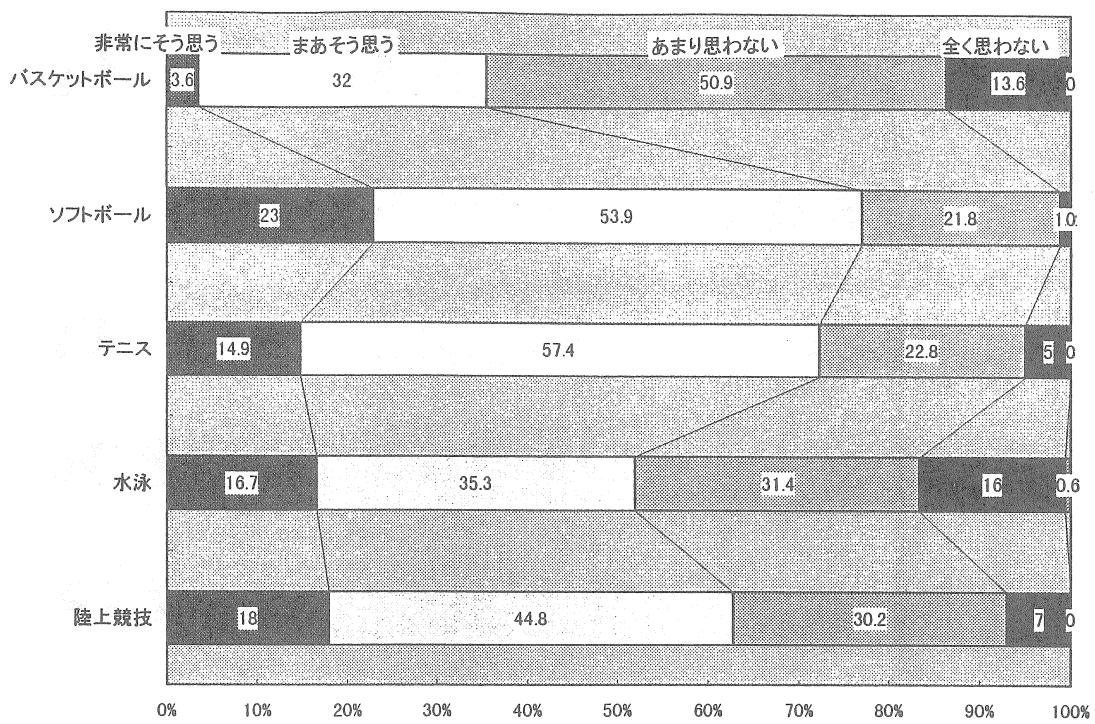


図 5-4 周囲からの勝利への期待

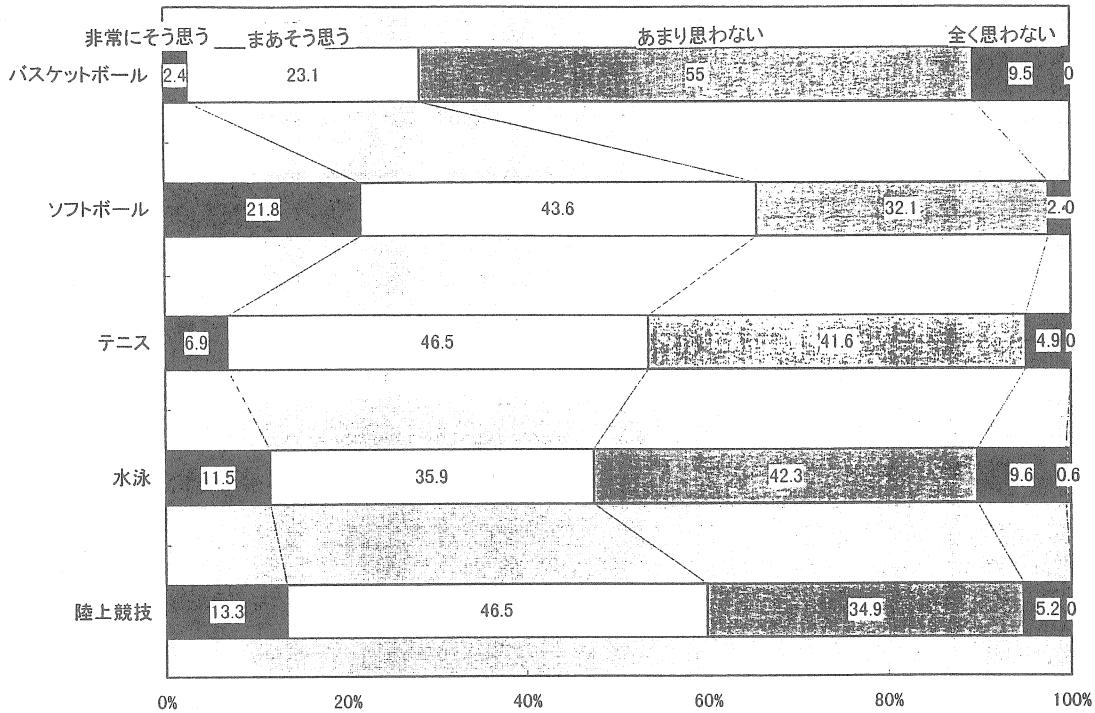


図 5-5 試合への意識の集中

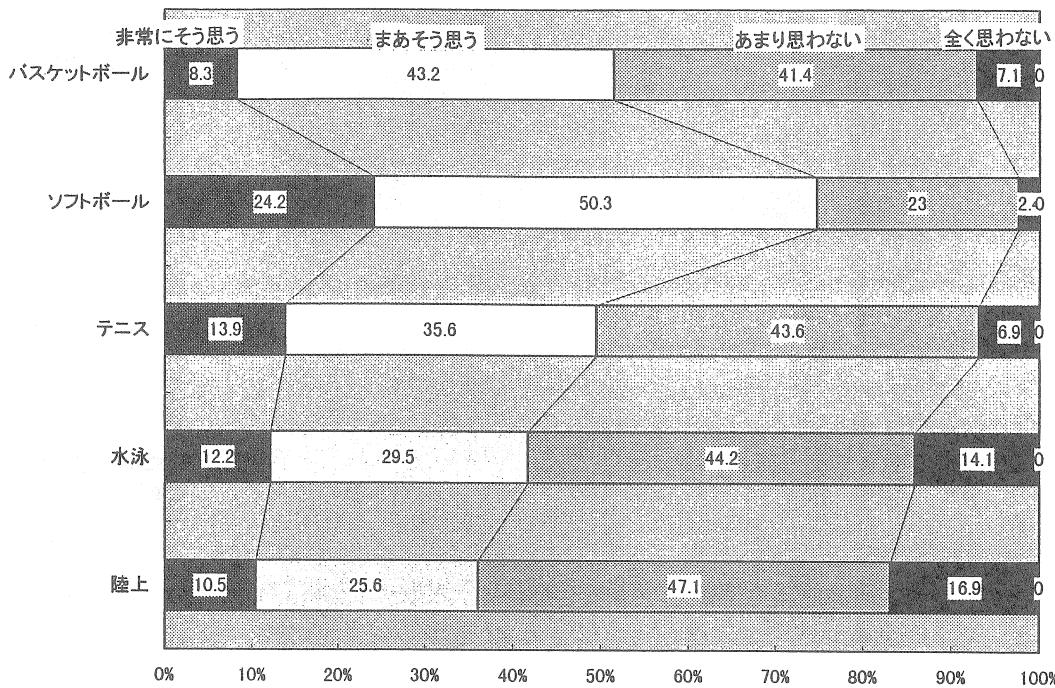


図 5-6 練習継続への信念

う」を合わせると 6 割を占めるソフトボール、陸上競技は、試合への意識の集中度が比較的高い。

「非常にそう思う」だけで見るとソフトボールが 21.8% と最も高く、陸上 13.3%、水泳 11.5% がそれに続いている。個人種目は個人の力量の結果がそのまま試合に影響を及ぼすことから、コンディショニング等に対する配慮によって試合への意識の集中度が高まることが予想される。

同じ集団種目であるソフトボールとバスケットボールの意識の差異は、これまで述べてきたように勝利志向のレベルやそれを規定する 1 つの要因としての性差が考えられる。

1. 6 練習継続への信念 (図 5-6)

図 5-6 より、「非常にそう思う」「まあそう思う」を合わせるとソフトボールを除いて 5 割前後か、あるいはそれに満たない割合であることから、練習継続に対する脅迫的なまでの信念はなく、約半数の人びとは練習それ自体を楽しんでいるようと思われる。

しかし、ソフトボールについては、「非常にそう

思う」「まあそう思う」24.2%、「まあそう思う」50.3% と非常に高く、かなりストイックに勝利をめざした練習に対する厳しい態度をとっており、のめり込み度が高い様子がうかがえる。この 1 つの要因としては、男性であることもさることながら、ソフトボール実施者の 3 割弱が小学校期においてすでに野球へ専門化しており、中・高校期においても野球を第 1 位に経験していることがあげられよう(「4. 過去のスポーツ活動の状況」の章を参照)。すなわち、その時代の経験から身に付けた野球特有のスポーツ観や態度が、少なからずこのような練習継続に対する「のめり込み」意識に影響していると考えられるのである。

それに対して、同じようなスポーツキャリアを示すバスケットボールは、「非常にそう思う」が 8.3% と比較的低い割合になっており、当該スポーツ種目に特有のスポーツ観の影響は比較的少ないようと思われる。

1. 7 同一技能レベルへの志向 (図 5-7)

図 5-7 より、練習相手として技能レベルの違

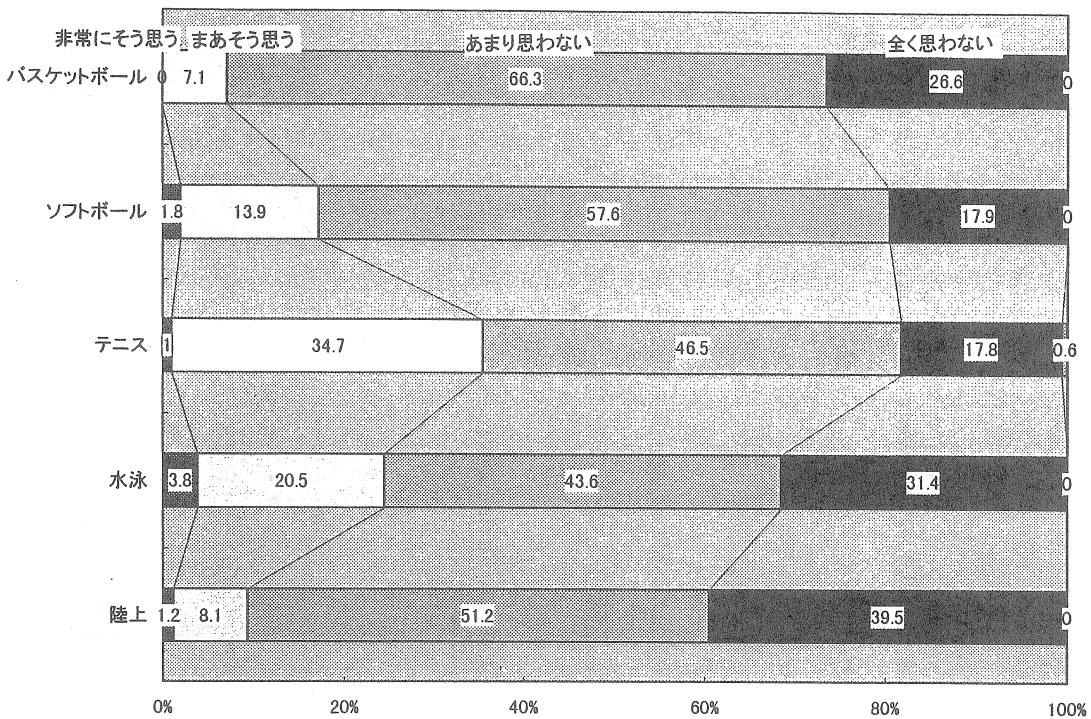


図5-7 同一技能レベルの志向

う人を嫌う傾向は、テニスで比較的高く「非常にそう思う」「まあそう思う」を合わせると35.7%である。これは、対人種目としてのテニスの特性に由来することが考えられよう。

同じ集団種目でもバスケットボールはこれまで述べてきた大会やサンプルの特徴からさまざまなレベルの人たちと練習を楽しむ傾向があり、陸上競技にもそのような傾向が現れている。水泳は個人種目でありながら、今回のサンプルについて言えば、練習相手に対する同一技能レベルへの志向が比較的高いように思われる。

しかし、いずれにしても6割～9割が練習相手にこだわる志向は持っておらず、全国大会上位入賞者でさえ、練習をさまざまなレベルの人たちと楽しんでやるべきだと考えていることがわかる。

1.8 仲間への身内意識（図5-8）

図5-8より、「非常にそう思う」「まあそう思う」を合わせると各種目とも7割から8割程度身内意識を感じており、集団への帰属意識が高いこ

とが示されている。とくに水泳では、「非常にそう思う」が23.1%と他の種目よりも高く、個人や集団といった種目の特徴から帰属意識の高低が決定されていない様子がうかがえる。1つの要因として考えられるのは、過去のスポーツ活動の状況からとくに水泳の中高年女性では、40歳以上の中高年から水泳を開始した者が多い（「4. 過去のスポーツ活動の状況」の章を参照）ため、比較的当初から身内志向や仲間意識を求める意識が強く、チャンピオン志向であってもそのような意識が継続しているのではないかということである。だとすれば、中高年者のスポーツキャリアがある程度スポーツに対する意識、とりわけ「のめり込み」意識の内容にも影響を及ぼすことが考えられよう。

このように、仲間や他者に対する意識を規定するのは結果的にはクラブやチームの凝集性の程度であろうが、それは種目や勝利志向とはあまり関係なく、あくまでそれぞれの集団の雰囲気や志向性をどのように形成してきたのか、あるいはいつ頃からそのスポーツに社会化されていったのかの

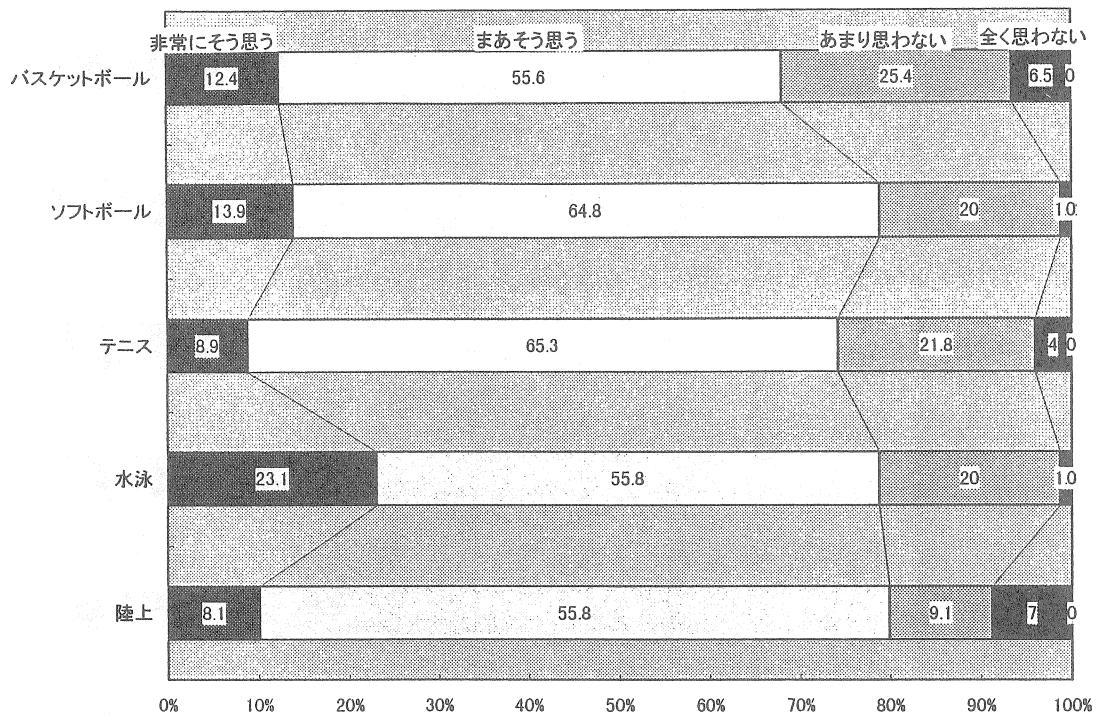


図 5-8 仲間への身内意識

時期が影響しているように思われる。

2. 全体及び集団・個人種目群別にみた尺度項目の因子構造

次に、全国大会上位入賞者のスポーツに対する「のめり込み」意識を示す尺度項目に関する因子構造を、全体及び集団・個人種目群別に見てみることにしよう。因子分析には、主因子解とノーマルバリマックス回転を用い、固有値1.00以上の因子を抽出した（S A S 統計パッケージによる）。

2. 1 全体的な尺度項目の因子構造(表 5-1)

スポーツ活動に対する全体的な「のめり込み」意識を示す尺度の因子分析の結果は、表 5-1 に示す通りである。2 因子が抽出され、累積分散寄与率は46.9%であった。全体的な寄与率としては高くないが、第1因子の分散寄与率が非常に高く、今回の尺度項目がほぼ1つの因子によって説明される構造を持っていることがわかる。

第1因子：この因子の分散寄与率は31.9%であ

り、非常に高い寄与率を示した。4 項目からなり、600程度の高い因子負荷量を示している。これらの項目は、「試合が近づくと試合のことでの頭がいっぱいになる」（試合への集中）「周囲は自分が勝つことを期待している」（周囲からの勝利への期待）「決められた練習は絶対に休むべきでない」（練習継続への信念）「仕事や家のことと練習が重なったとき、練習を優先する」（練習優先の意識）などであり、練習や試合に対するのめり込み意識に関する内容になっている。したがって、この因子は「練習・試合への集中」に関する因子と解釈することができる。

第2因子：この因子は、15.0%の分散寄与率を占め、2 項目から構成されていた。「スポーツ活動に対する多少の出費はやむをえない」（スポーツ活動出費への許容）「クラブや他のスポーツ仲間を身内だと感じる時がある」（仲間への身内意識）といった項目であり、これらはスポーツ環境を快適にしようとして、金銭を費やしたり仲間意識を高めようとするのめり込み意識に関する内容になって

表5-1 全種目における「のめり込み」意識の因子分析の結果（回転後）

| | 項目 | F 1 | F 2 | h^2 |
|------------------|----------------|-------|-------|-------|
| F 1 練習・試合への集中 | 5 試合への集中 | 647 | | 0.503 |
| | 4 周囲からの勝利への期待 | 591 | | 0.534 |
| | 6 練習継続への信念 | 548 | | 0.442 |
| | 3 練習優先の意識 | 511 | | 0.335 |
| F 2 スポーツ快適環境 | 2 スポーツ活動出費への許容 | | 638 | 0.817 |
| | 8 仲間への身内意識 | | 358 | 0.716 |
| 固有値 | | 2.549 | 1.199 | 3.748 |
| 分散寄与率 | | 31.9 | 15.0 | |
| 累積分散寄与率 | | 31.9 | 46.9 | |

注) 因子負荷量の小数点は削除している。

いる。したがって、この因子は「スポーツ快適環境」に関する因子と解釈することができるであろう。

以上、「のめり込み」意識に関する全体的な因子構造は、「練習・試合への集中」と「スポーツ快適環境」に関する2つの因子から構成されている。とりわけ第1因子の固有値および分散寄与率が非常に高いことから、予測されたことではあったが「練習・試合への集中」因子が中高年の全国大会上位入賞者にとってもっともよく「のめり込み」意識を示すものとなっている。また、金銭への許容や集団への帰属意識といったモノやヒトに対するこだわりやのめり込みも「スポーツ快適環境」に関する因子としてみられ、チャンピオン志向の中高年競技者がスポーツ活動に付随する内容にも次第にこだわっている様子がうかがえよう。

2. 2 個人種目群における尺度項目の因子構造

陸上競技、水泳を個人種目群として設定し、その「のめり込み」意識を示す尺度の因子分析を行なった結果が、表5-2である。2因子が抽出され、累積分散寄与率は45.0%であった。分散寄与率としては先の全体的なデータのそれとほぼ同じ程度の数値になっている。

第1因子：この因子の分散寄与率は28.0%であり、非常に高い寄与率を示した。2項目からなり、.600程度の高い因子負荷量を示している。これらの項目は、「試合が近づくと試合のことで頭がいっぱいになる」(試合への集中)「決められた練習は絶対に休むべきでない」(練習継続への信念)などであり、練習や試合に対するのめり込み意識に関する内容になっている。したがって、この因子は先の全体的な因子と同様に「練習・試合への集中」に関する因子と解釈することができる。しかし、先の項目であげられた「周囲は自分が勝つことを期待している」(周囲からの勝利への期待)「仕事や家のことと練習が重なったとき、練習を優先する」(練習優先の意識)といった項目の因子負荷量は比較的低く、個人種目群では全体的なデータで構成される第1因子の項目内容が少なくなっている。これは、のめり込み意識の尺度項目が種目特性によって多少変化することを示すものであろう。

第2因子：この因子は、17.0%の分散寄与率を占め、2項目から構成されていた。「スポーツ活動に対する多少の出費はやむをえない」(スポーツ活動出費への許容)「クラブや他のスポーツ仲間を身内だと感じる時がある」(仲間への身内意識)といった項目であり、これらは先の全体から抽出され

表5-2 個人種目における「のめり込み」意識の因子分析の結果（回転後）

| | 項目 | F 1 | F 2 | h^2 |
|------------------|----------------|-------|-------|-------|
| F 1 練習・試合への集中 | 6 練習継続への信念 | 616 | | 0.758 |
| | 5 試合への集中 | 561 | | 0.435 |
| F 2 スポーツ快適環境 | 8 仲間への身内意識 | | 603 | 0.772 |
| | 2 スポーツ活動出費への許容 | | 593 | 0.900 |
| 固有値 | | 2.242 | 1.358 | 3.600 |
| 分散寄与率 | | 28.0 | 17.0 | |
| 累積分散寄与率 | | 28.0 | 45.0 | |

注) 因子負荷量の小数点は削除している。

た項目内容と同じである。したがって、この因子も「スポーツ快適環境」に関する因子と解釈することができるであろう。

しかし、先の全体的なデータで構成される項目のうち「クラブや他のスポーツ仲間を身内だと感じる時がある」の因子負荷量は、.604と高い値を示しており、個人種目群では比較的仲間への身内意識が高い傾向が示されている。この主たる要因は、先の種目別にみた「のめり込み」意識における「仲間への身内意識」で解釈したように、水泳実施者の意識構造にあるように思われる。したがって、このような水泳実施者の意識構造が因子構造の負荷量にも微妙に反映していることが理解できよう。

以上、のめり込み意識に関する個人種目群の因子構造は、全体の因子構造と同様に「練習・試合への集中」と「スポーツ快適環境」に関する2つの因子から構成されていた。しかし、第1因子については、「周囲からの勝利への期待」「練習優先の意識」が除かれ、第2因子では身内意識の因子負荷量が比較的高い傾向がみられた。個人種目群では、種目特性として個人裁量権が大きく、個人の達成に意識が集中しやすいことから、あまり周辺の人びとからの期待を感じなくてもよい環境に置かれており、そのことが「のめり込み」意識を

構成する因子構造の項目内容に影響を与えているのかもしれない。また、身内意識の因子負荷量の程度の高さは、種目特性に起因するというよりはスポーツキャリアに関連するものと考えられよう。

2.3 集団種目群における尺度項目の因子構造

バスケットボール、ソフトボールを集団種目群（テニスを除く）として設定し、その「のめり込み」意識を示す尺度の因子分析を行なった結果が、表5-3である。2因子が抽出され、累積分散寄与率は52.4%であった。分散寄与率としては先の全体的なデータの値を6%程度上回る数値になっている。

第1因子：この因子の分散寄与率は39.3%であり、全体や個人種目群の値を上回る非常に高い寄与率を示した。3項目からなり、.634～.766程度の高い因子負荷量を示している。これらの項目は、「試合が近づくと試合のことで頭がいっぱいになる」（試合への集中）「決められた練習は絶対に休むべきでない」（練習継続への信念）「周囲は自分が勝つことを期待している」（周囲からの勝利への期待）などであり、練習や試合に対する「のめり込み」意識に関する内容になっている。したがって、この因子は先の全体や個人種目群の因子と同

表5-3 集団種目における「のめり込み」意識の因子分析の結果（回転後）

| | 項目 | F 1 | F 2 | h^2 |
|------------------|---------------|-------|-------|-------|
| F 1 練習・試合への集中 | 5 試合への集中 | 766 | | 0.665 |
| | 6 練習継続への信念 | 695 | | 0.641 |
| | 4 周囲からの勝利への期待 | 634 | | 0.552 |
| F 2 スポーツ快適環境 | 8 仲間への身内意識 | | 580 | 0.747 |
| | 固有値 | 3.142 | 1.048 | 4.190 |
| | 分散寄与率 | 39.3 | 13.1 | |
| | 累積分散寄与率 | 39.3 | 52.4 | |

注) 因子負荷量の小数点は削除している。

様に「練習・試合への集中」に関する因子と解釈することができる。

また、先の全体や個人種目群の因子負荷量と比較すると、各項目のそれは比較的高く、集団種目群では多少「練習・試合への集中」に関する因子が強く出てくる傾向がある。これも先の個人種目群と同様に、「のめり込み」意識の尺度項目やその因子負荷量が種目特性によって多少変化することを示すものであろう。

第2因子：この因子は、13.1%の分散寄与率を占め、「クラブや他のスポーツ仲間を身内だと感じる時がある」（仲間への身内意識）という1項目から構成されていた。これらは先の全体や個人種目群から抽出された項目内容に比べ、「スポーツ活動に対する多少の出費はやむをえない」という項目が除かれた結果となっている。しかし、この因子も、これまでと同様に「スポーツ快適環境」に関する因子と解釈することはできるであろう。

また、スポーツ活動に対する出費の許容が因子を構成する項目内容から除かれているのは、種目別にみた「のめり込み」意識でも集団種目群におけるこの意識が比較的低かったことが影響していると理解できよう。

以上、「のめり込み」意識に関する集団種目群の

因子構造は、全体や個人種目群の因子構造と同様に「練習・試合への集中」と「スポーツ快適環境」に関する2つの因子から構成されている。しかし、第1因子の因子負荷量は、全体や個人種目群の因子負荷量に比べ高い傾向があり、集団種目の「のめり込み」意識は、全体的に「練習・試合への集中」により強く代表される傾向があると言えよう。また、第2因子は「身内意識」という1つの項目内容によってのみ代表されることから、個人種目群に比べて因子負荷量が比較的高い傾向がみられた。これは、集団種目群の種目特性に起因する「のめり込み」意識の因子を構成する内容と考えてよからう。

3. まとめ

- 1) 本研究の対象となったチャンピオン志向の中高年スポーツ参加者は、種目を問わずスポーツ活動に対して強い生きがいを感じている。
- 2) 全体的には、スポーツ活動に対する出費の許容、周囲からの勝利への期待、身内意識などに高い「のめり込み」意識が共通にみられる。
- 3) テニスや水泳は、当該スポーツ活動への出費を惜しまない傾向があり、集団種目では出費への「のめり込み」意識は比較的低い。

- 4) ソフトボールは全般的に試合や練習への「のめり込み」意識が高く、勝利志向へのこだわりが他の種目と比べて高い傾向にある。このような意識が醸成される1つの要因としては、ソフトボール実施者のこれまでのスポーツキャリアやそれに伴うスポーツ観の特徴、あるいはジェンダーの偏り（男性）等が考えられる。
- 5) これに対して、今回の調査対象であるバスケットボールは全般的に試合や練習への「のめり込み」意識が低く、勝利志向へのこだわりが他の種目と比べて低い傾向にあった。これは、今回の調査対象であるバスケットボールの大会の性格やジェンダーの偏り（女性）が影響しているものと思われる。
- 6) 個人種目である陸上、水泳は、練習の進め方が自分のペースで行なわれる種目特性を持っており、他の生活とのバランスを考慮して練習を行なえる環境にあることから、練習に対する二者択一的な優先意識や「のめり込み」意識は比較的低い傾向にある。
- 7) 練習相手に同一技能レベルの相手を求めるようとする排他的な志向は、ほとんどの種目においてみられないが、対人種目の特性からかテニスには比較的そのような傾向がみられる。
- 8) 水泳の身内意識の高さは、水泳開始年齢が40歳以降で比較的遅いことから、その開始動機が影響しているように思われる。
- 9) 全体的な「のめり込み」意識の因子構造は、「練習・試合への集中」と「スポーツ快適環境」に関する2つの因子から構成されており、個人種目群と集団種目群も同様な構成であるが、その項目内容は異なる。
- 10) 個人種目群は「スポーツ快適環境」の内容項目のうち「身内意識」の因子負荷量が比較的高く、集団種目群では「練習・試合への集中」のそれが比較的高い。先の種目別の考察から推察すれば、前者は水泳、後者はソフトボールの特徴が反映されていると考えられ、その要因の1つはいずれもスポーツキャリアの特徴から導き出されると考えられる。

【注および文献】

- 1) 多々納、松尾ら²⁾の「のめり込み」に関する定義は、本来ボランティア指導者の指導に対する過度の没頭が彼らの日常生活にまで及び、何らかの生活支障を引き起こしているとの考え方から導き出された概念である。しかし、本研究では、チャンピオン志向の中高年スポーツ参加者のスポーツに対する没頭の程度といった意味合いで用いられており、生活支障との関連はあまり意識されていない。
- 2) 多々納秀雄・松尾哲矢、『社会体育領域におけるボランティア指導者の実態と生活支障に関する調査（その1）』、福岡市教育委員会、1988.

6. QOL・余暇観・余暇活動の状況

報 告 者 菊 幸一¹⁾

本章では、中高年の全国大会上位入賞者における生活の充実度(Quality of Life, QOL)、余暇観、余暇活動の状況を種目別に見ていく。また、これらの状況と先の章で考察した「のめり込み」意識との関係から、種目別に何らかの特徴が見出せるかどうか併せて検討してみたい。

1. QOL (Quality of Life) (図 6-1～図 6-9)

本研究の調査では、主に QOL を測定する項目として生活者自身の質を問題とし、その中でも生活者の意識に焦点を当てて QOL の程度をみようとした¹⁾。生活者の意識には、大きく分けてその対象が個人的ニーズにかかる満足感、幸福感を示す「個人的意識」と社会的ニーズにかかる満足感、安定感を示す「社会的意識」が考えられるが、本研究では両者の意識を表わす質問項目を設定して中高年の全国大会上位入賞者における QOL の全体像を得ようとした²⁾。

図 6-1～図 6-9 までが、QOL の尺度項目について、各種目別に得られた結果である。

「非常にそう思う」「まあそう思う」を合わせて全体的にその割合をみてみると、図 6-9 の「私は、生涯の中で『これだけはやりとげたい』と思うものがある」を除いて 8～9 割に達し、非常に高い QOL の程度を示していることがわかる。図 6-9 についても、全体的には「非常にそう思う」「まあそう思う」を合わせて 7 割以上になっており、他の項目よりは低いけれども QOL の程度は高いとみてよいであろう。むしろ、質問内容から判断すれば、全国大会の上位入賞を果たし、ある程度満足している状況を示しているとも解釈できる。

さて、種目別にみてみると、「非常にそう思う」だけを比較した場合、全般的にはソフトボール、バスケットボールの割合が他の種目に比べて低い

傾向が見受けられる。先の「のめり込み」意識との関係で考えると、それが最も高い傾向にあったソフトボールと最も低い傾向にあったバスケットボールに QOL が若干低い状況がみられることになる。このような相関関係を説明するためには、さらに詳細なクロス分析や有意差検定が必要であるが、全国大会上位入賞者のスポーツ活動に対する「のめり込み」意識が高すぎても低すぎても QOL に影響を与える可能性は示唆されよう。

次に、そのような傾向にもかかわらず、図 6-4 の「家庭や職場その他において、『自分は必要とされている』と思う」でバスケットボールの「非常にそう思う」が 29.6% と比較的高い割合を示しているのは、対象者の大半を占める中高年女性の主婦役割意識の在り様を示しているのではないかと考えられる。すなわち一方では、スポーツ活動にのめり込む程度を低く押さえられながらも、他方では逆にその分だけ自らの主婦役割意識を強く意識することで QOL の程度を維持していると考えることもできるのである。

2. 余暇観 (図 6-10)

「仕事をするために余暇をとる」という仕事重視型は、ソフトボール 19.4%，水泳 12.2%，陸上 10.5% の順となっており、これに対して「余暇を楽しむために仕事をする」という余暇重視型は、テニス 35.6%，水泳 31.4%，ソフトボール 30.9% の順となっている。全種目を通じて 5 割程度の参加者が「仕事も余暇も同等に考えている」という中間型である。

中間型を含めて全体的には余暇重視型が多いが、仕事重視型の差異でみると、ソフトボールの割合が比較的高くなっている。それに比べて、テニスは余暇重視型が比較的多く、仕事重視型は全種目

1) 奈良女子大学

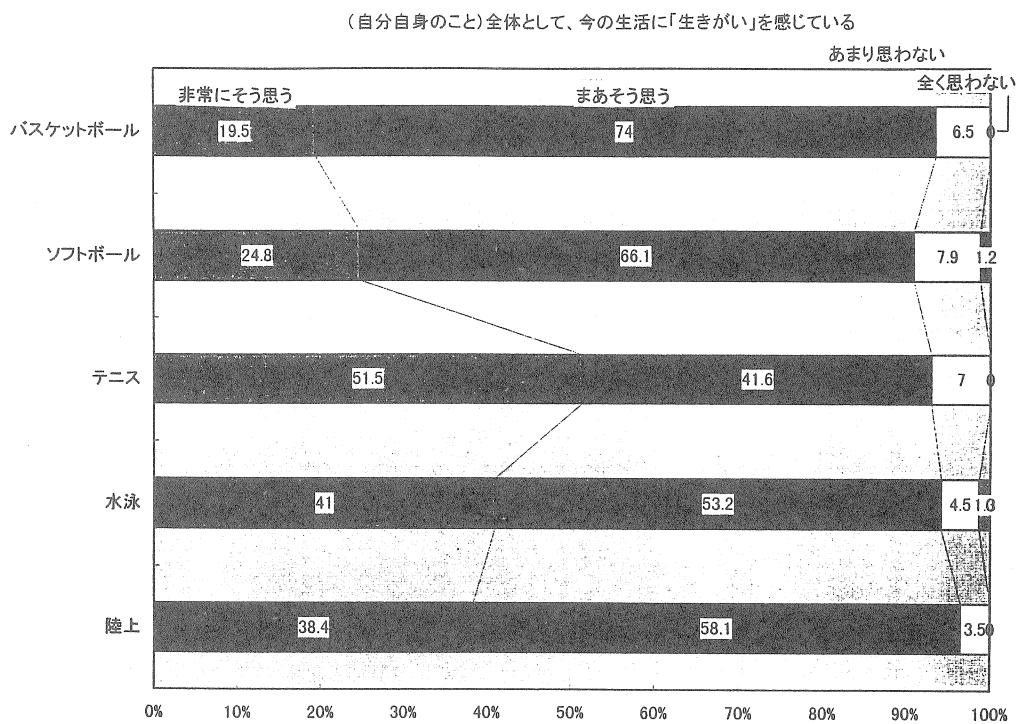


図 6-1 QOL-生きがい

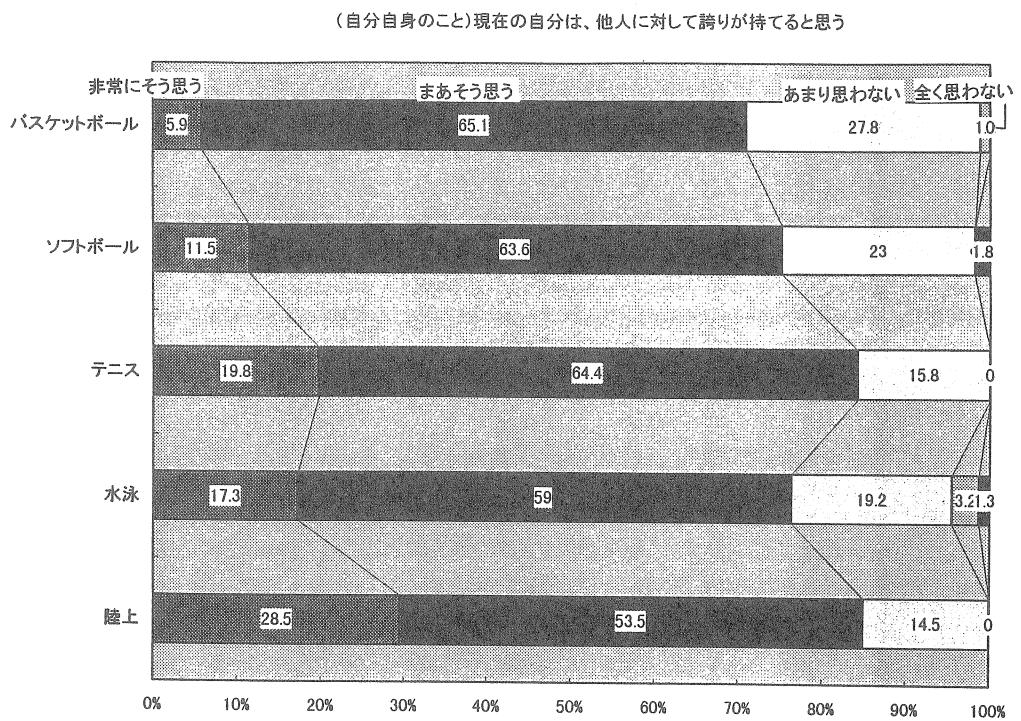


図 6-2 QOL-他人に対する誇り

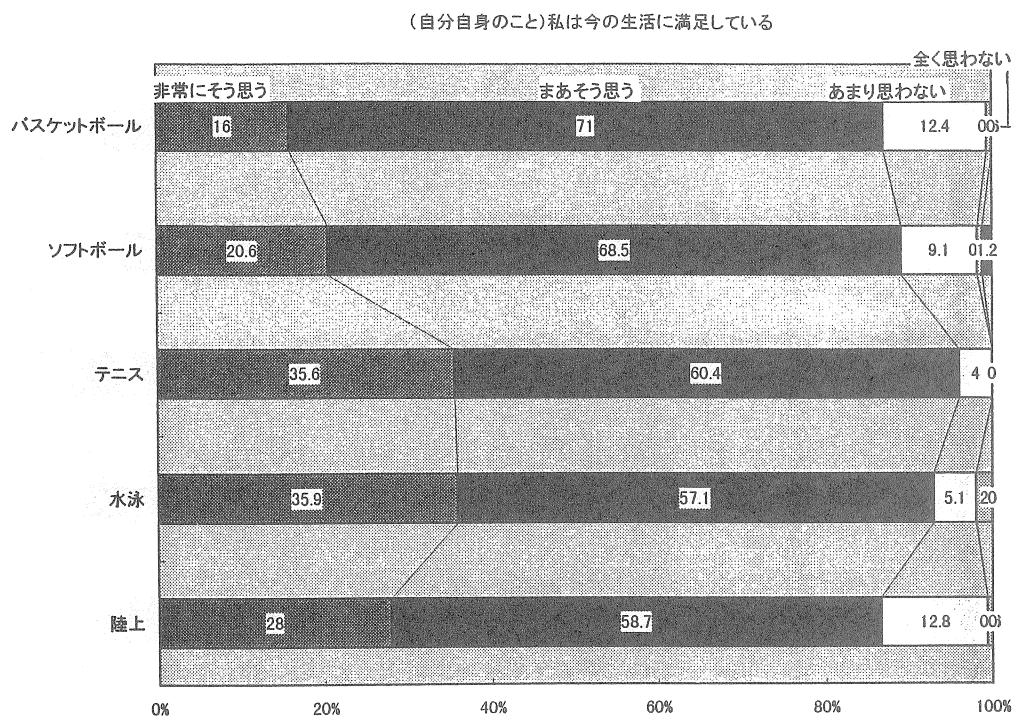


図 6-3 QOL-生活満足

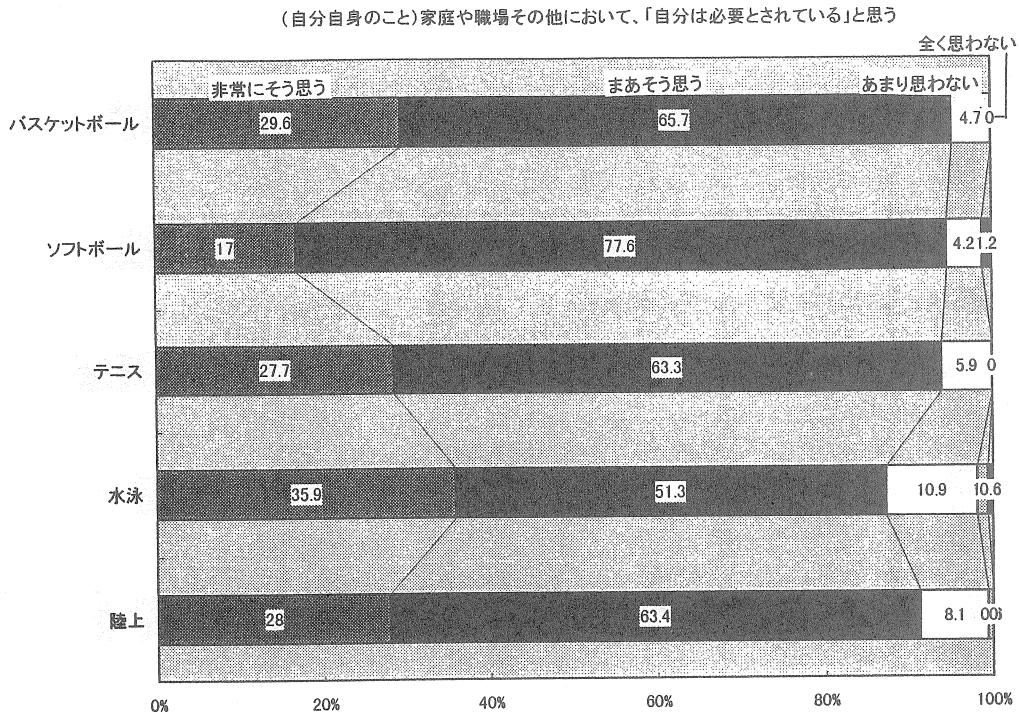


図 6-4 QOL-他者からの必要感

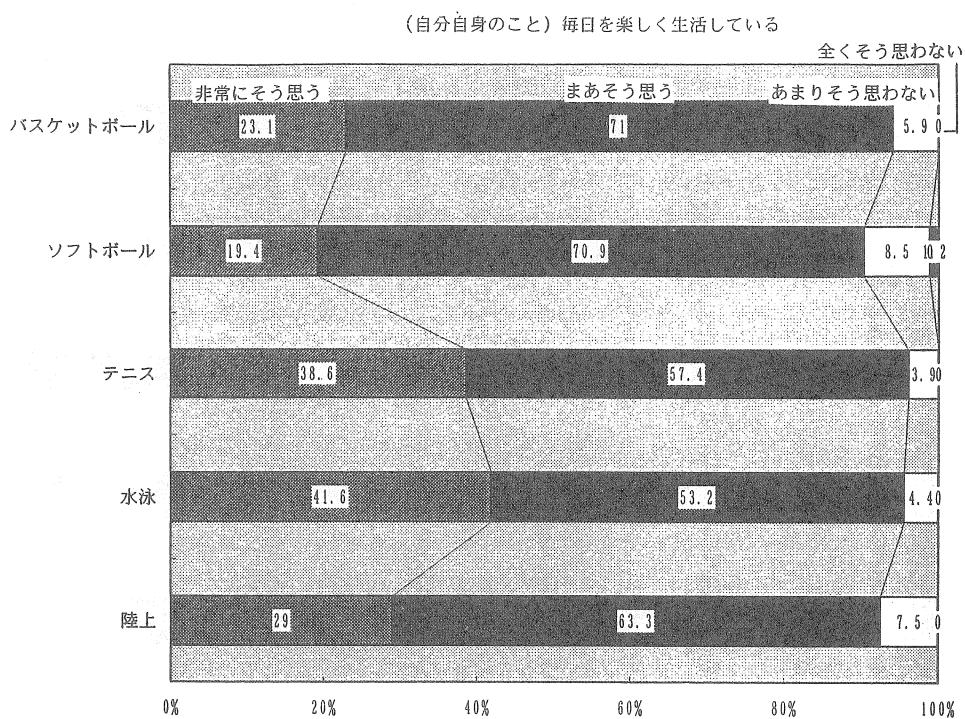


図 6-5 QOL-生活の楽しさ

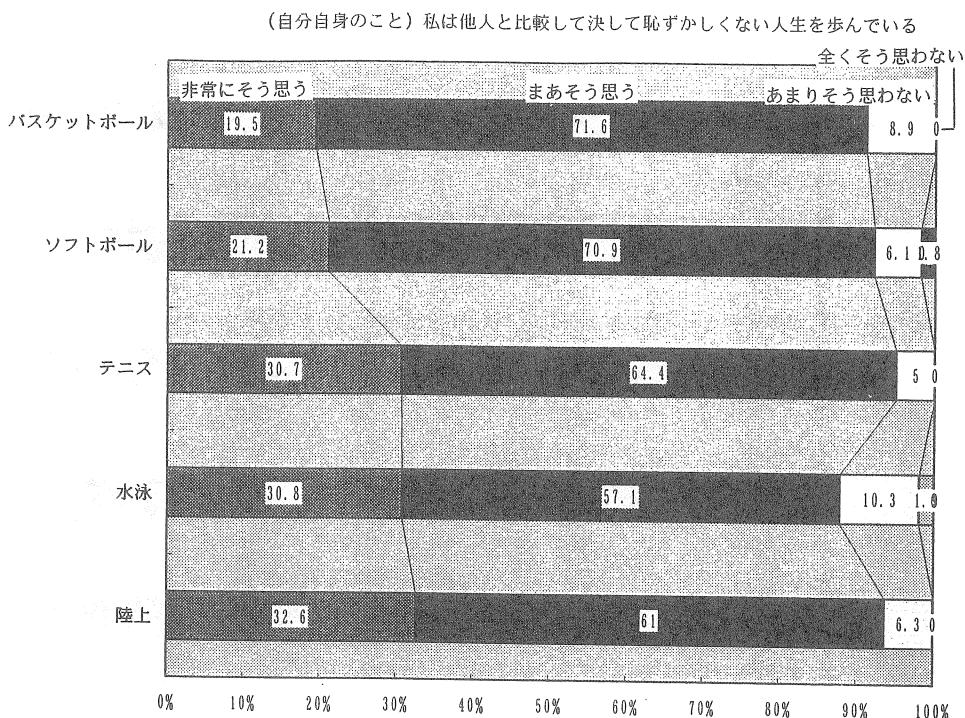


図 6-6 QOL-人生に対する誇り

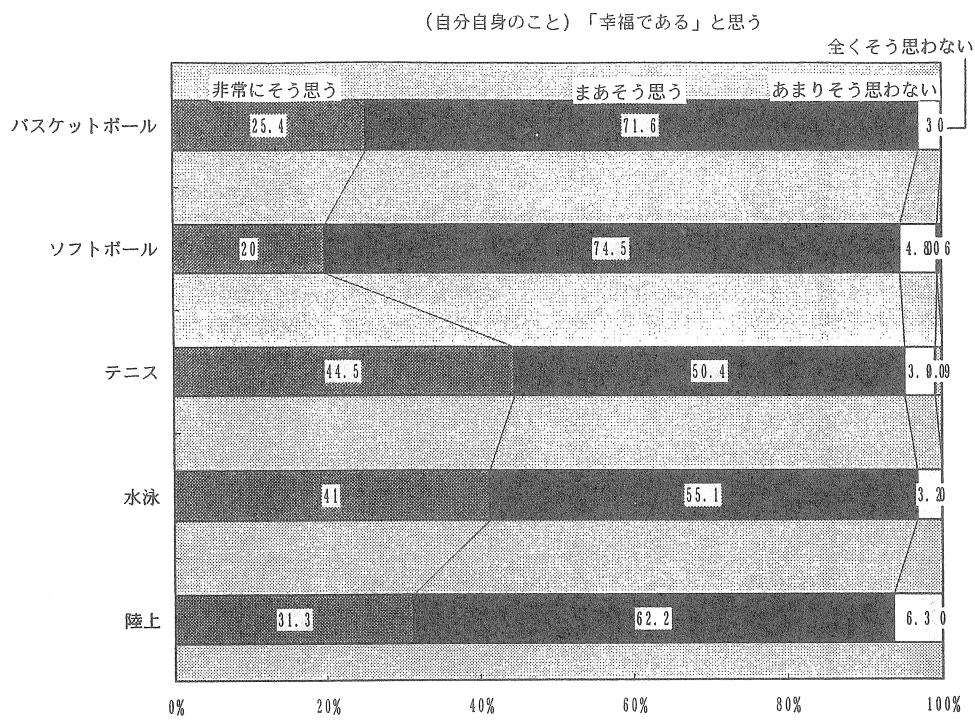


図 6-7 QOL-幸福感

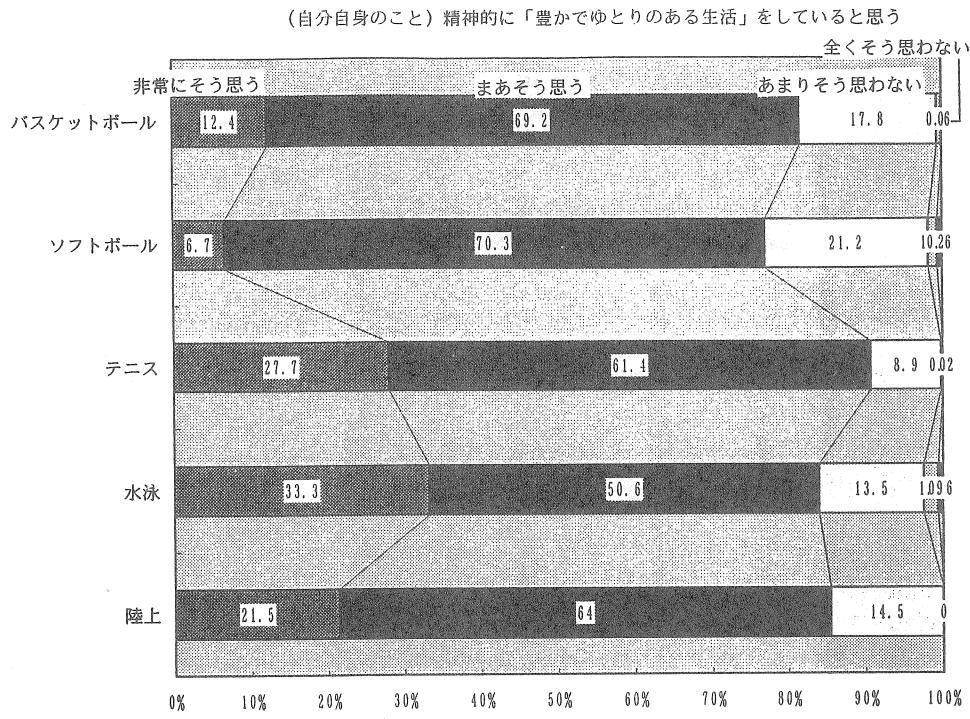


図 6-8 QOL-生活における精神的豊かさ

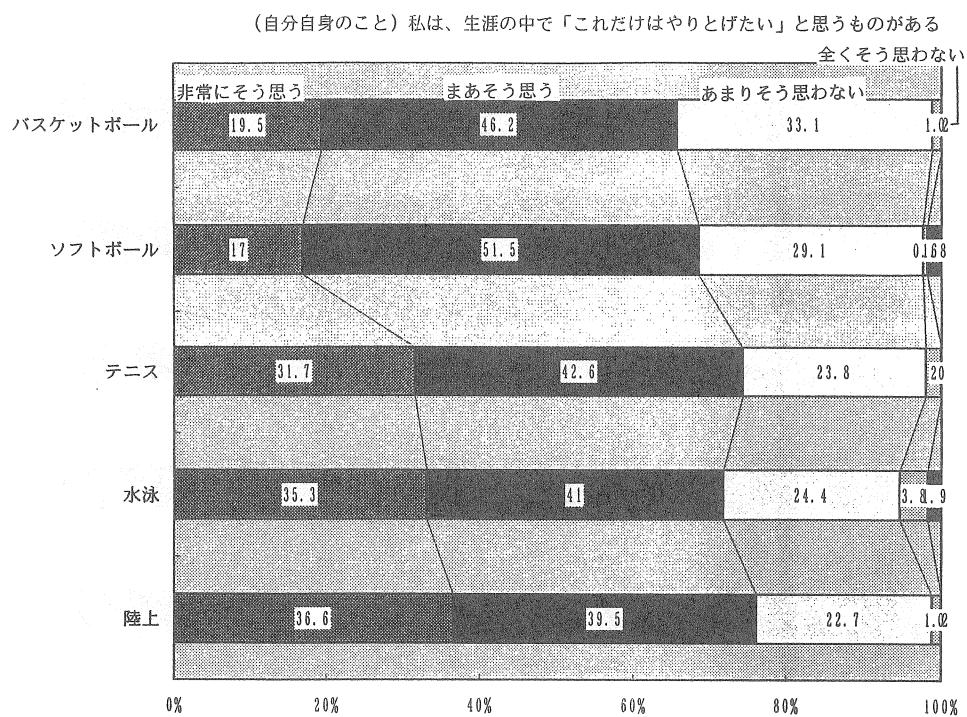


図 6-9 QOL-人生目標達成への意欲

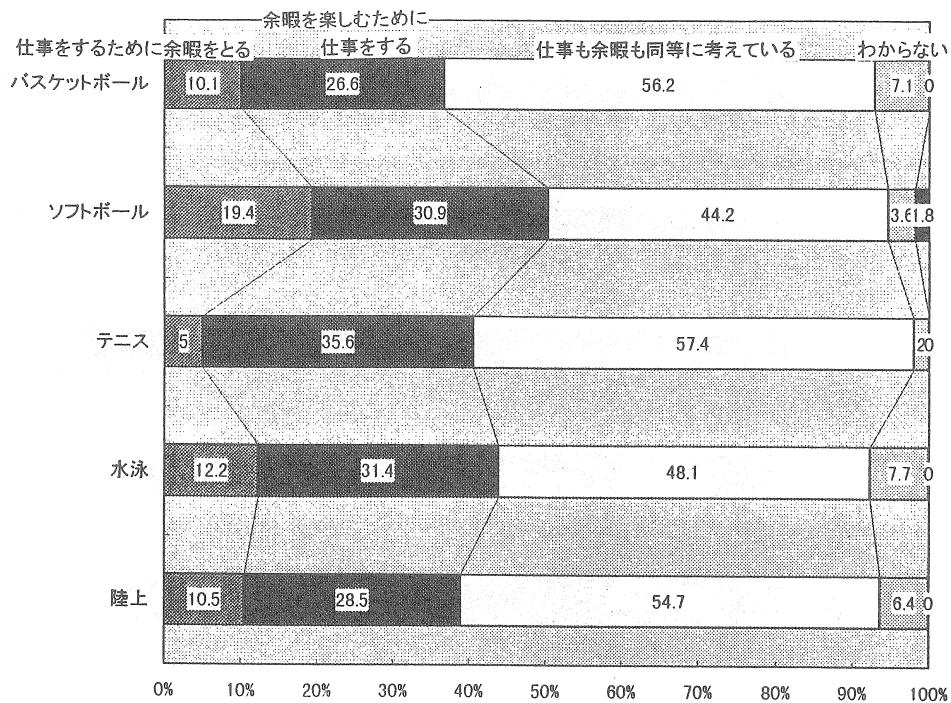


図 6-10 QOL-余暇感

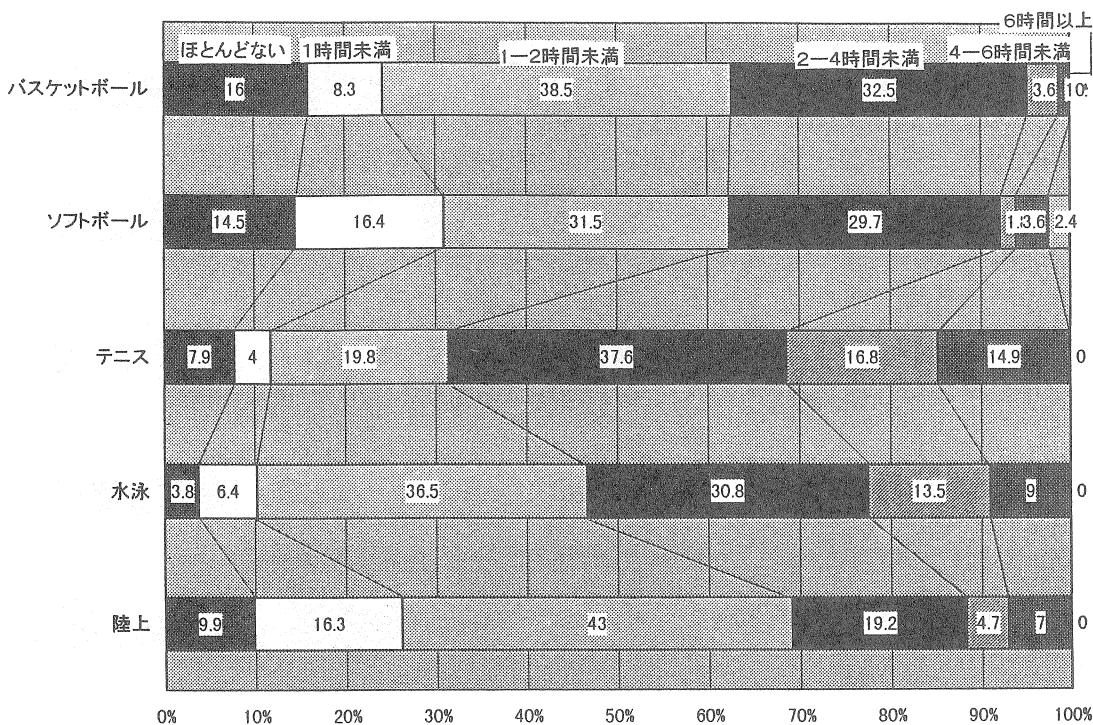


図 6-11 QOL—余暇活動に使える自由時間の程度—平日

中最も少ない5%にすぎない。先の練習や試合に対するソフトボール参加者の「のめり込み」意識の高さが、生産的な仕事重視の余暇観に関連していることが考えられる。また、テニス参加者の余暇観は、全種目の中で比較的余暇重視型の傾向があり、全国大会上位入賞者においても余暇を大切にして楽しさ重視の活動をしていることがわかる。これは、とくに女性のテニス参加者のスポーツキャリアにおいて、すでに30歳頃から他種目の女性参加者に比べ活動頻度が高く、中高年期を通じて週3日以上というスポーツ実施が日常的な生活スタイルになっていること(「4. 過去のスポーツ活動の状況」の章を参照)と関連しているのかもしれない。すなわち、すでに彼女らが、余暇重視型のスポーツ観の下でスポーツ活動を日常的に楽しむ習慣(ハビトゥス)を身に付けてきていくという意味において。

また、図には示されていないが、余暇重視型において水泳の男女参加者を比較すると、男性21.8%に対して女性41.0%、テニスのそれでは男性26.6

%に対して女性51.4%と明らかに女性の方が2倍近くの割合で余暇重視型である。仕事との関係で余暇観をみると、全国大会上位入賞者の場合でも男女の社会的な仕事や余暇に対する考え方の違い=性差(ジェンダー)がそのまま反映されており、スポーツへの取り組み方にも影響を与えているようと思われる。

3. 余暇活動に使える自由時間の程度

3. 1 平日(図 6-11)

図 6-11により、余暇活動に使える平日の自由時間の程度は、全種目を通じて1~4時間程度である。

種目別にみると、テニスで「6時間以上」と回答している者が14.9%、同じく「4~6時間未満」と回答している者が16.8%と他種目に比べて明らかに自由時間の程度が高く、それに続くのが水泳である。この要因についてみてみると、図には示されていないが、テニス男性で「1~2時間未満」と回答した者が25.0%、同じく女性で10.8%であ

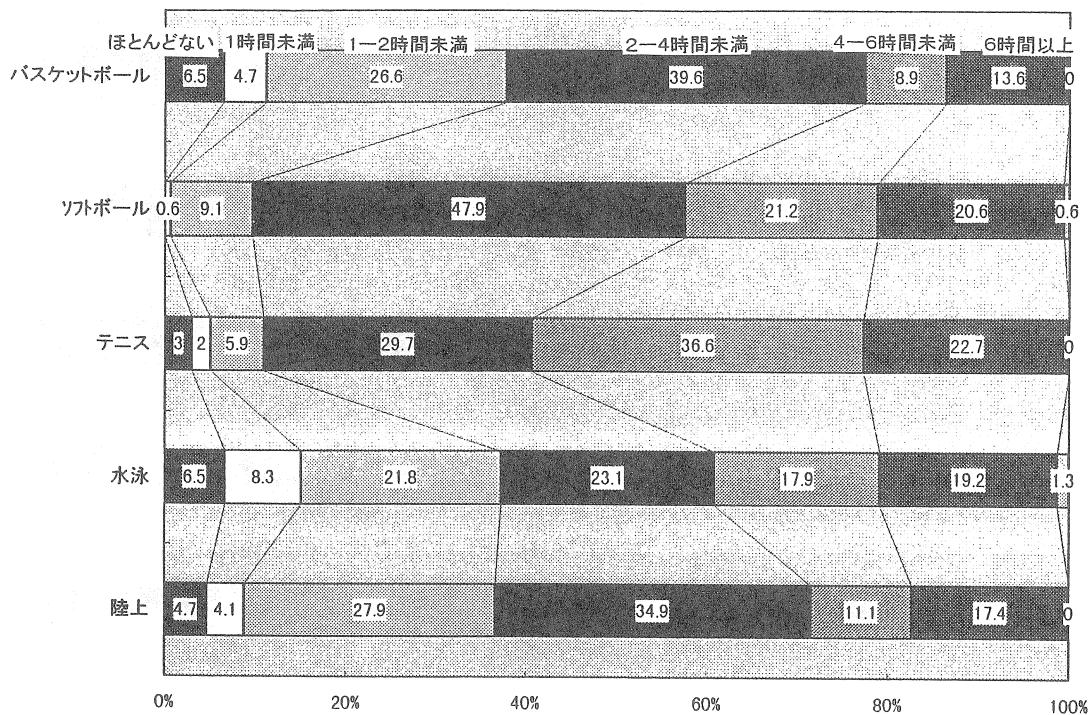


図 6-12 QOL-余暇活動に使える自由時間の程度-休日

るのに対して、「4-6時間未満」ではテニス男性が10.9%，同女性が24.3%，さらに「6時間以上」ではテニス男性が10.9%，同女性が21.6%と性差によって自由時間の程度が明らかに異なっている。また、水泳についても同様に、水泳男性で「1-2時間未満」と回答した者が44.9%，同じく女性で28.2%であるのに対して、「4-6時間未満」では水泳男性がわずか5.1%，同女性が21.8%と明らかに女性の方が自由時間の程度が高くなっている。

したがって、全国大会上位入賞者の平日の自由時間の程度は、やはり性差による社会的地位やそれに付随する仕事の内容に影響されているが、とくにテニス女性や水泳女性の平日における自由時間の程度が高いことが示されている。つまり、テニス女性や水泳女性の活動は、他種目に比べ平日型活動タイプになりやすく、そのことが活動頻度を高める条件になっていると考えることができるだろう。

3. 2 休日（図 6-12）

図 6-12により、余暇活動に使える休日の自由時間の程度は、全種目を通じて平日の自由時間を上回っており、「6時間以上」がテニスの22.7%を筆頭に一番低い割合のバスケットボールでさえ13.6%となっている。

種目別にみると、明らかにソフトボールとテニスの自由時間の程度が高く、とくにソフトボールは平日の自由時間の程度と比べると休日型活動タイプであることがわかる。テニスはどちらかと言えば平日型・休日型両活動タイプであり、どちらの自由時間の程度も高い。ただし、図には示されていないが、休日における自由時間を「6時間以上」と回答したテニス男性は25.0%，同女性は18.9%と男性の方の割合が多く、平日の結果とは逆になっている。これは、水泳の男女においても同様で休日における自由時間を「6時間以上」と回答した水泳男性は26.9%，同女性は11.5%と男性の方が割合が多くなっている。

このように、全般的に休日の自由時間は平日の

それより多く、休日にまとまったスポーツ活動を行なう傾向が見受けられるが、とくにソフトボールにその傾向が強くみられる。第4節で示されたソフトボール参加者における「のめり込み」意識の強さや先のQOLの程度の低さを考えると、休日が多くとれる余暇時間にも練習が集中して行なわれ、あまり他の活動や休息にそれが振り向けられていない状況が推察される。それに対して、テニス参加者は平日・休日両活動タイプで自由時間が比較的多く、ゆとりのある活動をしているように思われる。

また、どちらかと言えば男性の方が休日型活動タイプであり、休日に集中して練習している様子がうかがえる。

3. まとめ

- 1) 本研究の対象となったチャンピオン志向の中高年スポーツ参加者は、種目を問わず非常に高いQOLの程度を示している。
- 2) しかし、種目別に見てみると、バスケットボールとソフトボールのQOLの程度が比較的低い傾向があり、「のめり込み」意識の程度との関係からは、それがあまり高すぎても、低すぎてもQOLが低くなる傾向が示唆される。
- 3) 仕事重視型の余暇観が比較的強いのはソフトボールであり、これも「のめり込み」意識の程度と関連していると考えられる。
- 4) 余暇重視型の余暇観が比較的強いのはテニスであり、とりわけ女性のそれに高い傾向がみられる。水泳の男女差についても同様なことが言えることから、女性の方に余暇重視型の余暇観

が比較的強い傾向がみられると言えよう。

- 5) 余暇活動に使える平日の自由時間は全種目を通じて1~4時間程度だが、テニスが比較的自由時間の程度が高い。また、女性の方が男性より自由時間の程度が高い傾向にあり、平日型活動タイプである。
- 6) 余暇活動に使える休日の自由時間は全種目を通して平日のそれを上回っており、「6時間以上」が各種目ともほぼ20%前後を占めている。とくに、ソフトボールの自由時間の程度は高く、休日型活動タイプで、集中して練習が振り向けられている様子がうかがえる。それに対してテニスは、平日・休日両活動タイプであり、比較的ゆとりのある活動をしている様子がうかがえる。また、男性の方が女性より自由時間の程度が高い傾向にあり、休日型活動タイプである。

【注および文献】

- 1) 金子らによれば、QOLはその対象として生活者自身の質と生活者周辺の環境の質に大きく分けてとらえることができると言う。また、前者はさらに生活者の意識と生活者の状態に分けてとらえることができるが、本研究では生活者の意識を対象としてQOLの尺度項目を考えた。(金子勇・松本洋編著、『クオリティ・オブ・ライフ—現代社会を知る』、福村出版、1986.)
- 2) 多々納秀雄・橋本公雄・菊幸一・徳永幹雄・金崎良三、『健康度指標としてのQuality of Lifeに関する研究』、昭和63年度文部省科学研究費補助金（一般研究A）研究成果報告書、九州大学健康科学センター、1989.

7. スポーツ実施上の問題や悩み

報 告 者 加藤 爽子¹⁾

スポーツを継続していく上での問題点や悩みについて、自由記述の中を11項目に分類した。①健康・体力、②指導者、③施設、④練習方法・練習内容、⑤両立(仕事、家庭)、⑥経済的な負担、⑦練習時間の確保、⑧仲間、⑨行政、⑩マナー、⑪その他(大会に関すること)である。

調査対象者の43%がスポーツをする、あるいは継続したりする上での問題や悩みをもつ。競技者の半数近くが問題や悩みをもちながら、週3日以上の練習をし、大会に参加している。その問題や悩みの第一にあげられるのは、男女とも健康・体力(32.3%)であり、次いで、施設(19.7%)に関するここと、仕事や家庭とスポーツとの両立(12.7%), 練習時間の確保(7.9%), 仲間(7.3%), 指導者に関するここと(5.8%), 経済的な負担(4.2%), 大会開催について(2.7%), 行政のバックアップ(0.9%) マナー(0.9%)の順であった。

さらに、男女別に見ると、男性では健康・体力(28.4%)に続いて、施設(23.7%), 練習時間の確保(8.9%), 経済的な負担(8.3%), 両立(7.1%), 仲間や指導者(各5.9%), 日本で国際大会を開催してほしいと言ったようなことや、マスターズ大会のような中高年向けのスポーツ大会の情報など(4.1%), 練習内容や方法(1.2%)であった。

他方、女性の場合には、健康・体力(37.9%), 両立(18.6%), 施設(15.5%), 仲間(8.7%), 練習内容や方法(7.5%), 練習時間の確保(6.8%), 指導者(5.6%), 大会に関する情報(1.2%), 経済的な負担や行政のバックアップ(各0.6%)であり、男性とは問題や悩みの順が異なる。男性に比べて女性の場合には、家庭や仕事との両立、家庭の協力、理解を得ることが難しいのが第二位にあがっている。男性が二位あげている「練習時間の確保が難しい」という裏に、女性と同様、仕事な

どとの両立が難しいために練習時間の確保が難しくなるともいえよう。

健康・体力については、健康の維持、加齢に伴う体力の低下、スポーツをすることで生じるスポーツ障害(腰痛・ケガ等)、運動強度が健康に与える影響、練習は必要だが体力的には限界といったことなど、スポーツ実施にあたって起こる不安を訴えることが多く見られた。加齢に伴って練習意欲の低下を訴えることも見られた。また、別の障害(聴覚障害)があるための不安や、専門のスポーツドクターを望む声があった。

施設については、練習場所がないことの不満や公共施設、廉価で利用しやすい施設、専門種目を練習できるような施設(例えば、フィールド競技専門の練習施設)、施設の整備を望む声があった。

男性があげた問題や悩みの一つである「経済的な問題」についてみてみる。経済的な負担が増加すればスポーツを継続することが難しくなる。日常の練習の際にも施設使用料等を支払うのはもとより、全国大会のような大きい大会への参加のためには、大会参加費に加え旅費、宿泊費、その他諸経費が必要であり、経済的な負担が大きくなる。種目によっては、全国大会出場の際には協会からの交通費や宿泊費等の援助が一部あるところもあるという。しかし、リタイアした高年者にとっては、経費の負担は大きい問題となる。日常のスポーツの練習はもとより、大会等への参加がスポーツを継続させるための励みの一つともなる。大会へ参加すると、その時だけ顔を合わせる仲間の存在が生ずる。相手が元気に参加しているのを見ると自分もがんばろうという気が起ると参加者は述べている。これらのことからも中高年が健康で、余暇生活を充実させる一因となっているようなスポーツ、そのスポーツを継続させてためには行政

1) 東京学芸大学附属高校大泉校舎

表7-1 スポーツを継続していく上での問題点や悩み（重複回答）

(* p < 0.05)

| | 男性41.3%(169) | 女性45.5%(161) | 備考 |
|-----------|--------------|--------------|--|
| 健康・体力 | 27.2(46) | 37.9(61) | ・加齢とともに健康不安、スポーツ障害 |
| 指導者 | 5.9(10) | 5.6(9) | |
| 施設 | 23.7(40) | 15.5(25) | ・利用しやすい施設、競技専用の練習場、身体のケアができる施設 |
| 練習方法・内容 | 1.2(2) | 7.5(12) | ・至適練習量、運動強度、ルールがわからない、 |
| 両立 | 7.1(12) | 18.6(30) | |
| 仕事 | 3.6(6) | 9.9(13) | |
| 家庭 * | 3.0(5) | 11.8(19) | ・家庭の理解、協力 |
| 経済的な負担 | 8.3(14) | 0.6(17) | ・施設使用料、大会参加費、 |
| 練習時間の確保 | 8.9(15) | 6.8(11) | |
| 仲間 | 5.9(10) | 8.7(14) | ・練習相手、よい人間関係、チームにとけこめない |
| 行政のバックアップ | 1.2(2) | 0.6(1) | ・行政の関心が薄い、国際大会への支援 |
| 大会 | 4.1(7) | 1.2(2) | ・中高年向きの大会の開催や種目の設定、国際大会の日本開催、審判のレベルの向上 |
| マナー | 1.8(3) | 0.0(0) | |

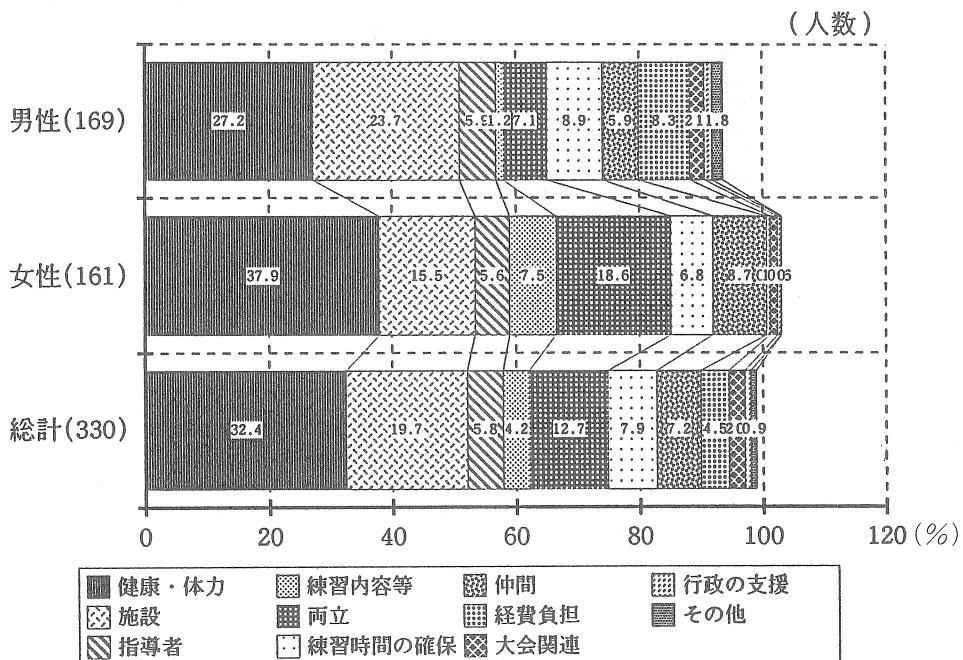


図7-1 種目別・男女別スポーツ実施上の問題や悩み

の直接的、間接的支援を検討することが今必要な時期になっているといえよう。

スポーツを継続させるための条件の一つに「仲間」の問題がある。よりよい人間関係を築くのが難しいという悩みや、対人競技や集団種目の特性からテニスのように練習相手がほしい、仲間がほしいというような悩みがある。勝利志向型のスポーツから加齢にともない年齢・体力に応じたス

ポーツの楽しみ方へと変化する。プレイを楽しんだり、交流したりするには共感できる仲間の存在は、スポーツを継続する原動力ともなることから、競技者自身の問題として片づけるのではなく、指導者やクラブ関係者はこのことにも配慮する必要がある。

「練習内容や練習方法」についての問題は、至適練習量、練習強度への疑問、練習メニューの決

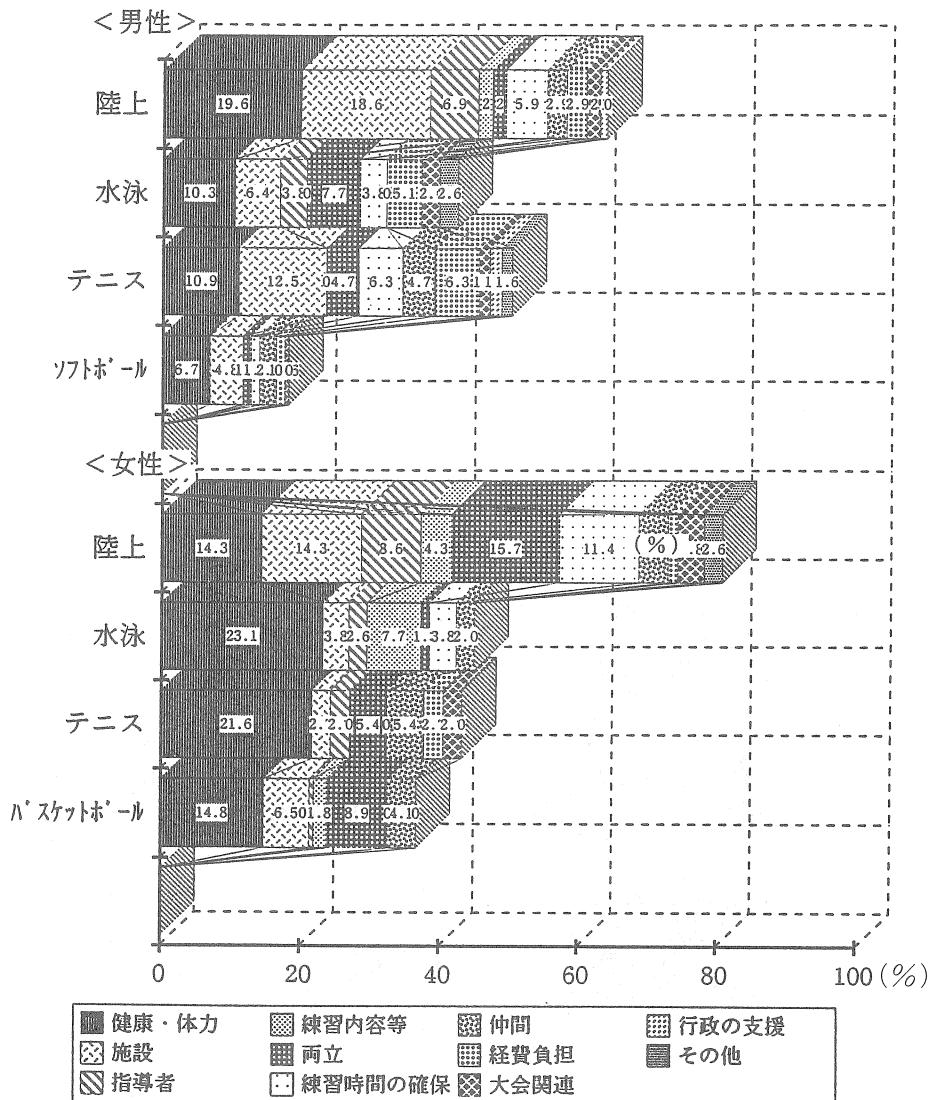


図 7-2 種目別・男女別スポーツ実施上の問題や悩み

定方法がわからない、競技のルールがわからないなどといったことや、個人的に練習をする際に参考となるような中高年向きの専門書の不足があげられた。さらに、講習会を年数回に増やしてほしいという声があり、練習内容や方法について、適切な指導・助言の指導者や講習会などの開催が必要となる。

「大会に関するこ」については、日本でも国際大会を開催してほしい、中高年向けの大会を開催してほしい、マスターズに関する情報を知りた

い、審判のレベルアップなどといったようなことがあげられていた。中高年の競技者は、中高年向けの大会等に关心が高いことからこれらの情報が少ないとすることはスポーツの実施にマイナスとなる。高齢化にともない増加する中高年のスポーツ爱好者のニーズに応えられるようにマスターズ大会を開催している競技団体、スポーツ団体はもとより、各競技団体が更なる中高年対策を検討する必要がある。

「行政のバックアップ体制」について、国際大

会や大会への財政的な援助や指導者の育成、施設の利用と直接的にも間接的にも行政のバックアップは必要である。行政や教育委員会の関心が薄いといった不満、公共施設の提供など行政レベルで解決可能な支援体制を検討していく時期であろう。

「その他」に分類したものでは、クラブや若者のスポーツマナーに対する苦情があげられていた。スポーツマナーの問題は、人間関係をまずくし、それが原因でスポーツから遠ざかるなどマイナスに働く。年齢を重ねた大人を相手にスポーツマナーについて云々することは大変難しいが、クラブ運営円滑化のためにも一考を要する。（表7-1、図7-1、7-2）

ま と め

1) 今回の調査対象者の43%がスポーツを実施する上での問題や悩みをもっていた。問題点や悩

みのトップにあげられるのは、「健康・体力」であり、ついで「施設」「両立」「練習時間の確保」「仲間」「指導者」「経済的な負担」「大会に関すること」「行政のバックアップ」であった。

2) 男女別にみると、男性の第2位にあげられるのは「施設」に関する事、ついで「練習時間の確保」「経済的な負担」「両立」「仲間」「指導者」、日本でも国際大会を開催してほしいという「大会に関する事」「練習内容や方法」がわからないといったことがあげられていた。女性の第2位には、「両立」「施設」「仲間」「練習内容や方法」「練習時間の確保」「指導者」「大会に関する事」「経済的な負担」「行政のバックアップ」であり、男性と女性では、問題や悩み等の傾向が若干異なる。

第3章 まとめと提言

- (1) 中高年競技者のスポーツ活動は、その日常のスポーツ活動から考察すると、想像以上に活発であるといえよう。しかしながら、そこには種目による相違、とりわけ「個人種目」と「集団種目」における相違が多々見られる。したがって、中高年競技スポーツの振興をより図るには、何にもまして「種目による対応」が望まれることになる。今回の調査からは、中高年競技者自身が「どのような対応」が望んでいるかは明確ではないが、種目別のきめ細やかな対応が必要であろう。
- (2) 調査対象者を全国大会上位入賞者としたこともあり、大会レベル別に中高年の全国大会参加者状況は、全国大会、都道府県大会、市町村大会、ブロック別大会、国際大会の順であった。経済的な面からか、国際大会への参加は少ない。個人種目が集団種目に比べて多く、集団種目の場合の参加が難しい傾向がある。日程の調整、経済的な面での援助など条件整備が整えば、参加者も増加し、スポーツを通じた交流がより図れるであろう。中高年向きの大会としてマスターズ大会が各種目開催されるようになったことから、中高年向きの大会は予選段階を経ないで、一挙に全国大会のレベルとなることもある。高齢化社会に向かって、中高年の数が増加する傾向にある。付随してスポーツ人口も同様に増加し、競技参加者の増加は施設使用等の物理的な条件から予選を行わざるを得なくなる。チャンピオンスポーツを目指し、勝利志向型から、自己実現型のスポーツライフへとスポーツへの志向が変化している大多数の中高年に対しては、水泳のマスターズ大会のような年齢を段階的に分けて大会を開催するなどの工夫が必要となる。
- (3) スポーツ大会は、市町村レベルの大会からはじまり、都道府県レベル、ブロックレベル、全
- 国レベル、国際レベルの大会と大会の規模が大きくなるにつれ、それに対応できるだけの技能、経費負担、時間的なゆとりが必要となる。中高年では、加齢という条件のもと、健康・体力に応じたスポーツライフが求められる。今日では、中高年だけのマスターズ大会がいろいろな種目で行われるようになつたが、大会が高度になるとそれに応じて、技能のレベルアップのための練習時間や練習のための施設の確保、経費負担の増加など、個人を取り巻く環境の整備とともに、行政の支援体制（施設の整備、経費等の援助）がますます重要な要素となる。
- (4) マスターズ大会を主催しているのは、主にマスターズ協会や商業スポーツクラブ等が多い。水泳の場合、マスターズ協会主催・共催の大会は年間73回であるが、その多くは自協会か商業スポーツクラブが主催しており、都道府県・市町村の主催は少ない。行政の主催といった直接的な参加だけでなく、財政的な支援、公共施設の提供など間接的な支援が望まれる。
- (5) 過去3年間の競技成績を①優勝回数、および②入賞回数からみると、種目によって異なる。優勝回数が多いのは、種目では水泳が圧倒的であり、ついで陸上と個人種目が目立った。種目の表彰方法によっても異なるが、メダリストが多い。メダルもらう、表彰される、ランキング表に掲載されることは、競技者にとっても自己満足だけでなく大きな励みであり、それがスポーツを継続させることに影響を及ぼすことは見逃せない。
- (6) スポーツを行う意義や目的は、チャンピオン勝利志向型から、「ベストを尽くす」といった自己実現型や、「プレイを楽しむ」といった楽しみ追求・充足型、「交流」などといった方向へ変化

してきている。中高年のスポーツを行う目的や意義の第1位は「ベストを尽くすこと」である。これは、中高年のライフスタイル・生真面目さが現れているということであり、特徴的なことである。それもよいが、プレイを楽しんだりスポーツをする仲間との交流を図ることなどの楽しみ的な要素があっても悪くない。種目によつては、まだ勝利志向が強いところもあるが、加齢によって体力の低下は否めず、年齢・体力に応じたスポーツの楽しみ型、仲間との交流などを大切にしていくことがスポーツを継続させる条件にもなる。

- (7) 全国大会の上位入賞者の練習状況からみると、週3日以上で、1回1～2時間の練習時間をとることであった。全国大会レベルの出場を目指すためのスポーツライフをみると、この調査結果とは多少異りがある。あるテニスの競技者の練習は、毎日3回（朝、昼、夜）明けても暮れてもスポーツ漬けで、途中オーバーユースによるスポーツ障害（テニス肘）を起こしながらも全国大会参加という目標に向かって練習を重ねていった。技術的に全国大会レベルに到達すると年齢・体力に応じて多様な練習内容、練習時間、練習日数を組むことが可能になるから週3日以上で、1回1～2時間程度の練習となる。スポーツを継続する上で、練習日数や練習時間の確保は重要である。中高年にとて無理なくスポーツを継続するための妥当な練習時間や練習日数が個人の状況によって異なることが必要である。
- (8) 中高年の競技者のスポーツ経験をみると、女性スイマーにおいてユニークな傾向がみられる。それは、40歳以降の中年期において、水泳を始めた者が多く、高齢期に至るまで活動を継続していることである。それゆえ、水泳競技は中年期から開始しても十分に競技生活を楽しめる種目であるといえる。
- (9) 中高年の競技者にとって、中年期以降、スポーツ活動が生きがいになっており、重要な生活

の一部となっている。中高年の競技者にとって、スポーツ活動により、生活の質（Quarity of Life）が高まっていることが明らかである。それゆえ、中高年の競技者に対する社会的支援および家族の支援が求められる。

- (10) 生活の充実度を示すQOLと「のめり込み」意識との関係は、本研究において明確にされたわけではないが、ソフトボールやバスケットボールにみられるように「のめり込み」意識が高すぎても低すぎてもQOLは低い傾向にあることから、チャンピオン志向の中高年競技者にとって生活の充実度を増すためには、適度なスポーツ活動に対する「のめり込み」意識が必要であるように思われる。
- (11) チャンピオン志向の中高年スポーツ参加者は、全般的にスポーツ活動に対する強い生きがいを感じているが、それがややもすると過度な練習や試合への集中、あるいはスポーツ快適環境へのこだわりといった「のめり込み」意識を醸成する方向をもつことになるので、大会の持ち方や運営の仕方などの工夫をしたり、適切な指導者の配置やその研修等が必要である。
- (12) 「のめり込み」意識の内容をみると、たとえばテニスでの練習の排他性の強さや水泳を含めた関連出資への許容の高さなど、種目特性による「のめり込み」意識の影響が見られる場合がある。特にそのような特有の「のめり込み」意識の影響がみられやすい種目については、指導者や仲間同士でネガティブな影響が及ばないよう配慮が必要であろう。
- (13) 「練習や試合への集中」といった因子に代表される「のめり込み」意識は、中高年に限らずチャンピオン志向の競技者にとって共通に見られる意識と思われる。しかし、本研究の対象である中高年層においては、例えばソフトボールの場合にみられるように、以前から比較的早期に行われていた野球特有の経験世界に影響されて、特にそのような傾向が他の種目より強く現

れている様子がうかがえる。したがって、中高年者の学校時代の種目経験がその後のチャンピオンシップ型のスポーツ活動にも影響を与えていていることから、当該競技者がいつ、どのような種目を経験し、どのように社会化してきたのかを配慮して、そのような経験種目やレベルに特有な過度な「のめり込み」意識が醸成されないように指導することは重要なことのように思われる。

- (14) チャンピオン志向の中高年スポーツ参加者が過度な身内意識や他者に対する排他意識を持ちやすいのは、水泳の場合にみられるように、これまであまりスポーツ経験をしてこなかった中高年者が比較的遅くに1つのスポーツ種目に社会化された場合に生じしやすいうふれられる。したがって、そのようなスポーツキャリアの特性を考慮しながら、一種目一レベルのスポーツ経験だけでなく、多様な種目間やレベル間との交流の機会を持つことが必要であろう。
- (15) チャンピオン志向の中高年競技者は余暇も仕事も大切にする中間型が多いが、余暇重視型は比較的女性に多くみられる。より一層ゆとりを持ったチャンピオン志向の多様化と余暇重視型が関連を持つとすれば、このようなスポーツ活動においても女性的な余暇重視型の原理を尊重していく方向がさらに考えられてよかろう。
- (16) 中高年の男性競技者においては、30歳頃の働き盛りには活動量が低下している。また、集団種目の競技者（ソフトボール、バスケットボール）においては、社会人になってから、週1日型がほとんどである。競技活動を継続するためには、平日夜間でも活動できるようなスポーツ環境整備が必要である。具体的には、夜間照明設備の設置や、平日夜間における学校開放の促進、また、地域スポーツクラブの整備があげられる。
- (17) また、中高年男性競技者の働き盛りの活動量の減少の理由に、ワークスタイルの改善もあげ

られる。それは、競技活動を継続させるには週末だけのスポーツ活動から、平日においても活動できるようなワークスタイルの見直しを図るべきではないだろうか。検討する時期にきていよう。

(18) 余暇活動に使える自由時間の程度には性差と種目差がみられるが、チャンピオン志向が強い男性ほど仕事重視型であることと相俟って、休日に集中して練習する傾向がみられる。本研究では生活の支障に関する具体的な調査はしていないが、さらに自由時間の確保の仕方をなるべく平日にも移行する工夫を行うことによって、1週間の平均的な自由時間の確保とスポーツ活動へ当てる時間とのバランスを保つ必要があるようと思われる。

中高年のスポーツ競技者が、競技生活を継続していくためには、地域における活動基盤となる組織の整備が不可欠である。現状は、クラブ組織の維持が困難になっている種目もあり、地域におけるクラブ組織の整備が重要である。

(19) スポーツを実施する上での問題点や悩みの中では、第一に健康・体力の問題があげられていた。中高年のスポーツ競技者の中には、スポーツ障害で悩むものが多く、スポーツ障害の予防と治療、およびリハビリといった専門のスポーツドクターや支援体制の整備が求められる。

(20) 施設については、民間のテニスクラブでは、地価税の問題が経営に影響しており、経営者の世代交代における相続税の負担から、閉鎖せざるをえない施設があるとの指摘があった。公共施設だけでは、需要に追いつかないこともあります、税制上の優遇措置が検討されるべきである。また、北国に在住する競技者から、不十分な室内スポーツ施設の改善が求められている。インドア施設の整備とともに、テニスにおいては簡便で低価格のドーム型テントの開発が望まれるなど、施設の整備については工夫が求められている。

- (21) スポーツをする上での問題や悩みの中に「仲間」があげられていた。よい人間関係を築くのが難しいとする悩みはスポーツを行っている当事者だけでなく、スポーツクラブや指導者などの配慮が必要となる。
- (22) 中高年競技者が現在の活動の基盤を築いているのは、中学校や高等学校における部活動がそのほとんどをしめる。それゆえ、青年前期(中・高等学校)における定期的なスポーツ活動の環境整備は重要である。現在少子化に生徒数の減少により、集団スポーツの部活動が困難になっていたり、顧問教員の不足や過重負担が問題になっている。学校と地域社会が共に関わることができるようなスポーツ制度の整備が求められる。
- (23) 60才を過ぎれば、自営業以外は余儀なく現役からリタイアすることになると、減収は避けられない。したがって中高年がスポーツをするためには、経費が妥当なものでなければスポーツの継続は望めない。次に時間的、経済的なゆとり生まれても、スポーツを継続させていくには無理のない練習量(練習時間と日数)が求められる。

(嘉戸 僥 宮内 孝知
加藤 爽子 山口 泰雄
菊 幸一)

[資料] 中高年のスポーツ参加に関するアンケート調査用紙

整理番号

中高年のスポーツ参加に関する調査

調査ご協力のお願い

本調査は、比較的熱心にスポーツを行っておられる中高年の方々を対象に、その活動の現状を明らかにし、より豊かな生涯スポーツ活動の基礎資料を得るために行われるものであります。お答えいただいた内容は、統計的に処理をしますので、あなたご自身や団体にご迷惑をおかけすることは絶対にございません。どうかありのままをお答えいただき、調査にご協力くださいますよう、心よりお願ひ申し上げます。

平成8年10月

(財)日本体育協会スポーツ科学専門委員会 委員長 真野 高一
同委員会プロジェクト代表 東京学芸大学教授 嘉戸 憲

問1. あなたは、過去1年間に以下のレベルの大会にどの程度参加しましたか？
それぞれの「大会レベル」の「参加回数」に○をつけてください。

| 「大会レベル」 | 「参加回数」 | |
|----------------------------------|------------------------|----|
| 1) 國際レベルの大会 ----- | 1回 ----- 2回 ----- 3回以上 | なし |
| 2) 全国レベルの大会 ----- | 1回 ----- 2回 ----- 3回以上 | なし |
| 3) ブロックレベル (関東、近畿など)の大会 ----- | 1回 ----- 2回 ----- 3回以上 | なし |
| 4) 都道府県レベルの大会 ----- | 1回 ----- 2回 ----- 3回以上 | なし |
| 5) 市町村レベルの大会 ----- | 1回 ----- 2回 ----- 3回以上 | なし |

問2. あなたは、全国大会や国際大会で、過去3年間に何回優勝したことがありますか？
また、その優勝回数を含めて上位入賞(8位以内)は何回ありますか

- 1) 過去3年間の優勝回数 () 回
2) 過去3年間の上位入賞(8位以内)回数 () 回

問3. あなたが、全国大会や国際大会に出場する意義や目的は何ですか？
以下の4つの項目の中で、もっとも重視していると思う順にその項目の番号を入れてください。

1. 試合に勝つこと 2. ベストを尽くすこと 3. プレイを楽しむこと
4. 交流し、ふれあうこと

(重視している順位)

- 1位() • 2位() • 3位() • 4位()

問4. あなたは、中高年（おおむね40歳以降）になって出場した全国大会や国際大会の種目以外に何かスポーツを行っていますか？
また、行っているとしたら、その種目名は何ですか？

1. 出場した全国大会の種目しか行っていない
2. 出場した全国大会の種目以外に1種目を行っている
(種目名)
3. 出場した全国大会の種目以外に2種目以上を行っている (*主な2種目のみを以下に書いてください)
(種目名) (種目名)

問5. あなたは、ふだん運動やスポーツをどの程度行っていますか？

1. ほぼ毎日
2. 週に3日以上(年151日以上)
3. 週に1~2日(年51~150日)
4. 月に1~3日(年12~50日)
5. 年に1~3日
6. わからない

問6. あなたが出場した全国大会や国際大会の種目（専門種目）について、平均して1週間のうち何日程度、また1回につき何時間程度、練習を行っていますか？

- 1) 1週間のうちの練習日数 平均()日
- 2) 1回の練習時間 平均()時間

問7. 運動やスポーツを行うための年間の費用は、おおよそいくらぐらいですか？

交通費、大会参加費、宿泊費、用具費、クラブ会費など、かかると思われる費用をすべて含めて答えてください。

約()万円

問8. あなたは、運動やスポーツを行うために、クラブに所属していますか？

1. 正式に所属している
 2. 正式に所属はしていないが、仲間はいる
 3. 所属していない
- ↓
<以下、1か2と回答した人のみ問8-1、2、3に答えてください>

問8-1. そのクラブ（仲間）の人数は、およそどれくらいですか？

()人

問8-2. 男女一緒に活動するクラブ（仲間）ですか？

1. はい
2. いいえ
3. どちらともいえない

問8-3. 活動する目的や能力が、ほぼ一致しているクラブ（仲間）ですか？

1. はい 2. いいえ 3. どちらともいえない

問9. あなたが、運動やスポーツを行う場所や施設はどのようなところですか？

あてはまるものすべてを選んでください。

1. 近所の空き地や広場
2. 校区の学校施設
3. 市町村立あるいは県立の公共スポーツ施設（体育館・運動場など）
4. 商業スポーツ施設
5. 企業が所有するスポーツ施設
6. その他（ ）

問10. あなたは、スポーツ活動に関する以下の項目をどのように思いますか？

それぞれの項目について、あてはまる数字のところに○印をつけてください。

非常にそう まあそう あまり 全く
思う 思う 思わない 思わない

1) スポーツ活動は最高
 の生きがいである 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4

2) スポーツ活動に対する多
 少の出費はやむをえない 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4

3) 仕事や家のことと練習が重
 なったとき、練習を優先する 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4

4) 周囲は自分が勝つことを
 期待している 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4

5) 試合が近づくと試合のこ
 とで頭がいっぱいになる 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4

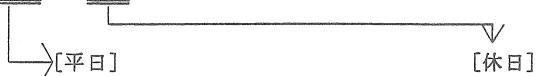
6) 決められた練習は
 絶対に休むべきでない 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4

7) 技能レベルの違う人とは
 練習したくない 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4

8) クラブや他のスポーツ仲間
 を身内だと感じる時がある 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4

問11. あなたが、余暇活動（スポーツ活動を含む）に使える自由時間は1日どれくらいありますか？

平日と、休日の両方について答えてください。



- | | |
|--------------|--------------|
| 1. ほとんどない | 1. ほとんどない |
| 2. 1時間未満 | 2. 1時間未満 |
| 3. 1時間～2時間未満 | 3. 1時間～2時間未満 |
| 4. 2時間～4時間未満 | 4. 2時間～4時間未満 |
| 5. 4時間～6時間未満 | 5. 4時間～6時間未満 |
| 6. 6時間以上 | 6. 6時間以上 |

問12. あなたは、余暇や仕事に関する次のような考え方についてどのように思いますか？

もっともあてはまる内容を1つだけ選んでください。

1. 仕事をするために余暇をとる
2. 余暇を楽しむために仕事をする
3. 仕事も余暇も同等に考えている
4. わからない

問13. あなたは、次のような項目についてどのように思いますか。それぞれもっともあてはまる番号に○をつけてください。

非常にそう まあそう あまり 全く
思う 思う 思わない 思わない

1) 全体として、今の生活に 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4

「生きがい」を感じている。

2) 現在の自分は、他人に対し 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4

て誇りがもてると思う

3) 私は今の生活に満足している 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4

4) 家庭や職場その他において、

「自分は必要とされている」と 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4
思う

5) 毎日を楽しく生活している 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4

6) 私は他人と比較して決して恥ずかしくない人生を歩んでいる 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4

- 非常にそう まあそう あまり 全く
思う 思う 思わない 思わない
- 7) 「幸福である」と思う 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4
- 8) 精神的に「豊かでゆとりのある生活」をしていると思う 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4
- 9) 私は、生涯の中で「これだけはやりとげたい」と思うものがある 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4

問14. あなたは、以下の年齢の頃、どの程度運動やスポーツ（学校での体育や体操等の授業以外で）実施していましたか？ あてはまる番号に○をつけてください。

| | よくした (週3日以上) | 時々した (週1回程度) | あまりしなかった (月1・2回程度) | ほとんどなし (それ以下) | 該当しない |
|------|-----------------|-----------------|-----------------------|------------------|-------|
| 20歳頃 | 1 ----- | 2 ----- | 3 ----- | 4 | 9 |
| 30歳頃 | 1 ----- | 2 ----- | 3 ----- | 4 | 9 |
| 40歳頃 | 1 ----- | 2 ----- | 3 ----- | 4 | 9 |
| 50歳頃 | 1 ----- | 2 ----- | 3 ----- | 4 | 9 |
| 60歳頃 | 1 ----- | 2 ----- | 3 ----- | 4 | 9 |

問15. あなたは、学校在学中に部活動やその他の定期的なスポーツ活動を行っていましたか？

小・中・高・大学別に下記の1.～3.の番号を、表の「定期的なスポーツ活動の有無」の欄に、記入してください。

また、「1. 行っていた」と答えた方は、その主な種目を1つだけ「種目」の欄に書いてください。

1. 行っていた 2. 行っていない 3. 不明・該当しない

| | 定期的なスポーツ活動の有無 (*上の1.～3.の番号を記入) | 行っていた主な種目名 |
|--------|-----------------------------------|------------|
| 1. 小学校 | | |
| 2. 中学校 | | |
| 3. 高校 | | |
| 4. 大学 | | |

<最後に、あなたご自身のことについて、おたずねします。>

問16. 性別は？

1. 男 2. 女

問17. 満年齢は？

(満 歳)

問18. 最終学歴は？

- | | |
|-----------|------------|
| 1. 小学校卒 | 5. 高校・高専卒 |
| 2. 高等小学校卒 | 6. 旧制高校卒 |
| 3. 中学校卒 | 7. 大学・大学院卒 |
| 4. 旧制中学校卒 | 8. その他() |

問19. ご職業は？

まず、以下の a. 自営業主、b. 家族従業者、c. 被雇用者、d. 無職の4つの大項目から1つを選び、次にその項目の中からまた番号を1つ選んでください。

a. 自営業主

1. 農林漁業 2. 商工サービス業 3. 自由業

b. 家族従業者

4. 農林漁業 5. 商工サービス業

c. 被雇用者

6. 管理職 7. 専門技術職 8. 事務職 9. 労務職

10. パート雇用

d. 無職

11. 専業主婦 12. その他の無職 13. わからない・不明

問20. あなたがスポーツを継続して実施する上で、問題点や悩みがあれば、ご自由にお書きください。

※以上で質問を終わります。

長時間にわたり調査にご協力をいただき、ありがとうございました。

